

『旅、そのとき僕らは』



朔太郎

ピピピピ、という機械音が部屋中に鳴り響く。僕は反射的に枕元に置いてある目覚まし時計に手を伸ばし、ほとんど叩くようにその音を止める。突然動作を止められた目覚まし時計は少し怒っているようにも見えたが、僕はそれには構わず携帯電話のディスプレイを表示させる。二件のくだらないアプリからのお知らせと、今日の天気予報の通知が僕の顔を刺すように照らす。

「少しだけでも、寝た方がいいわよ」と言われてからの記憶がない。昨夜は何をしていたのだろう。何もしていない気もするし、何かちょっとした出来事があった気もする。何かとんでもないことをしでかしたという記憶は幸いなことに無い（と思う）。何処からが夢で何処からが現実なのかを把握するにはあまりにも眠過ぎた。眠過ぎると多くの人々がそうであるようにまったくもって頭が働かない。九九の七の段くらいなら自信を持って間違えられる気がする。もしかしたら八の段も――。

僕は眠すぎる頭を現実に引き戻すために、記憶をひとつひとつそこから辺りから手当たり次第かき集めることにする。一番遠い記憶はテレビの下もしくはクローゼットの下あるいはサニタリーのキャビネットの上の段あたりに押し込まれているようで、ここからは見えないし届きそうもない。仕方がないので手に届く範囲の物事だけを思い出すことにする。あとは後でどうでもなるだろう。どうにもならないことなら思い出すだけ損だ。面倒なことであれば思い出す必要もない。

横では妻が、まだ幸せそうな顔をこちらに向けてすすすやと眠っている。――妻？ そうか、僕は昨日結婚したのだ。昨夜どこか、昨日一日の記憶が剥がれ落ちていたとは――。

だんだんと記憶に輪郭がつき始める。ぼやけた記憶は漠然とした意思を持ち、徐々にその形を広げ成長しながらアメリカのように僕の脳を侵食し始める。何もない大地に草木が生え、広大な海原にほんの小さな生命が誕生し始めるように、少しずつ覚醒へと歩み出した僕は、昨日一日の流れを辿ってみる。まずは……そうだ、午前中に近くの役所に婚姻届を出しに行ったところから、僕たちの一日は始まったのだ。

7月4日 曇りのち雨

平日の役所は思いの外混雑していた。転入、転出、転居の届けを出す人々。納税証明書、出生、医療、福祉、国民年金、国民健康保険、子ども手当等の手続きをする人々。もしかしたら僕らと同じように、今日この日に婚姻届を出すひとたちも来ているかもしれない。あるいは離婚、死亡届、ということもある（縁起でもない）。あの男女はどうだろう。うん、幸せそうにお互いの目を見て語り合っている。今日が二人の門出だったらいいなあ、と僕は思った。あっちの女性は……少し不安そう。何かしらの受給手続きがうまくいくかの不安だろうか。では、あっちの……もうよそう。

そうこうしているうちに、自分の番号札が呼ばれ手続きが始まった。戸籍謄本、婚姻届、本人確認書類の提出。証明書の申請手続き、手続き用紙への記入。名前、ふりがな、捺印、生年月日、住所、保証人の名前、ひとつひとつ職員が指をさしながら内容を確認していく。それを二回ずつくらい続けたあと、「では手続きを始めます」と職員は言った。「あちらまでお待ちください、後ほど番号札でお呼びいたします」

まだ始まっていないような気がした。待機。僕はフロアに溢れた人々を見つめながら少し硬めのソファに腰をおろし、待ったをかけられたペットのように職員から呼び出しがかかるのを待った（実際に待ったをかけられたんだらう）。隣りではこれから妻になろうとしている彼女が、真剣な顔で缶コーヒーを飲んでいて、真剣な顔で缶コーヒーを飲むひとはあまりいない。缶コーヒーというのは、ほっとしたいときや、ぼうっとしたいときに飲むのに適しているのではないかと思うのだけど、そういうことを気にしている様子は彼女にはなかった。彼女がこの結婚を喜んでいるのか、あるいは特段喜んでいないのかも、その顔からは判断がつかなかった。しかし少なくとも嫌がってはいないようだった。その真剣な顔から伝わってくるのは、軽い緊張感のようなものだけだった。強張っているというわけではないし、肩の力も入っていない。ただ真剣なのだ。僕もちょっとくらい緊張した方がよいのかな、と思った。

しばらくすると受付から僕の名前が呼ばれた。名前？ `番号札をお呼びいたします、と職員は言った。しかし、呼ばれたのは名前だった。

手続き自体はすぐに終わった。呼ばれて書類を手渡されたただけだった。あんまり早く終わったものだから、果たして僕はきちんと結婚できたのか不安になったくらいだった。しかし、最後に渡された提出用の婚姻証明書がその名の通り手続きが終了したことを証明していた。

「もうこれで終わりなの？」と彼女は言った。

「そうみただね」と僕は言った。「もうこれで終わりみただよ。あと書類を二十枚くらい書かされるのかと思ってたけど。それよりさ――」

「それより？」

「それより、番号札で呼ぶって言ったのに、名前で呼んでたよね？」

「それがどうかしたの？」

「いや、僕としては番号札でわざわざ呼びますよって最初に言うってことは、個人情報保護の観点からだと思ってたんだけど、結局名前で呼んだってことは、最初の番号札で呼ぶって言った意味が分からないな、と思って」

「うん」

「だからね、おそらくは呼び出しのルールとして `名前ではなく番号で呼びましょう、ってなってるはずなんだけど、それを徹底してないんじゃないかな、と」

「うん」

「いかにもお役所的だと思わない？ ルールを決めるってことは、それを決める背景があるわけで――」

「ねえ、`それより、お腹空かない？」

彼女は僕の問いには答えず（というかほとんど無視に近い状態、更に被せ気味で）、空腹を訴えた。

「う、うん、じゃあどこかでお茶でもしよっか」と僕は言った。

「いいねえ」と彼女は微笑んだ。

「近くに安くて美味しいコーヒー出す店があるんだよね」

「安くてまずかったら離婚事由になるわね」

「さっそくだね。あ、よろしくねこれからも」と僕は彼女に言った。

「こちらこそ！」と彼女も言った。

午後になると少し雲が始め、気がつけば雨が降り出していた。その雨はよほど注意していなければわからないくら

いの細かい雨で、いつの間にか電柱を濡らし、電線からぽたぽたと水滴を落とし、すううっと道路を灰色に染め、目に見えない何かの塗料のように僕らの前に降りそそいでいた。それはひっそりと音も無く地面に染み込んでいくため、始め僕は目に見えない何かがちらへと近づいてきているのかな、と思った。目に見えず、音もしない。気配はするが、姿が見えない。駐車場入り口付近に植えられた紫陽花の花だけが、その雨に喜んでいようだった。まあ、花が喜んでいのなら風情がある。

「雨だね」と僕は言った。

彼女は特に何も言わなかった。ただ僕を見てにやにやしているだけだった。これは碌なことを考えていないときの顔だな、と思った。

僕たちは近くのカフェで昼食を軽くすませた後、彼女は予約していた美容室に行き、僕は家で明日からの旅行の準備をすることにし、夕食の予約の時間まで一旦それぞれにわかれた。

ただいま、とドアを開け靴を脱ぎながら僕は玄関に向かってひとりで呟いた。結婚か、と僕は思った。結婚。結婚するということは、ただいま、と言って、おかえり、と返ってくるということだ。おはよう、と言って、おはよう、と返ってくるのも悪くない。にゃーにゃーとご飯を求められるだけじゃなく、うまくいけばご飯の用意が既にされているときもあるということだ。何か不思議な気持ちが僕の中にうまれていることに気付く。

「結婚なんてしないよ。だって、宝くじを買うようなものだけ」と二年前くらい前に言っていたのをはっきりと覚えている。

「相手のことを常に考えながら暮らすんでしょ？ そんなの一人がいいに決まってるけどねえ」とも言っていた。

それが今日結婚したのである。

ここまで考えが変わるなんて、嫌いだった食べ物がある日突然食べられるようになるのと同じことで、理屈なんてないのかもしれない。突然空が晴れることもあれば、次の瞬間に雨が地表を濡らすこともあるのだ。もちろん、理由を付けようと思えばいくらでもつけられる。運命だ、とかでもいい。とにかく僕は所帯を持ち、扶養家族が増えたのである。

「ふうん」とミシェルは鼻を鳴らしながら言った。「まあ、あなたのその優柔不断な考えや理論についてはいつか破綻するんじゃないかと思ってたけど、まさか結婚するとはねえ」

「絶対しない、とは言ってないからね。ゆっくり構えてたんだよ。ほら、座して待つ、って言うでしょ？ タイミングが大事なんだよ。その見極めがなかなか難しいんだけどね。まあ君にはわからないだろうね。猫には。猫だから」

「ふうん」とミシェルはまた鼻を鳴らした。「なるほど。ただ手をこまねいて死ぬのを待っていたわけね」

「え？ 死を？」

「そうよ。臆病なあなたにぴったりの表現を見つけたわね。`座して死を待つ、なんて。あれってそういうときに使うのよ」

「……うるさいな」

「けっこん？ あの人やさしいからよく好きです！（おやつくれますすし）」と朔太郎は言った。

「僕も好きだよ、朔ちゃん。これからも仲良くしてあげてね。できる？」と僕はミシェルの言ったことを受け流し（恥をかいた）、朔太郎に言った。

「よく、できます！（おやつくれれば）」

ピピピピ……。スヌーズになっていた目覚まし時計が、二度目のベルを鳴らし始める。どうやら記憶を辿っているうちにそのまま眠ってしまっていたようだ。

僕は目を大きく見開き思いっきり閉じ、それを何回か繰り返した後ゆっくりと首を回す。そして携帯電話の時計表示を確認し、洗面所に行き顔を洗って自分の顔を見る。目の下には、まるで先ほどまで穴ぐらの中に閉じ込められていたかのようなクマが宿命的に顔に染み込んでいる。心無しが目尻も少し垂れてきている。これは確実に老いてきているな、と思った。心は未だに若いつもりではあるけれど、僕は自分が思っているよりも歳を重ねているようだった。弱ったな、うまい具合に歳を取ることが出来れば良いのだけだ。

ずうっと顔を見ていても変わらないものは変わらないため、僕は諦めてキッチンに行き、冷蔵庫から野菜と卵と豆腐を取り出し、レタスときゅうりとトマトのサラダと豆腐と大根の味噌汁を作った。そして卵を三個使ってオムレツを焼き上げ、納豆、漬物をテーブルに出し、最後に炊き上がったお米を茶碗に盛り付けた。完璧な朝食だ。

「朔ちゃん、ちょっと起こしてきてもらっていいかな」と僕はカウンターの上でじいっと作業を見つめていた朔太郎に言った。

「カリカリくれますか？」と朔太郎は首を左に少し傾け真ん丸の目で僕の顔を見つめ直した。

「うん、起こしてきてくれたらね」

僕がそう言うと、朔太郎は、はい！ と良い返事をして、さっと寝室に走って行った。

「おはよう。ありがとう。ごめんね、用意させちゃって」

しばらくすると妻がまだ眠そうな目をこすりながら起きてきた。

「いいよ。この人暇だから」と僕が答える前に彼女と一緒に起きてきたミシェルが言った。「それより今日から九州だか何処かに行くんでしょ？ 早く食べた方がいいわよ。もうこんな時間だから」

「ミシェルちゃんはまだご飯もらってないの？」と彼女はミシェルを見つめた。

「何言ってるのよ」とミシェルは言った。「あなたに言ってるの。早くご飯食べちゃいなさい。食べないと私が戴くわよ。（その方がいい）」

「あの人にちゃんとご飯くーださい、って言わなきゃダメよ？ じゃあ私は食一べよっと。いただきます！」

「くーださい、なんて言わないわよ。私は誰にも媚びないの。そうやって生きてきたし、これからも変わらないわ」

何やら格好良いことをミシェルは言っていたが、妻は既に朝ご飯のことで頭がいっぱいようだった。

「まあ、カリカリでも食べなよ」と僕はミシェルに言った。

昨日の雨は夜明けと共にすっかり上がっていた。雲は薄く、空の端に追いやられ、その代わりに青い空が広がっていた。風はそよそよと窓から換気扇へと吹き抜け、快晴ではないがそれなりに天気は悪くなかった。窓から見える中庭のアイビーの葉も、まだ少し弱めの日光に包まれてほっとひと息ついているように見える。時間的に夏にしては気温もあまり高くない。この分だと順調に飛行機も飛ぶだろう。

「それじゃあ行ってくるね」と僕は二人に別れを告げた。

「いってらっしゃい！」と朔太郎は言った。

「くれぐれも気をつけることね」とミシェルは言い、斜めに僕を見上げた。「あなたの顔に若干死相が見えてるのが気になるけど」

「え？ 死相？」

「死ぬ相、と書いて死相よ」

「字はわかるよ」と僕は言った。

「大丈夫？ 神経があれだからかしら」と彼女。

「ああ、そういえば無神経だったわね」
「言いたい放題だな」と僕は言った。
「それって……………」

「もちろん、美味しくないよ朔ちゃん」と皆が口を揃えた。

『旅の始まりは服選びから』

7月5日 晴れときどき曇り

大自然の豊かな土地に生まれようと、喧騒慌ただしい都会に生まれようと、結局ひとは育ち方によってその考え方や生き方は変わるのかもしれない（育て方ではないみたいだ）。その証拠に、僕の生まれた場所は前者にあたるが、性格はいたってツイスト・ドーナツのようにひねくれているし、天井裏の屋根の角度のように斜めに物事を考えている。その生き方によって随分周りに迷惑をかけたものである（現在進行形）。他人や身内、物や動物を問わず誰かや何かに迷惑をかけることに関しては僕は類い稀なる才能を発揮してしまっているのだ。

こんな生き方が良いと本気で考えているわけではない。自慢しているわけでももちろんない。僕だって出来ることならひねくれた物の見方をせずに、イエスカノーと答えを明確に出してみたいし、誰に対しても素直になりたいと思っている。誰彼構わず打ち解けてみたいと思っているし、酒を酌み交わしたいとも思っている。敵なんて作るつもりはない。しかし、ある一定以上の少なくない数の人たちにとって、自由気ままに生きているように見える僕という存在は、憂鬱な月曜の朝に布団の上でぼかぼかと眠っている猫のように非常に羨ましい存在であると同時に、遅刻しそうな時になかなか発車しない通勤電車のように非常に腹の立つ存在らしい。そのため、僕は僕の意味とは関係のないところで、いつかひとりまたひとりと敵を作ってしまったのである。このペースでいくと近い将来、小さい都市の小さい町の人口くらいは、余裕でカバー出来てしまうくらいの敵の数になるかもしれない（もうなっているかもしれない）。そんなことを考えながら僕は成田空港行の電車に揺られていた（そんなことばかり考えている）。

平日だけあって成田行き電車の車内は通勤途中の人々で混雑していた。二割が旅行に向かう人々で、七割が通勤途中の人々のようだった（残り一割はその他いろいろ）。いくら空港まで直通の電車旅行目当ての人々がよく利用する路線であるからといっても、通勤者からの（大きな旅行用のトランクケースを持っている）旅行者への視線は冷たかった。

ふむ。僕が逆の立場であったとしても、これから遊びに行く人々を通勤途中に見つけてしまったら、同じように冷たい視線を送り恨めしく思ってしまうのだろうか。六時に起床し、歯を磨いて身支度を整える。八時には会社に出勤し、くだらない朝礼を終え、くだらない午前を過ごし、くだらない昼食を食べ、くだらない午後の会議に出席し、くだらない引き継ぎをおこなった後、くだらないアフターを過ごさざるを得ないというのに、君たちといったらもう、うきうきとした浮かれた顔で何処に行こうというのか？　なんて思ったりするのだろうか。多分するんだと思う。僕はそういうひとだ。立場が変わるだけで、僕はほころころと性格が変わってしまうのだ。仕方ない。甘んじて厳しめの視線を受け入れなければいけない。だって、僕は浮かれている側の人間なのだから。

隣りで座っている彼女はそんな視線は特に気にしていないようだった。その一方で小心者の僕は、視線から身を守るため、下を向き目を閉じることにした。

……それでもやはり視線は感じた。なぜだろう。なぜ視線というのは目を閉じていてもはっきりと感じてしまうのだろうか。出来ればこのまま眠ってしまいたかった。眠りの世界にじっと息を潜めて、空港までの所要時間をやり過ごしてしまいたかった。あるいは何か別のことを考えて、その考えの渦の中へ飛び込んでしまいたかった。そんな思いでいけばいけほど、痛い視線のことを考えてしまうことはわかってはいたけれど、僕はそう思わずにはいられなかったのだ。

「寒い……」と彼女は呟いた。

「え？」と僕は横を向く。でもそれは僕に言ったというより、ただ車内の温度に腹を立てているようだった。確かに寒い。それだから眠れないのかと思った。エアコンはストップしているが、基礎的な気温が低いようだ。7月とはいえ半袖で過ごすには少々寒過ぎる。

「大丈夫？」と僕は訊ねた。

「……………」

返事がない。さっきのはただの寝言のようだった。

空港に着くと、まず僕たちは上着を購入するため、第二ターミナルにある服の量販店へと向かった。

「さすがに寒くて眠れなかったよ」と僕は言った。「寒くて眠れないなんて、冬以外で経験するとは思わなかったよ」

「確かに寒かったわ。わたしも眠れなかったし」と彼女は言った。ん？　眠れなかった？

「どうしたの？」

「あ、いや、うん」

寝てたよな、しっかり。僕は言葉に詰まった。

「変なひとね。まあ、どうせ買うなら間に合わせじゃなくて、普段でも着れるような上着がいいわ。どんなのが良いと思う？」

「う、うん。ああ、普段使い出来るやつね。そうすると――」と僕は言って、店内を見渡し、商品をひとつ手に取った。

「これなんかどう？　普段も着れそうだよ」

「そうね、うーん。ちょっとイメージと違うのよね」

「そっか、じゃあこれは？」

「これは肩幅がちょっと」

「ふむ、肩幅は大事だね。じゃあこれは？」

「丈が長過ぎるわね」と彼女は言い、この人に聞いても無駄かもしれない、という顔をして、ひとりでふらふらっと他の商品を手に取り始めた。

「これなんかどう？　これならゆったり着れるし、着回しもききそうじゃない？」と彼女は大きめのカーディガンを身体に合わせながらこちらを向いた。

「ああ、確かにいいと思うよ。それにする？」

「うーん、でもやっぱりちょっとおかしいかなあ？」

僕は彼女を見つめながら、頭の中で素早く二通りほど返答する内容を思いついた。それは、`何を着ても一緒だよ、もしくは`何を着ても似合うよ、の二通りである。一見同じように聞こえる内容だが、前者については一歩間違えると地獄の蓋を開けたような騒ぎになるかもしれない言葉である。慎重にならなくては、と思った。

「いや、大丈夫だよ。いま合わせたカーディガンは丈も度良いし、色合いも似合ってたと思うよ。それに、君は何を着ても雰囲気が出る」と僕は言った。完璧な回答だ。これ以上の回答はちょっと思いつけない。反射的に言ったにしては素晴らしく模範的な回答だった。僕は模範回答にかけてはちょっとした権威なのだ。

彼女は、はあ、とため息をついた。「発言が軽いわ。ちゃんと見てる？　そういう模範回答は要らないのよね」

模範回答は要らなかつたらしい。

彼女は最終的にスタンダードなオフホワイトのパーカーを選んだ。そして、「まあ、汗もかくし、旅行中だけ着る用だ

から、何でもいっか」と言った。普段でも着れるような上着目的じゃなかったのか、と思ったがもちろん口にはしなかった。何せ搭乗手続き締切りまで、あまり時間がない。僕は彼女に、これで機内ではゆっくり眠れるね、とにっこり微笑みかけ、少し急ぎ足で第三ターミナルへと向かった――。

「飛行機って正直言って苦手なの」と彼女は言った。「だって、こんな大きな物が飛ぶなんて信じられる？」
僕たちは無事搭乗手続きを終え、GK405便に乗り込むことができた。席は少し広めの非常口付近の席を確保したし、荷物も棚の上にきちんとおさめたし、あとは出発を待つのみである。しかし、隣りに座っている彼女は少しナーバスになっているようだった。
「でもさ、ジェットコースターは好きだって言ってなかったっけ？ あの絶叫マシンに比べればはるかにこっちの方が安全だと思うんだけど」と僕は言った。
「全然違うわよ」と彼女は言って、飛行機が動き出すのと同時に、目を固く閉じてしまった。その右手は僕の左手を強く握り、逆側の左手に関しては、座席の手すりがどうにかなってしまいそうなくらいほとんどしがみつくように握っていた。もちろん僕の左手もどうにかなってしまいそうだった。少し開いた口では、何かをぶつぶつとつぶやいている。もしかしたら般若心経をつぶやいているのかもしれない。いや、南無阿弥陀仏だろうか。僕は左右どちらかの手に、ヒスイだかメノウだかの数珠を握らせてみたい衝動にかられていた。
「大丈夫？」と僕は訊いてみた。
「少し黙ってて」と彼女は言った。

こうして、僕たちの旅は始まった。

『あつあつのパン』

午前11時。

定刻通り松山空港に到着した僕たちは、空港内にあるいくつかのお土産店を物色し、やっぱり愛媛といえばここだな、と有名なタオルの正規出張店で足を止め、フェイスタオルを数枚ほど購入した。こんなところでタオルを購入するのは初めてのことだったが、この有名なタオルブランドは噂に違わずしっかりと作りで肌触りも良く、デザインも悪くなかった。むしろ好きなタイプのデザインだった。値段的にはいささか高い部類ではあったが、いままで何故購入しなかったのだろう、というくらい悪くない買い物だった。

さて、では何故今まで購入しなかったのか、と疑問に思うひともこの辺りでひとりふたりと出てくると思う。至極当然の疑問である。あるいはそんなことはどうでも良いから、話を進めてもらえないだろうか？ と思っているかもしれない。あるいは言われて初めて意識したよ、そういえばそうだね、と言うかもしれない。言わないかもしれない。とはいえ結局は僕はその疑問に答えなければならない。質問に答える義務がある。質問に答えないことでそれを理由に体調を崩すひとりがひとりでも現れてしまうことを、出来るだけ避けなければならない。

たかだかタオル。されどタオル。

それにしても、何て僕はしつこく面倒臭い考えの持ち主なのだろう。あまり大げさに話を盛ってしまっても仕方がないので結論から言ってしまうと、あの何とかくんといういわゆる`ゆるキャラ、のデザインが、僕のこのブランドに対する考え方や面倒臭い流れを形成していたのだ。`ゆるキャラ、が全国的に流行しているから許されているのか、そもそも単体でも許容されるキャラなのか、そのあたりの判断はつかない。要はこのブランドのイメージそのもののコンセプトがわからないため、今まで購入を見送っていたのである。主体性のないところに、購買意欲は沸いてこようはずもない。

しかし、買ってしまった今となれば、それはくだらない理由だったな、とわかるのだけど（ゆるキャラはやはり好きじゃないけど）。

四国の南に位置するこの場所は、東京とは打って変わって気温が高かった。これから目指す場所に至っては、さらに南下したところにあるため、もっと気温が高くなるだろう。せっかく購入したパーカーも暑くて着られたもんじゃなかった。周りにいる人たちも、砂漠を徘徊する犬のように口を少し開いた状態で、「あー」だか「うー」だか言いながら汗をふいている。

僕はさっそく購入したタオルを首に巻き、パーカーを脱いで折り畳み、トランクケースの中にしまいこんだ。しかし、彼女は特に脱ぐ様子ではなかった。

「暑くないの？」と僕は訊ねた。

「女性はね」と彼女は言いながらパーカーの襟を内側に寄せた。「日焼けをするという行為が、人生で三番目くらいに嫌なものなの。日焼けするくらいなら、汗をだらだらかく方がましなのよ。暑さや寒さが問題ではないの。汗はシャワーを浴びちゃえばいいけど、日焼けによるシミは、シャッターに描き込まれたペンキの落書きくらい消すのが面倒なのよ。いや、ほとんどが消えずにそのまま残るのよ。若いときの浅はかな考えや勢いが、後々に大きな致命傷となって私たち女性の美しさを半減させるのよ。化粧で誤魔化せるのなんて、ほんの少しのシミに過ぎないわ。殺人現場の証拠隠滅の方が簡単なくらいよ。知らないの？」

もちろん僕は知らなかった。殺人現場は置いとくとして、シャッターに描かれた落書きを消すには、その上から違う色を塗り込むしかない。

「そっか。知らなかった。ふむ。じゃあ一番は何だろう？」

「うーん、そうね、あなたみたいに必要以上にしつこく聞いてくるのが一番女性にとって面倒なことかもしれないわね」と彼女はフフフ、と言いつつ微かにうなづいてくれた。JR駅引きのバスに乗り込んだ。うるさい。

バスに乗っている間景色なんかそっこの方で、女性が人生で二番目に嫌なことは何だろう、と考えをめぐらせてみた。女性の日の二日目でもないしな。あ、パンプスの`ヒール、が折れたり、そのヒールがマンホールの隙間に入り込んで抜けなくなることだろうか。いや、もしくは、雨の日に皮の靴を履いたときの足先の臭いのことなのかもしれない（あれは確かにひどい）。……それとも、他人の幸せをひたすら聞かされる苦痛な時間のことだろうか。あるいは――。

「何ぶつぶつ言ってるのよ？」

「え？ いや、何でもないよ」と僕は慌てて言った。

「ふうん」

「それより愛媛はどう？ 気に入った？」

「気に入るも何も、まだ空港周辺しか見てないけど、思ったより都会ね」と彼女は言った。

「これから電車に乗って、もっと田舎に行くからびっくりするかもね」

「へえ、それは楽しみね」

JRの駅は、十数年前に見たときとあまり変わっていないように見えた。うらぶれたバッティングセンター、イートインのついたウィリーウィンキー、「味自慢」と書かれたラーメン屋、ステラおぼさんのクッキー（何処にでもあるなこれ）、それに隣り合うカレー専門店、いつもぎゅうぎゅうの待合室（電車が来ても減らない）、掃除の行き届いていない公衆トイレ。何かしら変わっているのかもしれないが、ざっと見た感じは何ひとつ変わってなかった（壁のペンキを塗り替えた程度だったらもちろん気づかない）。それが僕を少し安心させ、大丈夫かここ、と少しばかり不安にさせた。どちらにしても懐かしい気持ちになり僕はひとり感慨深くなっていた。

「さて、特急の発車時刻まであと一時間近くあるけど、何か食べる？」と僕は言った。何か、と言っても選択肢は限られているわけだが。

「何かって言うても選択肢は限られてそうね」

「え？ ……うん、まあ素人にはそう見えるだろうね」

なぜ見透かされたのだろう。悔しい。

「男性はいつの時代も負けず嫌いねえ」と彼女はふう、とため息をついた。「まあいいわ。そうねえ、わたし、パンが食べたい。冷たいアイスコーヒーにあつあつのパン。それ以外は申し訳ないけど受け付けられないわ」

彼女と話しているところ、なぜだか最近ミシェルを思い出す。僕は家でお留守番をしている猫たちのことが頭をよぎった。

今頃何をしているだろう。

「よし、じゃあパンを食べよう」と僕は言った。

「あつあつのパンよ？」

「わかったよ。それと冷たいアイスコーヒーでしょ？」

「うん！」と彼女は言って、顔をくしゃっとほころばせた。

『同じものは何ひとつない』

特急宇和海13号は独特のディーゼルエンジンの音を周囲に鳴り響かせ、車輪の軋む大きな音を立てながらゆっくりと1番ホームにその筐体をストップさせた。降りてくる乗客は両手で数えられる程度しかいない。特に大きな手荷物を持っているひと、特段急いでいるひともいない。特急に乗る理由なんて無いひとばかりに見えた。入り口付近で待機していた清掃員は乗客がすべて降りたのを見計らい、がらんとした車内にさっと乗り込み、手際良く車内を清掃し、手際良く座席をくると反対にして回り、手際良く車内から降りてそのまま何処かに消えて行った。清掃員が消えると、今度はそれを待っていたかのように汽車のエンジンが止まる。エンジンが止まると周囲はまた深海のような静けさに包まれた。

平日だからかホームで待つ人も少ない。全部で三人くらいのものだ。出張と思われるサラリーマン、ちょっとそこまで、という格好をした年老いた女性、紺のブレザーを着た学校帰りの女の子、それくらいしか見当たらなかった。

出発まであともう少し。その短い間にこれ以上誰かが駆け込んで来ることはないだろう。未だに自動改札機が導入されていない改札口では、退屈そうに係員があくびをしていた。

「これはなかなか旅って感じのする乗り物ね」と彼女は言った。「`おもむき、を感じるわ。この`おもむき、に乗って、あなたは幼少時代を過ごしていたのね」

おもむきに乗って過ごしていたわけではないが、喫煙所を探すことばかりを考えていた僕は、とりあえず、そうだね、と答えておいた。

「さっきから何をキョロキョロしているの？ おかしな人。目が大きいからなんだか怖いわ」

「(え？ 怖い?) いや、ちょっと出発前にたばこを吸いたくてね」

「喫煙所なら改札入って右側の方にあるわよ」と彼女は言った。

「ほんと？ 詳しいね。何で分かったの？」

「トイレはその隣りで、自販機は裏手にあるわ。それとー」

「ちょっと、ちょっと待って、何で知ってるの？」と僕は不思議に思っただけで訊ねた。

しかし、彼女は質問の意図がわからなかったようで、何のこと？ という顔をしてこちらを見ている。「ああ、どこかで案内板を見たの？」

「あんないばん……？」

彼女はまるで初めて聞くような単語をなぞるときのように言った。「何のことを言ってるのかわからないけど、早く行って来ないと乗り遅れるわよ」

「う、うん」

田舎特有の田園風景が次から次へと車窓から飛び込んでくる。稲はどこまでも黄緑色で、どこまでも途切れることなく広がっていた。それはよく調教された学生たちの集団生活のようにも見えた。乗車時間は約一時間半。僕たちは昨夜あまり眠れなかったにもかかわらず(眠れなかったのは僕だけだっけ)、夢中で窓の外を眺めていた。見慣れた風景であるはずの故郷も、なぜだか初めて訪れる旅先の風景のように新鮮に見えた。おそらく一緒にいる相手によってそのときどきの気持ちというのは変わるのだろう。通い慣れた場所であっても、何度も観た映画であっても。僕はあらためて彼女と結婚することができてよかったなあ、と思った。こんな風に思える相手というのはなかなかいない。もちろんこれまで生きてきた中で、色々な女性と付き合ったことはある。しかし、ポール・セザンヌが、`同じものは何ひとつない、と書いていたように、彼女の代わりになる人はいないだろう。これまでも、これから。

「ねえねえ、見て！ 奇妙なかかしが立ってる！ あ、あれは何？ あ、こっちはすごいびっしりとみかんがなってるわよ！」

彼女は初めての土地に来てすっかり興奮してしまっているようで、僕の返答を待ち、それについて何かを検討したり共感を求めたりするというよりは、目に飛び込んできた情報をひとつひとつ処理するために喋っているように見えた。その目は輝き、その顔には嬉しさが溢れていた。途中から僕は景色を見るのもやめ、そんな彼女の横顔をずっと眺めていた。

「ねえ、連れてきてくれてありがとね」と彼女は言った。

「どういたしまして」と僕は言った。

短いトンネルを何度も抜け、斜め右の方向に海が見えてきた頃、寝不足な上にはしゃぎ過ぎたのか、彼女はいつの間にか隣の席で眠り込んでいた。長い髪を後ろで束ね、両手をきちんと膝の上に置き、規則的に寝息を立てている。窓から差し込む夏の陽射しが、何かの奇跡のように彼女の肩に降り注いでいた。僕は彼女を起こさないようにカーテンを閉め、先ほど購入したストライプのタオルを膝に掛けてやった。

車内は出発したときと同じように静まり返っていた。何度か止まった駅で何度か乗客が入れ替わり、今では僕たちだけがこの車両に残されていた。この車両どころか他の車両にもひとの気配がなかった。車掌さえも一度も切符を確認しに来なかった。車掌も運転士も眠っているのかもしれない(車掌なんて最初から乗り込んでいないのかもしれない)。

さて、こんなに静かだと何か大声を出してみたくなる。意味もなく、ただ人情として。ただただ大きな声。大声を出すことは決定事項だとして、どんな言葉を発しよう、と僕は考えた。彼女を起こさず、起きてしまっても驚かすことのない言葉。軽蔑すらされない言葉。……まず、大声を出すことで驚くよな、と思った。そして、あなた何考えてるの？ と軽蔑され、下手をすると口も聞いてくれなくなる可能性がある。口もきいてくれなくなるということは、この旅の意味もなくなってしまうということにもなる。そうするとここはやはり、小さな声で我慢しなければいけないことになるが、小さな声何か出したとしてもまったく意味がない。当初の目的を果たせない。小さな声を出すくらいなら何も出さない方がましなくらいだ。しかし、彼女を起こさずに軽蔑されない魔法の言葉なんていくら考えても思いつきそうになかった。

僕は諦めて到着まで眠ることにした。

「あ！ 海っ！！」

……何だ、何だ？僕は突然の大きな声で目が覚めた。大きな声？

「ねえねえ、起きて！ 海が見えるわよ！」と誰かが僕の肩を揺さぶる。ああ、彼女か。「いつまで寝てるのよ、せっかくの旅人なのに」

「ん、ああ、うん、にゃ」

「にゃ？ うまく舌が回らない。」

「にゃ、って何よ。何寝ぼけてんのよ。ほら、海よ、ちゃんと見て？」

瀬戸内海だ。窓の外には瀬戸内海が大きく広がっていた。ところどころにごつごつとした岩場とー。

「ああ、見えなくなった……」と彼女は言った。「ほら、あなたがあらかじめ教えてくれてないから見えなくなったじゃない。`この先のカーブを越えたらそこは瀬戸内海ですよ、って。ツアーコンダクターならちゃんと起きててもらわないと」

「ごめん、ごめん。つい寝ちゃった」と僕は目をこすりながら言った。ツアーコンダクターではない。

「もう、頼りないわねえ。わたしはずうっと起きてたのに。というかわたしもつい大声出しちゃったけど、いつの間にか

わたしたちしかいないわね」

「うん、ちょっと前から誰もいなくなってたよ」

「ふうん。こんな静かだと——」

「大声出したくなるでしょ？」

「え？ 何で？」と彼女は不審そうな顔をした。「大声出してどうするの？」

「あ、いや、何となく」

「変わったひとね。あのね、こんな静かだと、世界で生き残ってるのはわたしたちだけって気がするって聞いたかったの。大声出してどうするのよ。わたしたちだけしかいないんだから、大声出したって意味がないでしょうに」

「うん、まあそうなんだけどね。でも、この汽車に乗ってるのが僕たちだけだったら、誰がこの汽車を止めるの？」

「もちろん——」

「もちろん？」

「あなたが止めるのよ」と彼女は言った。彼女の顔は思いのほか真剣な顔だった。

「僕が？」

「そう」と彼女は言った。「映画でそういうの観たことあるわ」

「なるほど。そしてその映画ではやはりブレーキが壊れてるんだね」

「そう、さらに汽車には爆弾が積まれてるの」

「爆弾……」

「C4よ」

「うん。まあ、爆弾と言えばC4だろうね。でも、それを何とか試行錯誤を繰り返し、ぎりぎり寸前のところで何とか僕が汽車を止める、と」

「そう」と彼女はじいっと僕を見つめる。「崖に落ちるぎりぎり寸前のところであなたは汽車を止めるの」

「爆弾も取り除いて？」

「爆弾も取り除いて」と彼女は言った。

「なるほど。FBIだかCIAにでもなれそうだね」と僕は言った。

「ふふふ。あ、でも」

「ん？」

「赤い線は切っちゃ駄目よ？」と彼女は言った。

山間の少し長めのトンネルを抜け何度目かの田園風景を過ぎると、そこには見たこともない景色が広がり、僕たちは不思議な世界へと迷い込み……ということもなく、汽車は少しずつスピードを落とし始め、それに伴い車内アナウンスが目的地に近いことを報せた。到着まであと三分。ほぼ定刻通り。この調子だと何事もなく汽車は終着駅に止まりそうだった。アナウンスやブレーキの具合で車掌や運転士がきちんと乗車していることも確認できた。（あるいは運転士がアナウンスを兼任していたら車掌はやはりいないということになるけど）。ここまではとても順調に進んでいる。あとは爆弾が仕掛けられてないことを祈るのみだな、と思った。停車した瞬間に爆発してしまう仕掛けじゃなければいいのだけど。

「そろそろ着くみたいだよ」と僕は言った。

『そんなものよ』

「そろそろ着くみたいだよ」と僕は言った。

爆弾も無く、ブレーキも壊れておらず、その他何のアクシデントも起こらなかった。エアコンすら完璧に動作していた。「ご乗車お疲れ様でした」とアナウンスが流れ、定刻通り汽車は終点駅に到着した。

まあ起こるわけがない。日常はハリウッド映画のようにはいかない。「あと何分で止めないと爆発しちゃう！」なんてありえないし、「いいか？ 時速40キロ以下で走ったら最後、人質がどうなるかわからないぜ。俺は死ぬことなんてこれっぽっちも恐くないんだ」という犯人的なものもない。`事実は小説より奇なり、とは簡単にはいかないのである。

駅を一步出るとロータリー一帯に初夏の陽射しが降り注ぎ、看板やらアスファルトやらあらゆるものがその光を反射していた。構内に設置されているSL模型だけがその大きな筐体の中にその陽射しを吸収していた。吸収した熱は蒸気となり、蒸気は動力となって今にもその筐体は動き出しそうだった。まあ、動き出したら動き出したで怖い。あと、うるさい。教会等の鐘の音もそうだが、遠くで聴く分には良い音というのは、近くで聴くと途端に迷惑で耳触りな音になる。耳に心地良い音というのは音量と音質のバランスが非常に大事なのであって、バランスを失った音というのは、調味料の偏ったカレーのように許容できる代物ではなくなってしまうのである。

駅舎入り口の左右にはキオスクと何とかベーカリーとよくわからない土産店とみどりの窓口とレンタカー店が立ち並んでいた。キオスクで地図を買い、何とかベーカリーでパンと牛乳を買い、レンタカーを返し終わったら、土産を買って、帰る頃合いにみどりの窓口で切符を買う、というのがここでは主流なのかもしれない。しかし、みどりの窓口はみどりの要素があまり感じられないし、「焼き立てで美味しい」と書かれたパン屋の前の`のぼり、は、パンの味に影響が出そうなくらい経年劣化が激し目だった。キオスクに至っては、店員が何処にも見当たらなかった。

それにしても暑い。さすが四国の南端である。道路脇に植えられた高さ数メートルもあるソテツの木が、南国に来てしまったということを感じさせ、生温い空気がそこら中に不快な湿気を充滿させている。狂ったような陽射しのせいで、セミさえも鳴くのを躊躇するような暑さになっていた。この日のためにサングラスを買っておいて正解だった。値段はそれなりにしたのだが、このトム・フォードのサングラスが無かったら、おそらく僕の目はただれ、あつつあつのパンに塗られたホテルマーガリンのように身体さえもべとべとになって綺麗さっぱり溶けていたことだろう。湿気によるべとべとは別として。

ロータリーで客待ちをしているタクシーの運転手も仕事どころではないような顔をしていた。気のせいかもしれないが、彼らは新聞を読んだり、上を向いてたばこを吸ったり、窓を締め切って腕を組んで俯いていたり、運転者一同意図的に誰とも目を合わさないようにしているように見えた。もしかしたら客待ちではなく、運転手の皆が一斉に休憩に入っているのかもしれない。非常にわかりにくい。客側からすると、乗ろうとして嫌な顔をされたらどうしよう、としか思えない。どうせなら、「この時間は誰も乗せません」というような立て看板でも置いておいてくれれば親切なのにな、と思った。

レンタカーの予約時間にはまだ少し早い。しかし、特に他に何もすることも浮かばなかったのも、荷物だけでも車に載せられるかなと思ひ僕はレンタカーの窓口へと向かった。

「すみません」と店に入り初老の男性に声をかける。「15時から予約してたんですけど、ちょっと早く来すぎてしまって、いまー」

「かまー」と初老の男性は言った。まだ言い終えていないにもかかわらず。「ええっと、じゃあここに住所と電話番号とー」

さすが田舎の店は融通がきく。話が早い。これが都会なら「じゃあそこで時間まで待っててください」とか「時間になったらまた来てください」とか「その分返却時間早めますね」など、なかなかのお客様満足度な発言をするだろう。しかし、この初老の男性は快く15時から次の日の15時までの契約を、13時半から15時までの契約にしてくれたのだ。

「得した気分だね」と僕は彼女に言った。

「次は何処に行くの？」

彼女は女性にしては珍しく、お徳どうこうよりも、気持ちはすでに次に向いているようだった。

「わたしね、神社仏閣巡りが好きなの」と聞いていた僕は、最初に彼女を連れてその土地の有名な神社へと向かった。

承応2年、伊達政宗の長男・秀宗は、政宗の家臣・山家公頼一族の霊を祀るため、ここ宇和島市に神社を創建し、山頼和霊神社と称した。現在地に遷座したのは享保20年。昭和20年に空襲で焼失してしまったが、昭和32年に見事に現在の姿に再建された神社である。

公頼は、それまでの領主の悪政により疲弊していた藩を租税軽減や産業振興を行うことで、藩を立て直した。しかし、その辣腕に嫉妬する藩士による讒言（ざんげん）を信じた秀宗に、息子共々殺害されてしまったのである。公頼の無念たるやない。母親と妻が無事だったことが唯一の救いかもしれない。その公頼の怨念なのか、秀宗は病床に伏し、秀宗の六男、長男宗實が早世、次男宗時が病没、そして、飢饉や台風、大地震が相次いだ。そのため秀宗は和霊神社を建てるに至ったのである。

「神社って何か不思議な感じがするよね」と僕は言った。

「そうね」と彼女は言った。「わたし、こういうところに来ると何か力が貰える気がするの。たまに訪れて力を補充しないと元気がなくなっちゃうのよね。日頃少しずつ失われていく力っていうのは、ほっといても戻らないのよ？ あ、あとね、その時代の背景や成り立ちを知ると、もっと感じるかもしれないわよ」

「ふむふむ。今まで何気なく訪れて、何気なく手を合わせて、何気なく色々お願い事やら何や彼やしてたけど、これからは気軽にそんなことしちゃ駄目な気がしてきたよ」

「いい心がけだと思う。でもねー」と彼女は言って境内の方に目を向けた。「でもね、その何気なく、が大切なのよ」

「そんなもんかね」

「そんなものよ」

そうなのかもしれない。彼女が言うと、妙に説得力がある気がしてくるから不思議だ。

僕たちは石造りでは日本一と言われる大きな鳥居をくぐり、右手にある杉の木を見上げながら本堂へ通じる階段を登った。階段を登ると、そこにもやはり杉の木があった。僕はその大きく育った杉の木を見つめながら、神社やお寺にはやたらと杉の木があるのは何故だろう、とふと思った。`くぬぎ、や`しい、では駄目なのだろうか。`まつ、や`とねりこ、でも良い。でも、実は知らないだけで、`くぬぎ、や`しい、も何処かの神社にはあるのかもしれない。それでも色々な神社に訪れた結果としては、とりあえず杉の木を神社に植えてあるのは絶対のようである。ここまで徹底するということは、おそらく杉は神聖な木なのだろう。その証拠に、杉の木の胴廻りにはあのぎざぎざの白い紙垂（しで）が

かけてあった（とりあえず紙垂が掛けてあれば、ウンベラータでも神聖になりそうだけれど）。迂闊に近付けないような雰囲気を出している紙垂ではあるが、実は豊作を願うための稲妻や落雷をイメージしている（落雷があると稲が育つらしい）。もちろん、邪悪なものを祓う意味もある。まあ、杉の木にわざわざ紙垂をかけてある時点でどんな意味を持っているのかは考えなくともわかる。それは結局神域や聖域を表しているのだから、やはり迂闊に近付いたらいけないことは間違いないのだ。間違いないし、間違っただけで切ってしまった日には、とんでもなくおそろしいことが待ち受けているに違いない。そんな目には遭いたくない。遭いたいわげがない。夜な夜な神様だか何かが枕元に立ってああでもないこうでもない、とごちゃごちゃ説教をしてくるぐらいであれば何とか我慢出来るけれど、いくら無神論者の僕であっても、何かよくわからない神様に突然呪われたり、何かよくわからない動物霊に精神を病むくらいの攻撃をされるのだけは我慢出来ない。僕くらいのレベルではそんなものたちには到底太刀打ち出来ない。

もちろん、無闇矢鱈に切るなんてことはしない。それが駄目なことくらいはいくらなんでもわかる。――しかし、しかしだ、もしここに、もしもここに「何があっても決して切らないように」なんて貼り紙がしてあったら……そんな貼り紙があったら、と考えると……もしかしたら、本当にもしかしたらなのだけれど、僕は間違いを起こしてしまうかもしれない。間違いが起こってしまうかもしれない。そう、「駄目だ」という趣旨のことが書かれてあると、つい、どうしてもやりたくなくなってしまうのが人情というものである。

「あなた」と彼女は言った。「本当にそれだけはやめた方が良いわよ」

「な、何が？」

何を突然言い出すのだろう。ひとりごとが漏れてたのか……？

「あのね、あなたがいま何を考えていたのかくらいはわかるわよ」

何だ、勘か、と僕は思った。びっくりした。

「いやいや、まさか、そんなこと考えてないよ、嫌だな。そんなこと思いつきもしなかったよ。というか、いま考えてたのは、住宅ローンの金利が低い今が買いどきだな、ってことだよ？」

「はいはい」と彼女は言って、ふう、と溜め息をついた。「もう一度言うけど、やめときなさいね」

「でも」と僕は言った。「大手町駅の工事はいつ終わるんだろうね？」

僕はそう言って、両腕を胸のあたりで組み、にこっと笑った。

「ばかみたい」と彼女は言った。「あなたがさっき何を考えていたか当ててみましょうか？」

「え？ うん。いいよ、もちろん」と僕は言った。「でも、もう答え伝えてるんだけどねえ」

「……やっぱり」

「やっぱり？」

「やっぱりやめとくわ」と彼女は言った。

「ふふん、まあそれが賢明だね。見当外れになると恥かしいからね」

僕は何だかほっと安心する。心を読まれたのかと思った。

「うるさいわね。面倒になっただけ」と彼女は言って、落ちていた小さい木の枝を拾い土の上に「ばか、と書いた。「で

もねー」

「でも？」

「紙垂を切るのだけはやめときなさいね」

『想像すらできないわ』

ベーシックタイプ、Kクラス。それが僕たちが借りたレンタカーのカテゴリーだった。その個体には何や彼や何らかのメーカー個別の名称が付いていることだろう。でも僕たちはそんな名前など特に気にしなかった。車種も気にしなかった。色も、ナビが付いているのかどうかも気にしなかった。何人乗りなのかさうどうでも良かった。レンタカーなんて、燃費が良くてもパンクしなければ何でも良い。究極のところ、タイヤが三つか四つちゃんと付いている（二つじゃダメだ）、きちんと公道を走ることができれば何でも良いのである。こだわりさえしなければ、二十四時間で六千円ほどで借りることができる。しかも免責保証まで付いて、だ。

電車や汽車やバスやタクシーだけを利用して旅が出来れば良いのだけど、田舎を効率的に回るにはどうしても車が必要になる。しかし、必要だからといってわざわざ見栄をはってくだらない大きな車や高そうなスポーツ・カーを借りる必要なんてないのである。

最新のエコ・ドライブの煩わしさにだけ目をつぶって、僕は次の目的地を目指すため、国道56号線を南へと向かった。

国道56号線は素晴らしい景色が広がっていた。左右に広がるのは黄緑色の田園風景。ジブリが何かの映画でしか観たことがないような場所。その周りにはさらさらと小川がよどみなく流れ、用水路をつたい畦へと入り、収穫期を数ヶ月後に控えた田んぼの中へ均等に水が送り込まれていた。とてもシステマチックだった。その中心には思い出したかのように木々が集まり小さな森を形成し、入り口には小さな赤い鳥居があった。おそらくその奥には神社があるのだろう。よく見ると、古めかしい石段が鳥居をくぐったところから上の方まで続いていた。石段を登りきると、きっと賽銭箱があり、何かしらが祀られた本堂があるのだろう。僕は心の中で賽銭箱を投げ、鈴をがらりと揺らし、ぱんぱんと手を叩く。すれ違う車はほとんど同じ管轄のナンバーだった。「さ」やら「な」やらのナンバーの車とすれ違う中、「わ」と書かれたナンバーの車は僕たちの車だけだった。レンタカーを借りる必要がない地元の一とたち。平均で一家に二台は所有しているひとたち。下手するとひとり一台の家庭もあるだろう。それなのに渋滞があまり起きないのが田舎の七不思議のひとつといえる（あとの六つは知らない）。

何を作っているのかわからない工場を過ぎると、営業しているのかわからない喫茶店があり、夜になっても営業しそくない朽ち果てて見えるスナックがあった。もし営業していたとしても、ママも朽ち果ててそうだった（失礼）。そして、何社かがまとまった自動販売機群を過ぎると、しばらく先を見ても建て物がひとつも見当たらなくなった。目に入るのには、張り巡らされた電線、ガードレール、アスファルト、田園、雑草、名前も知らない山々。そして思い出しかのよう

にまた自動販売機。

そしてレンタカーはトンネルに差し掛かった。

「トンネルを抜けると何があるの？」と彼女が訊いてきた。

「トンネルを抜けると――」と僕は言った。「何があると思う？」

「そうねえ」と彼女は言っただけでこりこり笑った。「分からないわ」

「え、何も想像つかない？ ほら、みかん畑があるとか、また工場があるとか、さっきよりも大きな山がそびえ立ってる

とかさ」

「みかん畑があるの？」

「いや、みかん畑はないかな」と僕は言った。

「じゃあ、工場？」

「うん、工場もないかな」

「大きな山があるってことね」

「さっきの山が一番大きいよ」

彼女はもう一度こりこり笑ってカースピーカーの音量を少し上げた。

トンネルを抜けて次に見えてきたのは、鋸の歯のようにギザギザした地形のリアス式海岸と、それに合わせるように建てられた漁村。あるいは漁村に合わせて地形を削り取っている海岸だった。漁村のいたるところに「ひおうぎがい」と書かれたのぼりが風に揺れている。養殖が盛んなのだろう。沖合いには黒い浮子がプカプカと均等に浮かんでいた。その下には貝がけや、真鯛や「ぶり」の類が休むことなく泳いでいるのかな、と思うと、途端にお腹が空いてきた。やはり愛媛に来たら新鮮なお刺身を食べなければならない。鯛めしも良い。ぶり照りの美味しい物を食べた日には、もう魚以外体が受け付けなくなるかもしれない。そう思うと、ちょっと魚を食べるのをどうしようかな、と僕は迷い出した。今は良い。手に届く範囲に魚がある。しかし、旅行を終えた後は？ いつでも新鮮な魚が関東で手に入るとは限らない。そのことを考えると躊躇せざるを得ないのである。

もちろん、愛媛といえばみかんがやたらと有名だが（それが良いか悪いかは別として）、この辺りは南部地域沿岸部では珍しく、かんきつ栽培は盛んではない。これは、先に述べたような水産養殖業が発達したため、より収入の得られる水産業に関心が向かったためでもある。真珠やら「ひじき」、も養殖しているというから驚きだ。実のところ、かつおだって四国一の陸揚量なのである。食べ物が美味しい土地、というのはそれだけでとても素晴らしいことだな、と僕は思った。

「ひじきって何で出来てるか知ってる？」と彼女は言った。

「……ひじきひじき……突然聞かれると、正確に何かってわからないね、あれって」と僕は正直に言った。何だったっけな。

「何でも知ってるような顔をしてるのね。ふふふふ」

「何でもは知らないよ。パンは凍らせると長期間保存できるっていうのも知らなかったし、バッハが晩年ほとんど目が見えなかったことも最近知ったしさ。それで――」と僕は彼女の方をチラッと見た。「それで、ひじきって何でできるの？」

「日本国内で流通する食用ひじきの約九十パーセントは、中国・韓国からの輸入品なのよ？ しかもね――」と彼女はそこで喉を潤すために、ペットボトルの水をひとくち飲んだ。「生温いわね、この水。ええっと、どこまで話してたかしら？」

「バッハが二度目の目の手術に失敗し、体力を奪われて、そのまま床に伏してしまっただけで済んだのかな？」

「ああ、そうだった。しかもね、ひじきを食べると長生きするのよ」と彼女は僕の言葉にはまったく反応せずに言った。

「ちょうど九月十五日が『ひじきの日』ってなってるでしょ？ つまりそういうことなの」

「ちょうど、も、つまり、の意味もよくわからなかったが、なるほどね、と僕は答えた。結婚生活はこういうところが大事なのである。ちなみにヘンデルも同じ医師にかかり同じように手術に失敗されてしまったとのことだ。

洲ノ川公園に車を止めると、太陽は今日一番の陽射しを世界に振舞っていた。厚い雲は遠い空の向こうへ押しやられており、何処かでスイッチを切られたのか風さえも吹いていない。大規模な空調システムを導入することを政府は本気で

考えなければいけないな、と僕は思った。ドーム型の気候安定システムだ。それによる農作物への弊害や他のあれこれについては知らない。そんなことは偉いひとたちが考えることであって、僕が考えることではない。世の中にはそういうひとたちがちゃんと控えているのだ。

僕はエンジンを止め、あんなに冷えていた車内が急速に温まっていくのを感じながらトム・フォードのサングラスをかけた。視界がBARのダウンライトのように薄いブラウンに変わる。彼女は化粧を少し直してから、日焼け止めの塗り具合をチェックし、黒い日傘をバッグから取り出した。そして、虫除けスプレーを肌が露出している部分にふりかけ始めた。

僕は昔から女性というのは毎朝毎朝ぱっちり化粧をしたり、ことあるごとにトイレで化粧を直したりと、すごく大変なんだろうなあ、と思っていた。あまりに気になったので、どれくらい化粧が大変なのかを前に一度調べたことがある。

化粧の始まりは、まず、化粧水だか何かでスキンケアをすることから始まる。次に、紫外線等の外的な刺激から日焼け止めを塗ることで肌を保護し、化粧下地で肌をなめらかに整え、その上から均一にファンデーションを塗る。そして化粧崩れを防ぐためにフェイスパウダーでベースメイクの油分を抑えたらやっとそこで第二段階にうつる。

第二段階にうつると、今度は部分部分の輪郭を整える作業に入る。顔全体の雰囲気を変えるため、アイブロウで眉の形を整え、アイシャドウで目元に陰影をつけ立体感を出す。そこからさらに目元を強調するためにアイライナーとマスカラを使う。アイライナーで目の形を引き立て、マスカラでまつげを太く長くする。そうして目元を大きく見せることで、深みを演出することが出来るのである。

目元の立体感を出したあと、忘れてはならないのがチークだ。頬に立体感を出すために塗られるチークは、顔全体に血色感を与え、いきいきとした表情を作ることが出来る。

仕上げに、メイク全体を引き締め唇に潤いを与える口紅を塗りたいぐれば、これで化粧は完了である。

僕はこのような一連の作業を考えただけで気が滅入った。ゾッとさえした。そして、これを毎朝続けている女性たちに対し、畏敬の念を抱かざるを得なかった。

「何見てるのよ」と彼女は言った。

「いや、うん。女性は大変だよなあ、と思って」と僕は言った。「毎日毎日面倒にならない？」

「それって、お化粧のこと言ってる？」

「うん、そう、化粧のこと」

「……そうねえ」

彼女は虫除けスプレーを自分の腕にかけながら、少し考え込む仕草をする。

「眉しか描いてないわ」

「え？」

「わたし、お化粧は基本眉だけよ」と彼女は何でもなさそうに言った。「やっても目元を簡単にやるだけ。最悪マスクしなきゃ何とでもなるの」

「ふむ」

なるほど、あまり肌を酷使してないから歳の割に若く見えるのか。

「いま、失礼なこと思ったでしょ？」と彼女は不審そうに僕を見つめた。

「はは、きれいだなあ、って思っただけだよ」

相変わらず勘が鋭い。

「ふうん、どうだか」

準備が終わると僕たちは車を降り、駐車場から公園を抜ける道に入り、その奥の海岸へと向かった。公園の芝生はきれいに刈り揃えられ、奥にある池には絨毯のように隙間なく睡蓮が敷き詰められていた。

睡蓮と蓮の違いはうろ覚えだが、水をはじいている様子がないし、葉にも切れ込みがあるのを見ると、おそらくあれは睡蓮だろう。モネの愛した睡蓮。二百点以上もの睡蓮の作品を残したクロード・モネの視点では、この景色はどう見えるのだろうか。このちっぽけな日本の、そのまたさらに小さな町に咲く睡蓮とその花。このような場所の景色を描いたとしても、二千万ドルの価値を生み出す絵が生まれるのだろうか。

睡蓮のことを考えながら公園を抜け林の中を並んで歩いていると、微かな磯の香りが漂ってきた。

そして、そこで僕たちは一匹の猫に出会った。

『飴玉の唄を聴きながら』

実のところ、結婚するのは二度目である。最初の結婚が終わってから今回の結婚に至るまで、結婚なんてもうする必要はないなと思ったし、もうしたいとも思わないだろうなと考えていた。特にトラウマになっているとか、ものすごく傷つけられた、とかではない。ただただ、結婚というものに理想を描き過ぎていたんだと思う。

最初の頃はもちろんそれなりに上手くいっていた。初めてのことでだけあって手探りではあったけれど、日々相手のことを考え責任を感じながら、喧嘩しても真剣に、そして真面目に原因を模索していた。しかし、次第にお互いがお互いに無関心になっていき、向き合うことをやめ、問題を棚上げし、会話すらしなくなり、ポタポタと暑さで溶けてしまったアイスクリームが床に染み込んでしまっていくように、気がついたときにはもう既に修復不可能なところまで行ってしまっていたのだ。残されたのはコーンの器だけ。宙に浮いたまま何処にも役目を見出せない器。置いて行かれてぽっかりと空いた器。またその器を満たすだけの努力や何や彼やをするには、僕たちは中身を失い過ぎていたのである。そもそも元々中身があったのかすら怪しい。

「ねえ、こんな生活は嫌だよな」と僕は言った。
「そうね、じゃあ離婚しましょう」と彼女は言った。
こうして二人は離婚した。

結婚にあたり、責任感や義務感というものは当然あるだろう。勢いやそのときの気持ちというのももちろん大事かもしれない。今隣りに並んで一緒に歩いている人を見て思うのは、「この人じゃないとダメだろうな」ということ。おそらくその気持ちが前の結婚にはなかったのではないかと思う。簡単なことではあるけれど、一番見落としがちな気持ち。それ、に気がつかないままの人が多数であることを考えると、僕は運が良いと言えるのかもしれない。これまでの孤独だった日々が、今回のこの結婚の準備期間と思えるのだから。

それでもすべてが順調に進んでこここまでこれたわけではない。出会って、付き合ってから、結婚に至るまで、短い期間ではあったが多くの障害があった。今思うと、普通なら途中で諦めてしまっているようなこともあった。担保されていたものなんて何もなかったにもかかわらず、パズルのピースを当てはめていくように、悩みながら一步步前進できた理由は何だろう。諦め癖のある僕がここまでの気持ちになれたのは何故だろう。頭の中にふと流れた音楽。その理由がその唄にはすべて詰まっていた。

「たまに思いつめた顔をするけど、何を考えているの？」と彼女は僕の顔を覗き込みながら言った。白のワンピースに黒いパンプス、黒い日傘に黄色いバッグ。木々から降り注ぐ夏の陽射しに当てられた彼女は、ひとつひとつの色がくっきりと浮かび上がり、僕の目にはとても輝いて見えた。辺りは静けさに包まれており、公園には僕ら以外誰もいなかった。セミや小さな虫さえもいないように思えた。そこにはたまに吹く風で葉と葉が擦れる音と、落ち葉を踏んだときに鳴る乾いた音しか聞こえなかった。

「うん、メソポタミア文明は何故滅んでしまったのかな、と思ってね」と僕は言った。
「変だ変だとは思っていたけど、いよいよ変な人みたいね、あなたって」
「でもさ」と僕は足を止め真剣な顔をして彼女の方に向き直った。「そこに結婚生活が上手くいくヒントが隠されていると思うんだ」

「本当にバカみたいよ、あなたって」
呆れたような顔をしていた彼女ではあったが、何だか嬉しそうな顔も浮かべていた。
多くの文明が発達しては滅び、分岐しては生き残り、そしてまた滅んでいく。安定していると思われる今現在であっても、実際のところいつ滅んでもおかしくない。約束された未来なんてない。

僕が出来ることは何だろう。僕が、いま隣りにいる大切なひとを失わないよう、考えるべきことは何だろう。彼女の笑顔を絶やさないう、やるべきことは何だろう。いつまでも穏やかに暮らしていくには、一体どうしたら良いのだろう。……気負い過ぎているな、と思った。

「ねえ、長年うまくいく秘訣は何だと思う？」
歩きながら僕は彼女に訊ねる。
「どうしたの？ 藪から棒に」
彼女は顔だけをちらっとこちらに向ける。
「うん、いやね、どうしても失いたくない大切なひとがいるんだよね」
「ふうん」と彼女は言った。「誰のことかは知らないけど、そのひとのことをどうしても失いたくないのね？」
「うん、どうしても」

「そっか」
彼女は眉にかかった前髪を左に流した。
「そんなの簡単よ」
「そう？ どうしたら良いの？」
「ええっとね、あ、ちょっと待って、何か喉が渇いた気がする」と彼女は言った。「喉が渇いて、もうひと言たりともこれ以上喋れない気がするわ。でね、さっきの駐車場に自動販売機があったと思うんだけど……」

「……わかりました。買ってくるよ」
「ほんと？ 何だか悪いわ」
わざとらし過ぎる。
「いえいえ、何でも良い？」
「うん！ 何でも良いよ」と彼女は言った。「うんと冷たい、微糖の缶コーヒーね！」
何でも良くはなさそうだった。
「はいはい」と僕は言って、駐車場へと向かった。

「これでいい？」
僕は買って来た缶コーヒーを彼女に手渡した。
「うん、思いやりよ」
「え？」
「思いやりよ」と彼女はもう一度言った。
「思いやり？」
「そう、思いやり」
「思いやり……」と僕は復唱する。
「思いやりがあれば、どんなに喧嘩したってどんなに年数重ねたって、大切なひとを失うことはないのよ」と彼女は言

った。
「なるほど」
なるほど。
「あなたが今、喉が渴いたわたしを察して缶コーヒーを買って来てくれたことも思いやり、わたしがあなたに『ありがとう』って感謝したのも思いやり、お互いの思いやりでこうした関係は成り立つものなのよ？」
うん、まあ、ありがとう、とは言われてない気もするが、言いたいことは何となくわかったのでその点は黙っておいた

。「そっか、思いやりか」
「そ、思いやり」と彼女はそんなこともわからなかったの？ というような呆れたような得意になったような顔で言った

。やれやれ。ちょっと、ほんのちょっとだけ納得いかなかったけれど、得意気な彼女の顔が可愛かったので、それですべて帳消しにすることした。何かこれ自分次第だな、と思った。

「わかった？ 返事は？」と言って、彼女はふふんという顔をした。

もちろん返事はしなかった。

『想像できることと出来ないこと』

林の中を磯の香りのする方向へ進むと、すぐに僕たちは開けた場所に出た。薄く青い色の空。紺色の海。空と海の境が目がわからないくらいの景色。堤防を越えた先には長い時間をかけて削られた石たち（石は意思を持っている、とか何だかくだらないことを何処かの偉いひとが言っていた気がする）が大小に形を変えて広がっている。海はおそろしく静かで澄んでいた。その静かな海を静かに堤防が見下ろしていた。三メートルか四メートルもある堤防。しかしそれくらいの高さでは、本気の津波が来たときには防ぎきれないだろうな、と思った。

砂利を越えると、もうそこは宇和海だった。水平線がはるか彼方まで続くリアス式の海岸。足摺宇和海国立公園内にある須ノ川海岸だ。沖を望むと、真珠貝の養殖イカダが、まるでだっ広いホテルのロビーに敷き詰めた絨毯のように広がっている。そして、東西に約一キロメートルほど続くアスファルトの歩道の上では、小さなカニがよちよちと歩き、道路沿いに植林されたウバメガシ林は、大葉子や雄日芝、かもじ草やカラス麦と一緒にあって、静かに澄んだ青い海との調和を楽しんでいるようにも見えた。

「わあ……これはきれいなね」と彼女は言った。「もう、きれい過ぎて何てコメントして良いのかわからないわ」

「はは、こんなときは言葉なんていらんと思うよ。大丈夫。感動はその顔を見るだけで伝わってるから」

「ほんとう？」

「本当だよ」

「ふうん」と彼女は少し疑わしそうに言った。基本的に僕の何を疑っているのかもしれない。無理もない。手放して相手を信じられるほど、若くもないし、純粋でもない。

「また何か失礼なことを考えてるわね」

「え？ うん、いや今日のごはんはどうしようかなと思ってね」

「ごはん！」

ごはん、と聞いた彼女の顔がパッと明るくなる。

「四国は野菜が美味しいと聞いてるわ。あとね——」と彼女は言って、海の方をチラッと見た。「お刺身は必ず食べるべきだと思うの」

「う、うん。そうだね、食べるべきだね。愛媛のお刺身はきっと君も気に入ると思うよ」

確かに魚のことを想像すると、魚が食べたくなる。何故だろう。鳥のことを想像しても鳥肉は別に食べたくならないし、豚や牛だって、その姿を見てもその姿を想像しても、食べたい気持ちにならない。とても不思議だ。

「前ね、野鳥とかインコを専門に売ってるお店の隣りにね、焼き鳥屋さんがあったんだけど、あれってどういふつもりでオープンしたのかしら」と彼女はうーん、という顔をしながら言った。多分僕と同じことを考えていたのだろう。海で魚を連想し、魚からお刺身に思い当たったくらいなのだ。「仕入れのことを考えると、たまに恐ろしくて仕方がなくなるの。ねえ、そう思わない？ どうしても、売れ残ったらどうするかを考えてしまうの。合理的過ぎない？」

「焼き鳥屋さんが先にオープンしてたんじゃないの？」と僕は言った。

「でも、じゃあどうしてその隣りに野鳥専門店なんてわざわざオープンするのよ」

「……ああ、確かにそうなるね。どっちにしろ、ってことか。経営者が同じだったりして」と僕は言って後悔した。

「ほら、やっぱり」と彼女はまたひとしきり考え込んじ草を始めた。

「何だか……鶏が先か、卵が先かみたいな話だね」

「……ごめんなさい。意味がわからないわ」と彼女は言った。

嘘でしょ、と僕は思った。

「でも、本当にきれいなね。ここ」

「でしょ？ 昔はよく泳いだり、石投げたりして遊んでたなあ」と僕は言った。「水切りって知ってる？ 薄っぺらい石を水面に向かって思いっきり投げて、どれだけ遠くまで水を切れるか競うやつ」

「知ってる！ わたしあれ得意よ」

「お、じゃあ勝負する？」

「いいわよ。あ、でも残念ね、今日はパンプスを履いてるから、ごつごつした岩場は歩けないの。本当に残念。きつとわたしが勝つと思うんだけど……ああ、残念」と彼女はさほど残念そうでもない顔で言った。多分面倒臭いのだろう。

「じゃあパンプスでも出来る競技は——」

「何で争う前提なのよ」と彼女は言った。「そんなことしなくても、こうして海を見てるだけで心が洗われるでしょ？ あなたのその都会の空気で汚れてしまっている心を、一度見つめ直して洗濯しなさい」

僕はそれについて抗議しようか迷ったが、結局抗議することにした。「まあ、多分君の汚れに比べれば、洗って取れるだけましと言えるね」

「あら」

彼女は少しばかり微笑みを浮かべ、首を右に傾けた。

「わたしは元々都会生まれなのよ。だから染まりようがないし、汚れてもいないの。あなたはここで生まれてここで育ったんだから、元々がきれいじゃないにしても、都会には染まっているのよ？ わかる？ 一度染まってしまったらなかなか落ちないんだから、きちんとこれを機に元に戻しなさい」

「ううむ」と僕はうなった。「何だかそれってミートソースがこびりついた白いシャツみたいな話だね」

「ふふふ」と彼女は笑った。「じゃあ洗っても取れないわね」

僕たちはしばらく堤防に並んで座って海を眺めていた。海も僕たちを眺めていた。時折り吹き抜けていく風が、ザザ、という波の音に変わり、波の音は砂利の音に変わっていった。

僕たちと海は特に語り合うことはしなかった。僕たちはそこに海があるから見ているだけだし、海の方も僕たちがゝたまたま、いるから見ているだけだった。僕たちが去れば次の人々を、ひとがいなければ空や木々を、それにも飽きたら星々を。こうして海は何億年も月日をかけて、均等に世界を眺めているのだ。

並んで座っている彼女の方を見ると、彼女は少し泣いているようだった。ちょうど僕側からは前髪に隠れていたのではっきりとは見えなかったが、ときどき鼻をすすっているのが聞こえてきた。

「どうしたの？」と僕は言った。

「うん」と彼女はまっすぐ前を見ながら言った。

「泣いてるの？」

「……………」

今度は返事がなかった。僕はそっと彼女の肩を抱き寄せ、そのやわらかな髪の毛を撫でた。彼女はずずず、と鼻をすする。

「鼻炎なの」

「え？」

「び・え・ん・な・の！」と彼女は少し怒り気味で言った。
「……あ、ああ、そうなんだ。ごめんごめん」
彼女は林の中の何かしらの花粉にやられたようだった。ロマンチックに浸った、というわけではなかったみたいだ。ま、そうだろうな、と僕は思った。
「反応するアレルギーが多いのも大変だね」と僕は言った。「さあ今からご飯だ、ってときに突然来客が来たみたいなものだよ。せっかく出来上がったばかりなのに、すぐに食べることができず冷めてしまう。長時間居座られた日には、やっとならされるようになってでも昨夜作ったもの食べるのと同じだもんねえ。あ、でもカレーだったら熟成されてるから良いのか。でもやっぱり温め直すよりは、出来立ての方が——」
「わかったわよ」と彼女は若干被せ気味で言った。「本当、あなたの例えって、意味がわからないわ」
予想通りの反応だった。たまに彼女をわざと困らせるのが最近の楽しみのひとつなのである。
「ははは、君の呆れた顔がどうしても見たくてね」と僕は言った。「そろそろ行こっか？」
「そうね、あなたの相手が丁度面倒になってきたから」
「ふふふ、僕の勝ちだね」
「はなから勝負なんてしてないわ」
「まあまあ、そう言わずに」
「ほんと、子供なんだから」
僕は彼女の手を取り、すっと立ち上がった。
「さ、行こう」と僕は言った。
「次は何処に行くの？」
「ええっと——」

「これはこれは」と何処かから声がした。

『いつかどこかで野良猫と』

「これはこれは」とその猫は言った。「久しぶりだね。いつぶりだろう。確か三年ぶりくらいだったかな？」
「わ、かわいい猫ちゃん。あなたのお知り合い？」と彼女は僕と猫とを交互に見た。

いや、誰だっけ。
「あ、ああ、ええっと、うん、久しぶり」
「忘れてるみたいだね」と猫は言った。

僕は昔から猫やら犬なんかに勝手に名前を付ける癖がある。近所を徘徊している猫だったり、軒先で日向ぼっこしている猫だったり、屋根の上からじいっと道路を見ている猫だったり、ひとり家の飼い猫だったり、旅先で出会う猫だったり、とにかく片っ端から勝手に名前を付けて呼んでいた。端から見るとかなり痛い人と思われるかもしれない（思われてると思う。思われていた。確か言われたことがある）。この猫も、多分前に適当に名前を付けて話しかけた猫だろう。そんな猫が旅先だけで二十六匹くらいいる。勝手に呼んでおいて申し訳ないとは思うけど、一回会っただけではいちいち覚えていられないのだ。山中さんやイソノさん※は別として。

※『野良猫をめぐる』参照

猫に名前を付けだしたのにはもちろん理由がある。猫の世界には名前という概念が無い（らしい）。だから便宜上の名前を勝手に呼び始めたのである。でも、とりあえず最初の頃はきちんと、「お名前は？」と話しかけていた。

「君のお名前は？」と僕は訊く。
「ナマエ？」と猫は訊き返す。
「うん、名前」
「食べものはカリカリより缶詰が好きなんだけどな」
「そういうんじゃないくて、君の名前だよ」
「ちょっと何言ってるかわからないな兄ちゃん」と猫は言う。
「うーん、ミケ、タマ、シロ、とか、色や形から連想したりしてお互いを呼び合う名称のことだよ。名前。無いの？ なま・え」
「それより、何か食べるものあるかい？」

一一というやり取りがほとんどなのである。意思疎通が基本的にあまり図れない。理解を示す猫もいるにはいるが、大体は言葉自体も伝わらないことが多い。下手すると怖がって逃げてしまう猫も少なくない。だからいつしか僕は訊かなくなり、こちらで勝手に名前を付けることにしたのだ。

「最近見かけないと思ってたんだ」と猫は言った。「やっぱり覚えてないのかい？」
「え？ ああ、うん。そうかもしれない」と僕は言った。猫って三日で忘れるんじゃないかな。おかしいな。近所の野良猫なんて、僕のことを覚えてもらえるまでに、二週間近くかかってた気がする。
「この猫ちゃんは何て言ってるの？」と彼女は訊いた。
「ああ、何か前に会ったことある猫らしいんだけど……」
「はっきりしないわね。覚えてないなら覚えてない。覚えてるなら覚えてる。ちゃんと言ってあげないとかわいそうよ？」と彼女は言った。そして猫の近くにしゃがみ込み「ごめんなさいね」と言った。
「いや、貴女が謝ることではないよ。大丈夫。僕たちなんて、所詮その辺にいる小動物だからね。そうだね、通りすがりに立ち寄ったコンビニ店員くらいの存在なのさ。慣れてるよ」
「ここまでは出かかってるんだよね」と僕は片手で喉を押さえながら言った。今度から名前を付けたらメモを残しておかないといけない。「ヒントなんかくれるとありがたいんだけど」
「ヒントねえ」と猫は言い、ひょいっと堤防に飛び乗り、箱座りの体勢に両脚を整え、ごろごろと喉を鳴らし始めた。海の方から太陽が照りつけていたため、後光が差しているようにも見えた。雰囲気大事なのかもしれない。待てよ、何か思い出せそうな気がしてきた。僕の記憶のドアに誰かがノックをし始める。「そうだ、僕を呼ぶときに変な呼び方をしたたね。何か普通じゃない呼び方。由緒正しい寺の名前だ、とか言って」
「あ！」
「思い出したの？」と彼女はこちらを見た。
「思い出したかい？」
「清水寺！」と僕は言った。「そうだった。キヨミズデラさんだ。そうだそうだ、何で忘れてたんだらう。呼びにくいなあ」と思いながら言っただけを覚えてるよ」
「自分で付けたのに？」と彼女は呆れた顔で言った。
「うん。呼びにくかった。ちょっと長いしさ」
「呆れた。でも、その由来は知りたいわね。あなたは知ってる？ キヨミズデラさん」
「ああ、由来までは聞いてなかったね」とキヨミズデラさんは言った。「そもそも僕たちは、だいたい一匹で行動するからそういった呼び方というのは無いんだよ。まあ、だから覚えていたというわけなんだけど」
「確か、何か優しく正しくきちんと話すからキヨミズデラっていう名前にした覚えがある」
僕はちょっとずつ思い出してきた。
「優しく正しくきちんと話すからキヨミズデラさん」と彼女は言った。
「そう。優しく正しくきちんと話すからキヨミズデラさん」と僕は言った。
「優しく正しくきちんと話さなかったら、何て呼ぼうとしてたんだい？」とキヨミズデラさんは訊いた。
「そりゃやっぱり」
「やっぱり？」と言って、彼女たちは僕の方を同時に向き、期待が混じった顔で見つめ始めた。
「……に」
「に？」
「……に、日暮里さん、かな」と僕は言った。言いづらい。「ほら、背中のところの日の丸みたいになってるからさ」
「日の丸……」と彼女は言った。日の丸さんにすれば良かったかもしれない。「……ねえ、キヨミズデラさん。わたし、ちょっとこの人と結婚したのって時期尚早だったんじゃないかって思ってきたわ」
「そうかもしれないね」と日の丸さん……キヨミズデラさんは言った。
「はは、まあ思い出したからよしとしない？」
「あなたに名前を付けられる猫ちゃんたちが気の毒に思えてきたわ」と彼女は言った。「あ、ねえねえ、キヨミズデラさん。お腹空いてる？ さっき買ったさきいか、があるんだけど」
「え？ いや、大丈夫。自分が食べるものは自分で探すことにしてるからね。ありがとう。気持ちだけ受け取るよ」

野良猫は大まかに二種類に分かれる。施しを良しとする猫と、一切受け取らない猫。日暮里さんは後者に当たる。そういえば以前も、僕が買って来た缶詰をあげようとしたとき断られた覚えがある。そして彼はキヨミズデラさんだった。間違えた。

「キヨミズデラさんは何て？」と彼女は言った。

「必要ない、ってさ」と僕は言った。

「そう……」

彼女はとても残念そうに言った。猫にごはんをあげるのが彼女はとても好きなのだ。でもここはキヨミズデラさんが正しいと僕は思った。あげ続けることが出来ないのなら、あげるべきではないのである。僕も何度目かで気付いたことだ。それまでは何も考えずにあげていた。ただ単純に美味しいものをあげたら喜んでもらえるもんだと思っていたのである。うん、後で彼女に教えよう。野良猫との接し方、飼い猫との違い、を。

「無理強いしちゃ駄目だよ。キヨミズデラさんはキヨミズデラさんの生活リズムがあるからね」と僕は言った。「悪かったね、キヨミズデラさん。彼女に悪気はなかったんだ」

「うん、大丈夫。わかってるよ。でも、何だかこちらも悪い気がするからお言葉に甘えて今日はいただくかな？」

「やっぱりいるって言ってない？　じゃあ、ちょっと待ってね、今バッグから出すから」と彼女は嬉しそうに言った。「駄目だよ」と僕はすかさず彼女を制す。「キヨミズデラさんはキヨミズデラさんなりに君に気を遣ってるだけなんだから」

「ええ？　でも……」

「めりはりはつけないとね、こういうときは」と僕は言った。「うちの妻がごめんね、キヨミズデラさん」

「ああ、うん、いや、良いんだよ本当、いただくよ、ちゃんと」

「ほら、キヨミズデラさんも良いよって言ってるっぽくない？」と彼女は言った。

「いや、ちゃんと空気は読まない。実は嫌がってたとしても、初対面のひとに対して、キヨミズデラさんも無下にできないでしょ？」

「そっか……優しく正しくきちんとしたキヨミズデラさんだもんね。ごめんね、キヨミズデラさん」

「あ、ああ。本当、気にしなくても大丈夫なだけだね」

空気を読まないのはどっちだよ、とキヨミズデラさんは思った。

「じゃあ、僕たちはそろそろ行くよ、キヨミズデラさん。また何処かで会えるといいね」

「うん、また何処かで」

二度と来ないで欲しい、キヨミズデラさんはそう思った。

僕たちはキヨミズデラさんにまたね、と言い、須ノ川海岸を後にした。

1991年。リトアニアにソビエト連邦が軍事介入していた頃、僕はその年頃の多くの子どもたちがそうであるように、自宅近くにある公園やその周辺にある駄菓子屋などで放課後の大半を過ごしていた。

自宅から公園までの道、実家の裏手には一本の細い川が流れている。その川は「ここからこちらは違う区域なんだよね、悪いようにはしないから入らないでほしいな」というように、道路と森を隔てて流れていた。昔はもう少しきれいな川だったらしいが、年々ところどころ淀んで黒く濁りだし、壁面には深い緑のコケが生え、その隙間からは名前も知らない雑草が顔を出し、よく分からない昆虫がよく分からない鳴き声を発していた。そしてその川の淀みからは嫌な臭いが発せられ、川というよりは生活排水の用の用水路と化しているようだった。それでもそれは『〇〇川』という名前が付いていたし、ときおり見える小さな魚影が、その川が少なくとも生きていることを物語っていた。

その川を少し東に進むと、そのへだたり、に橋がかかり、橋を渡った先に公園があった。それなりに大きな公園だ。大きいといってもサッカーや野球やらをやるようなよくある公園の広さというわけではなく（やろうと思えば出来ないこともないけど）、何層かに分かれた造りになっており、各層に遊具を分けて設置していた。一層目にブランコや砂場、滑り台、二層目にロープだか何かを使ったアスレチック関係、三層目に綱のぼりの壁や展望台、というように。大森山公園。それがその公園の名前だった。

そこは本当に広かった。大袈裟でなく小学生の頃の僕には本当に広く感じた。とても綿密に作られていたし、行き止まりというものが無いように思えた。何処まで上へ上へと登っても一向に終わりが見える気配がなく、あまりに先が見えないため行き着く前にこちらが不安になり、諦めて降りてきてしまうくらいだったのだ。もしかしたらマウリッツ・エッシャーの『無限回廊』のように、同じところをくるくると回っていたのかも知れない。上に登っているようで実は右に曲がっていたり、左に曲がったつもりが下に降りていたり、という風に。

木々の手入れなんかもしているのかどうかわからなかった。きれいに刈り揃えられているようにも見えたし、無造作に放置されているようにも見えた。それが道なのかそれとも何かの加減で出来たちょっとした空き地なのかなんて、六歳だか七歳の頭では理解出来るはずもなかった。

「それで結局その公園の奥には何があったの？」と彼女は言った。

「うん、やっぱり僕も何があるか知りたくて、ある日お弁当を入れたリュックを背負って、右手には良い感じの木の枝を持って、ひとりですの奥を探検することにしたんだ。良い感じの木の枝を持ってね」

「ふうん、面白そうね」と彼女はうんうん、と頷いた。「そして先を進むと、その奥には南レク公園があったのね」

「うん、そうそう、その奥は南レク公園と実は繋がってて……………え？」

「え？」

「いや、え？」

「え？」

「何で…………」

「知ってるのって？」と彼女は言った。「だって、地図アプリに表示されてるから。ひょーじ。ほら、見て？」

思い出話が台無しだった。

「地図アプリか…………」と僕は言った。

「あ、ごめんなさい。続きが聞きたいわ。もの凄い冒険だったんでしょ？」と彼女は言って、真剣な顔をして僕を見つめた。おそらく天然なのだろう。そう思いたい。

「うん、いや大丈夫。まあ冒険という冒険じゃないからさ」

「そんなこと言わずに教えて！ ね？」

「いや、本当に大した話じゃないんだよ。熊にも遭わないし、きつねもたぬきもないし、行く手を阻む殺人鬼もいなかったしね」

「愛媛に熊はいないわよ？」と彼女はきょとんとして言った。

「知ってるよ、と僕は思った。」

大森山公園からももう少し先に進むと、そこには小さな駄菓子屋があり、その向かいにも小さな公園があった。駄菓子屋の名物はたこ焼き。確か百五十円くらいだったと思う。大きさは小ぶりで、肝心のたこ、はこれ以上小さく切れないんじゃないかくらいの大きさではあったし、そもそもたこ、なのかどうかとも怪しかったが（入ってないときもあった）、その味は絶妙で、お小遣いさえ許せば何個でも食べてしまえる味だった。あの年頃はいくら食べても飢えていた気がする。お小遣い制ではなかった僕は、その都度五十～百円を母親から握らされて駄菓子屋に駆け込んだものだ。

「百五十円なら何個でも頼めちゃうわね」と彼女は言った。

「小学生には高価だぜ」と僕は言った。「駄菓子やらガムやらチョコやらを買うとすぐ百五十円くらいいったし、いつときの至福か、安いけど長持ちするお菓子がで良く悩んでたんだよ」

「ああ、そっか。そうねえ、そうだった気がする。何か、今の感覚で言っちゃうわよね、どうしても」

高価、といえどその駄菓子屋の隣りにはかき氷屋があった。しかし、三百円もしくは五百円という想像も絶するような金額だったため、数えるほどしか食べたことがない。そのかき氷の氷は、まるでふわふわと粉状に降り注ぐ雪の中に直接ガラスの器を置いて、降るがままに自然に盛り付けたような食感で、いちごやメロン、レモンにみぞれ、宇治金時、さらにはコンデンスミルクをかけた贅沢なトッピングがあり、口に入れた瞬間しゃりっという間もなく舌の上に溶け込む贅沢な味わいだった。おそらく今その店が近くにあれば、何度も通ってしまうレベルなんじゃないかな、と思う。それはほとんど中毒のように。

「他には他には？」

彼女は目を細めてにこにこしながら話を聞いている。

「そうだね、どうしても食べ物の話が多くなってしまっただけ」と僕は言った。

家の近くの木村のたこ焼き・たい焼き、いそべ食堂のソフトクリーム、間口食堂のオムライス、ふれんどの好み焼き、くろさわの天津飯、リトルマーメイドの焼き立てパン、そして忘れてはいけないもうひとつのたこ焼き屋が、親戚のおじさんが経営している、『なかよし』のたこ焼き。大阪で修業してきた、というだけあって本場に勝るような味だったのだ。『なかよし』は焼き飯も美味しい。実は。

「今では残念ながらやめてしまったお店も多いんだけどね」

「そう…………それは残念ね」と彼女は言った。本当に残念そうだった。「でも、そんな美味しいものを食べて育ったからこんなに大きくなれたのね」

「そうなのかね」

「きっとそう。いいなあ、わたしもこの町で生まれたかったなあ」

「背が今より高くなってたかもしれないから？」

「うるさい」

「ははは、本気でそう思う？」

「本気でそう思う。だって、こんなに自然がいっぱいだし、人もみんな優しそうだし」

確かに、ここは自然には事欠かなかった。水も美味しく、食べ物も新鮮で、近所の人は皆親切だった。いささか田舎町特有の過干渉さはあるけれど。

「いつかここで暮らすのもいいかもね」と僕は言った。

「あ、わたしも今そう思ってた！」と彼女は言った。「ここなら目移りするようなこともないし、夫婦仲良くずうっと一緒に過ごせそう。そうね、あなたのお父さんとお母さんのように」

僕は少し照れ臭くなり、返事をするかわりに彼女の右手を握り締めた。

『ねえ、どうしよう』

創始は不明。それが諏訪神社の歴史を調べた結果である。僕たちはゆっくりと町を散策しながら最後にこの神社に辿り着いた。辿り着いたといっても元々が小さな町である。二時間もあればすべてまわってしまう。和霊神社のときのように、背景や成り立ち、そんな沿革を知った上で御参りしようかと思ったのだが、そんな僕の思いは、唐突にハサミを入れられた電話線のようにぶつっとあっさり挫かれてしまった。

町の図書館や役所に行けばもしかしたら歴史などの詳細はわかるのかもしれない。もしかしなくてもわかるだろう。ウェブ上にすべての情報があるとは限らない。データ化していない物事の方が多いのだ。そして、調べれば調べるほど、とんでもない歴史がそこには隠されているのかもしれない。実はファティマ第三の予言のような、何か歴史にかかわる重大な秘密が隠されていたり、僕の出世の秘密なんかも隠されていたり、と（僕の出世の秘密！）。

まあ、でもそんなことはありえないので、額に汗をかいてまで調べたいとは今のところ思わなかった。

それでも、三十年以上何も考えずに御参りしてきたのだから、今さらわからなかったとしても特に残念だとは思わないし、じゃあ御参りするのやめよっか、とはならない。別に何かに信仰があるわけでもないのだ。

歴史は別として、諏訪神社には思い出が多い。本堂の下の土のところには蟻地獄があって、近くで蟻を捕まえてきてはその中に蟻を放り込み、当時はいつまでもそれを眺めていた。

蟻の地獄、と書いて、蟻地獄。噂とは違い、意外と蟻は簡単に逃げ出すことが出来る。そこで僕は逃げ出したところを捕まえてはもう一度蟻地獄へ放り込んでいた。すると、砂の中心からウスバカゲロウの幼虫が現れ、蟻がそれ以上逃げ出さないよう土を投げ付け、細かい砂で滑って登れなくなった蟻をさっと地面の中に引きずり込んでいた。人間規模の蟻地獄があればおそろしいな、と思いつつ見ているものだ。人間規模といえば、ジャバ・ザ・ハットがタトゥインで主人公たちの処刑の場所に指定していたのが蟻地獄だった気がする。

初めてお酒というものを呑んだのも諏訪神社だった。初詣の際、賽銭を投げ入れ何や彼やしたあと、特設されたテントの下で何やら透明な飲み物を渡されたのだ。よくわからない苦いものを呑まされ、よくわからない気持ちになった記憶がある。喉元を何か熱いものが通り過ぎ、食道を経て胃の中に広がり、吸収された何かが血の中を駆け巡っていくのを感じていた。『御神酒』という存在を知ったのは後日のことだ。

そういえば、足が悪くなった祖母の手を取ってお参りに来たこともある。ある年だけ、一度きり。

「お参りに行きたいねえ」と祖母が僕に言った。

もしかしたら僕に向けて言ったわけじゃないのかもしれないけれど、そのときの僕は、僕が連れて行かなければならない、という使命感が沸いてきた。

「じゃあ今から行こう」と僕は言った。それを聞いた祖母の驚きの混じった嬉しそうな顔が印象的だった。

僕は、ゆっくりと道路を確かめながら歩く祖母の手を握り、一步一步進みながら諏訪神社へと向かった。

「大丈夫？ 足痛くない？」

「うん」

歳を取るに連れ、だいぶ口数も少なくなった祖母を気遣いながら、一步一步あるいた。

小学生から中学生にかけては、毎年のように友人と一緒に御参りに来ていたのだが、その年だけは祖母と二人でお参りをした。

もうその祖母も旅立ってしまった。もっと一緒にお参りに行けば良かったなあ、と僕は思った。僕はいつも後になってから大切なことに気づく。

「この階段を登るのはちょっとほねだね」と僕は言った。諏訪神社は、二百段だか三百段だか石段を登った頂上にある。

。「そうね、足腰を鍛えるのにはちょうど良いのかもしれないけど、今から鍛えるとしたら少々やり過ぎだし、膝にきそうね明日あたり。ほら、わたしってもう若くないから」と言って彼女はちょっと考える動作をした後、「うるさいわね」と続けた。何も言っていない。

僕は、そうだね、も、そんなことないよ、とも答えず、ただ後ろを振り返り、にこっと笑ってまた階段を一段ずつ上った。どっちを答えても、どちらにしろ怒られるだろうなと思ったためである。

昔はここをよく下から頂上まで駆け上がっていた。もも、やふくらはぎ、に乳酸が溜まるまで何度も登り下りしたものだ（何度も、は言い過ぎたかもしれない）。体力があるにせよ無いにせよ、最後のあと二十段くらいがきつい。軽快に二段、三段飛ばしで登っていても、途端に後ろから両足首を掴まれたように足の動きが鈍くなる。こっこの意図とは違うところから、突然リモコンでスローモーションボタンを押されたと思うくらいに。

「もうすぐ頂上だよ。大丈夫？」

「うん、全然大丈夫。おんぶして」と彼女は言った。

諏訪神社の境内をぐるりと見回してみると、大小の社の中それぞれに神々が鎮座していた。恵美寿、八坂、愛宕護、稻荷、辨天の五つの社で成り立っているようだった。とても贅沢な神社だったんだなあ、と僕は思った。物心ついたときから訪れていた場所ではあったが、こうしてあらためて視点を変えてみると、木の一本一本に至るまで厳かな趣きがあり、気付かなかったことに気付かされる。今だからこそ気付けたこともあるのかもしれない。

二礼二拍一礼。僕たちはそれぞれの想いを込めて鈴を鳴らし、二回おじぎをした後かしわ手を二拍打ち、最後にもう一度神様へおじぎをした。

「何を願ったの？」と僕は訊ねた。

「願い事を口に出して人に言っちゃいけないのよ？ 願い事だから」と彼女は言った。

「へえ、そうなんだ。人に言ったらどうなるの？」

彼女はそうねえ、と言って僕の目の奥を覗き込んだ。「願い事が半分になっちゃうの。わかる？ 百人に言ったら百等分になるよ」

「ふむ」とそれを聞いて僕は両腕を組んで考え込む仕草をした。「それは困るね。元々の願い事の大きさがあまり大きいものじゃない場合、その願いはほとんど僕の手元に残らない計算になる。ねえ、どうしよう？」

「何言ってるの。言わなきゃいいのよ。ただそれだけ」

そう言われると、どうしても言いたくなる。

「君とずうっと仲良く一緒に居られますように、

それが僕の願い事だった。しかし、それを百等分するとなると、あと七十年は頑張っ生きてとしても、残り約半年くらいしか一緒に居られない計算になってしまう。何だそれは。願い事が叶わない方が逆に良いパターンだな、と僕は思った。考えるんじゃなかった。考えるべきではなかった。日曜夕方のアニメの時間になると、月曜のことを考え気分が憂

鬱になるように、幸せなときというのは同時に同じくらいの嫌なイメージが浮かんでくる。面倒な性格だ。昔からこんな思考に悩まされているのである。三つ子の魂百まで、とは良く言ったものだ。

「ねえ、何かまたぶつぶつ言ってるそこの君」と彼女は言った。「そろそろごはんを食べませんか？」

「え？ ああ、そうだね。もうこんな時間か」と僕は慌てて時計を見た。「よし、美味しい物を食べに行こう」

ぶつぶつ。

「でも、まずはシャワーね。一刻も早くシャワーを浴びて着替えたいの。一刻も早くよ。シャワーを浴びないことには何も始まらない。歩き回って汗をかき過ぎたのよわたし。いざさかの量の汗を。汗を落とさないとごはんすら喉を通らないと思うの」

「確かに。僕も作業か何かしてたときみたいに、シャツが身体全体に張り付いちゃってるよ。何か汗くさい気がするし」

彼女はそんな僕を見ながらうふふ、と笑い「ちょっと匂わせてみなさい」と言って、いたずらっぽい顔で鼻を近づけてきた。

『移動する雲、欠け始めた月』

「何これ？ こんな美味しいブロッコリー初めて食べたんだけど」と彼女は感嘆の声で言った。
「いやいや、言ってもブロッコリーだよ？ 小さい木を食べてみたいで僕はあんまり好きじゃないんだよね。そんなにうまいわけがないと思うんだけど」
「そんなわけのわからないこと言わずに食べてみてよ。きっと気に入るから。だって、四国の野菜は日本一美味しいのよ？」
「ブロッコリーがそんなに美味しいわけ——」と僕は半信半疑でブロッコリーを箸で掴んだ。四国の野菜が日本一だなんて話初めて聞いたな。それに、ブロッコリーは昔から好きじゃない。全然好きじゃない。出来ることなら食べたくない。なるべくブロッコリーを食さないような人生を歩んできたのだ。今さらだな、と思う。でも、まあもう大人だから食べないことはない。僕はぶつぶつ言いながらもブロッコリーを口に運んだ。「……………え？ いや、これ……美味しいね……」と僕は言った。何だこれ、本当にうまい。
「だから言ったのに」と彼女は得意気に言った。「あ、でもブロッコリー嫌いだって言ってたっけ。残りは食べてあげるわね」
「う、うん。……べ、別にいいよ」
同級生が経営している居酒屋で僕らは晩御飯を食べることにしたのだが、思いの外野菜がうまいことを今日僕は初めて知った。前に帰郷したときにも食べてれば良かったなと思った。しかし、鼻目抜きでこの店は何を食べてもうまい。串焼きなどの焼き物、サラダ、お刺身、揚げ物、焼き飯、チャンポン、とにかく何でもあるし、ハズレがない。もちろん居酒屋だけあって、酒もうまい。彼女はビール、そしてハイボールを飲み。僕はウーロン茶とグレープフルーツジュースを飲んだ（酒じゃない）。
「こうちゃん、やっぱこの店の料理相当うまいね」と僕は言った。
「ありがと」とこうちゃんは言った。「いつまでこっちおるん？」
「とりあえず明日九州に行こうと思ってるよ」
「ええねえ。奥さんは都会の人やろ？ じゃあ九州行く前に柏島に連れて行かんといけんで」
「柏島？」と僕は訊き返した。「それ、初めて聞いたんやけど、何処にあるんかね？」
「高知県にあるよ」とこうちゃんは柏島について簡単に説明してくれた。
柏島。そこはまるで、カリブ海のように水の透明度が高く、約千種類もの魚類がひしめき合う、豊かな海に囲まれた周囲わずか四キロメートルほどしかない小さな島。高波対策の防波堤にぐるっと囲まれた島内には、家屋が所狭しと密集し、やたらと猫が昼寝をしている。古い家屋にはブルーのペンキが塗られており、ギリシャの小さな島を思い起こさせる。郵便局、診療所、島の南には灯台、キャンプ場、もちろん神社もある。そして島北部にはテーブル珊瑚などの珊瑚礁があり、日本屈指のダイビングスポットでもあるということだった。
「猫……」と彼女は言った。「やたらと猫がいるってのは本当？」
「うん。そこら中で昼寝しよるよ」とこうちゃんは言った。
「行きましょう」
「え？」
僕は焼き鳥を食べるのに必死であり聞いていなかった。
「何処に行くって？」
「何言ってるの？ 柏島に決まってるでしょ？」
「柏島に？」
「そうよ。絶対行きたいわ、そこ。わたしそこ絶対行きたい。行きたいと言ったら行きたい。連れて行ってくれないと、あなたが後生大事にしているレイバンのサングラスのレンズの部分にマジックで「レイバン、って書くわよ。しかも大き目。これでトム・フォードしか使えなくなるわね」
何て怖いことを言うんだ。
「わ、わかったよ。じゃあ行こう」と僕は言った。「でもね、九州へ行くフェリーの時間もあるから、ちょっと柏島までの往復時間を調べてから決めよ？」
「まあまあかかったと思うよ。確か」とこうちゃんは首を少し傾げ、思い出しながら言った。「フェリーの時間は何時なん？」
「ええっと、15時やったかな」と僕は携帯で時刻表を調べて言った。
「ああ、じゃあちょっと無理やね。往復で五、六時間かかるけん」
「ええ!?」と彼女は悲痛な声を出した。「猫ちゃんに会えないの？ ねえ、何のために愛媛まで来たのよ」
少なくとも猫に会うためではないかな、と僕は思った。そして言いそうになった。猫に会えないことより透明度が高い海を見れないことの方が気になると思うのだが。
「仕方ないよ。次の予定もあるし。ほら、九州でうちの両親も待ってるしさ」と僕は彼女をなだめるように言った。
「ううう」と彼女は恨めしそうにしている。
「九州にも猫はいるよ」とこうちゃんは僕と彼女を見比べながら、見かねて彼女に声をかけた。
「本当？」
「うん、九州にももちろん猫はいるよ」と僕も言った。鈴木さんと佐藤さんが何処にだっているように、猫くらい何処にだっているのだ。
「嘘ついたらどうなるかわかる？」
「え？ ど、どうなるの？」と僕は恐る恐る訊いてみた。
「ふふふふ」
彼女は、僕の問いかけには答えず意味深に笑うだけだった。そして満足そうに「ごちそうさまでした！」と言った。どうなるのだろうか……。

「美味しかったね」と僕はレンタカーのシートにもたれかかり、シートベルトをしめながら言った。
「うん、予想を上回る美味しさだったわ。わたしね、あんなに美味しい食事だったら毎日同じものでも食べれちゃう気がする」
「そうだね。でもあんなにうまいと多分太るね。食べ過ぎちゃいそうだし」
「あなた、さっきも意外と食べてたわね。焼き飯もお土産に買ったみたいだし。大丈夫？ 太るのはいいけど、お腹壊さないでね」
空を見上げると、雲の合間から夏の星座がきらきらと光っているのが見えた。先ほどまで町全体を覆っていた雲が少しずつ移動し、欠け始めた月も時折顔を見せ始めている。
「ねえねえ、ちょっと山の方に星を見に行こうか？」と僕は言った。田舎に来て星を見ない手はない。
「あなたって、ときどき素敵な提案をするわね」と彼女は言った。
「え？ そうかな？ 多分、展望台付近まで行けば空一面に広がる星が見えると思うよ。知ってた？ 星が綺麗に見える

ると、地球が丸いってというのがよくわかるんだよ」

「うん！ 実はね、楽しみにしてたの。昔ね、東北で星を見たんだけど、そのときの目が痛くなるほど綺麗な星が忘れられなくて」

僕は優しく微笑んで彼女に言った。「それを前に聞いてたのを覚えててね」

「ありがとう」と彼女は言った。「ねえ、じゃあこれは知ってた？」

「ん？」

「あなたのそういうところ、たまらなく好きよ」と彼女は言って微笑んだ。

『それはまるでチェシャ猫のように』

「猫、いないの？」と彼女が呟いた。

「ん？」

「……………すうすう」

「どうやら寝言のようだ。」

田舎の空に広がる星を心ゆくまで堪能した彼女は、疲れたのかホテルまでの帰り道、レンタカーでぐっすり寝入ってしまった。その寝顔はとても無防備で、とても危うい綺麗さがあつた。触った途端に消えてしまいそうな儚さすらあつた。

「なんだ、寝言か」と僕は言って、カースピーカーの音量を少し下げ、起こさない程度の音で、ノラ・ジョーンズの『ザ・ロング・デイ・イズ・オーバー』を鼻歌で唄った。

それにしてもどんな夢を見ているのだろう。本当、猫好きだな、と僕は思った。そして、何ヶ月か前の、彼女とうちに
いる二匹の猫たちとの出会いを思い出した。

「紹介するよ」と僕は言った。そろそろきちんと紹介しなければならない、と思った僕は、彼女を初めて自宅へ連れて来たのである。しかし紹介すると言ったのは良いが、先ほどまで玄関に居たはずのミシェルは一瞬のうちに何処かに行ってしまう、影も形もその痕跡すらも消し去り、隠れられてしまった。一旦猫に本気で隠れると、こちらにも本気にならないと見つけられない。本気になったところで見つけられないときもある。え、ここさっき探したよね？ というところからひょこっと出てきたり、そんなところ入れるの？ というところに隠れていたりするからである。どんなに狭い部屋であつてもその天才的な隠れんぼ仕様は変わらない。

もう一方の朔太郎はというと、まるで警戒心というものを持ち合わせていない。誰が突然部屋に来たとしても、まずはその人間の足やら物やら何や彼やをしつこく匂い続け、その後じっと僕と相手の顔を交互に眺め始める。まるで、信用できるかどうかはそのひとの匂いと見た目によって決まるというように。

今回も例によって彼女のバッグをしきりにくんくんしていた。

「持ってますか？」と朔太郎は一步下がって彼女に訊ねた。

「……ええっと」と彼女は助けを乞うように僕の方をちらっと見た。

「ここに来る前に言ってたあれだよ。あれ」と僕は小声で言った。

「ああ！ あれのことね。ごめんね朔ちゃん気づかなくて」と彼女は言って、バッグからごそごそと「あれ、を取り出した。

「わあ！」と朔太郎は驚きの表情で彼女に駆け寄った。「これくれるんですか?! 〇 これ焼きささみです！ 焼きささみですよ？ あの人（僕）に泣いて（鳴いて）頼んでも買ってきてくれなかったのに！（ケチだから）」

うるさい。

「良かったね。朔ちゃん。カリカリより豪華だよ」と僕は言った。

「本当にこれで良かったのか心配だったけど、予想以上に喜んでくれて嬉しいわ」

朔太郎は、どうせもらえてもカリカリくらいだろう、と高を括っていたようで、もう彼女に……いや、焼きささみに「めろめろ、である。

「ミシェルちゃんは何処にいるの？」と彼女は言った。「ミシェルちゃんにも買ってきたのに、会いたいなあ、ミシェルちゃんにも」

「隠れちゃったみたいだね。あの娘は照れ屋さんだし、素直じゃないからね。大丈夫、きっとそのうち出てくるよ。大体いつもお腹空かしてるから」

「そっかあ。でも、お腹空かせてるって、ちゃんとご飯あげてないの？」

「あげてるんだけどね」と僕は言った。「あげてるんだよ朔ちゃんにもミシェルにも、でもね、どれだけご飯をあげてもその十分後には、ご飯はまだかしら？ って顔で僕の周りをうろうろし始めるんだよ」

ご飯の量も充分にあげている。おやつだってたまにあげる。しかしそれでも何かを患っているかのように、食べたことを忘れてしまうのである。若年性の何かか、かもしれない。いや、確信犯だよな、と僕は思っている。

「そうなんだ」と彼女は言って、焼きささみを一瞬で食べ終え毛繕いをしている朔太郎の頭を撫で始めた。「美味しかった？ 朔ちゃん。また買ってきてあげるね」

「本当ですか?! 〇」と朔太郎は言って、毛繕いを中断し、また僕と彼女の方を交互に見た。「あの人（僕）は全然おやつくれないのに！ とても良い人です！ 好きです！」

朔太郎は、わーい、と言って寝室の方に走って行った。それを見ながら彼女はぷるぷると震えている。

「ど、どうしたの？ 大丈夫？」と僕は言った。

「か……」

「か？」

「かわいすぎる」と彼女は言った。「どんどんおやつ買ってあげないと！」

「……やめといた方がいいよ」と僕は言った。

「ちょっとトイレ借りていい？ あまりにもかわい過ぎて、トイレに行こうと思ってたの忘れてたの」

「もちろん。そのドアを開けたところがトイレだよ」

「ありがとう」

さて、と僕は思った。ミシェルを捜さないと。何処に行ったんだろう。ベッドの下かな？

僕は寝室へと向かった。

「あんなかわいい子と一緒に住んでるなんて羨ましいわ。羨まし過ぎて、鼻がむずむずするわね」

トイレに入った彼女は、先ほどの朔太郎の事を思い出し、ふふふ、と思い出し笑いをした。

「それは、アレルギーね」と何処かから声がした。

「え？」と彼女は反射的にきょろきょろと周りを見渡した。誰もいない。そもそもここには窓も中を覗くような穴も何もない。「誰？」

「聞こえなかったの？ アレルギーよ、その鼻のむずむずは。猫アレルギー」

まるで神のお告げのような響きだった。一瞬神のお告げか何かと思ったくらいだった。

「何処から声がするのかしら？」と彼女はもう一度周りを見渡した。「変ねえ。ねえ、何処にいるの？」

「焼きささみはまだあるのかしら？」

「あ！」

彼女は声のする方に集中すると、トイレトペーパーの陰で香箱座りをしている猫を見つけた。ミシェルだ。
「チェシャ猫かと思ったわ。こんにちは、ミシェルちゃん。そんなところに隠れていたのね」
「別にわたしは逃げも隠れもしてないわ」とミシェルは言った。「わたしの行く先にトイレがあっただけ、ただそれだけよ。それよりー」
「焼きささみね」と彼女は言った。
「何やら美味しそうね。でもね、勘違いしないでね。わたしはそれを食べたいんじゃないの。食べて欲しそうだからいただくのよ？」
正確には分からないけれど、すぐ焼きささみに飛びついて来ないところを見ると、話に聞いていた通りややこしそうな猫ね、と彼女は思った。
「はい、お近づきの印よ」と彼女は言い、焼きささみをミシェルに差し出した。いや、献上した、と言った方が正しいかもしれない。
何度かくんと焼きささみを鼻で嗅ぎ、ゆっくりと、それでいて素早くミシェルは口の中に焼きささみを入れ、ほとんど飲み込むような勢いで食べ始めた。
「良く噛んで食べてね」と彼女は言ったが、ちらっとこちらを見ただけで、ミシェルはそれには答えなかった。「ねえねえ、食べながらで良いから教えて欲しいんだけど、この鼻のむずむずの正体をミシェルちゃんは知ってる？」
「そうねえ」とミシェルは言った。
「あ、食べ終わってからで良いよ」
「もう食べたわよ」
「もう食べてみたいね」
「で、何だったかしら？」
「鼻のむずむずのことを教えて欲しいの」と彼女はあらためて訊いた。
「ああ、そうだったわね」とミシェルは口の周りについた焼きささみを、愛おしそうに舌で舐めながら言った。「教えてあげなくもないわ。でも、その前に約束してちょうだい」
「え？」
「その一、今わたしはあなたに焼きささみをもらっていない」とミシェルは彼女に向けて指を一本掲げた。
「え？」
「最後まで聞いてね」
「？」
「その二、今日あなたは焼きささみを朔ちゃんには買って来たけど、わたしの分を買って来た。ここまでは良い？」
良くわからなかったが、うん、と彼女は返事をした。一と二があって、次は三だな、ということはわかった。
「理解が早い人って好きよ」とミシェルは言った。「そしてここが重要よ。その三、買い忘れたから、もう一度あなたはお店で焼きささみを買ってくる。分かった？ 味はもちろん変えてね。そしてあの人（僕）には内緒よ。あ、この焼きささみの包装はきちんと捨てておいてね」
ミシェルは空になった焼きささみの包装をペロペロとなめながら、もう一度、わかった？ と彼女に訊いた。
「え？ ううんっと、ああ、なるほど。足りなかったから、もっと食べたいってことね。そう言ってくればもちろん買ってあげるのにミシェルちゃん」
「何言ってるの？」とミシェルはきょとんとして言った。「あなたは買い忘れたの。良い？ 買い忘れたのよ？ だからわたしはまだもらっていないの」
買ってあげるって言うてるのに、何だか怒ってる。素直じゃないというのはこういうことか、と彼女は思った。彼（僕）の言った通りだった。結局鼻のむずむずの正体を教えてくれたかどうかはわからない。でも、そんなところもかわいいなあ、と彼女は思ったのだ。だ。
「じゃあ、買ってくるから待っててね！ ミシェルちゃん」
「ミシェル、で良いわよ」
「これからよろしくね！」

国道56号線のバイパスを通り、山間のトンネルを抜け、夜の闇の中を運転しながら懐かしいなあ、と僕は思い出に浸っていた。もちろん、あの後彼女が焼きささみを買に行くのは阻止したのだが、何度もとぼけるミシェルに対して、何度もレシートを見せたり、食べ終わったばかりの焼きささみの包装を見せ続けるのには苦労した。
「記憶にないわ」としか言わないのだ。

「――猫、いないんだったら連れてきてね」と隣りで寝ている彼女がもう一度寝言を言った。

寝言ではないのかもしれない。

『もちろん、と僕は言った』

7月6日 晴れ

普段慣れていない場所で眠ると、必ずと言って良いほど目が覚めたときに少しの間混乱する。「……あれ、ここは何処だ？ ……うん、ああそっか、ホテルか。そうだったそうだった。はいはい。別にわかってたし」という風に。それはほんの一瞬のことではあるけれど、見覚えのない天井が目に入る度に毎度毎度性懲りもなく思ってしまうのである。人間というのは、天井の染みや模様あるいは色や高さなどで自分の部屋と認識しているのかもしれない。いい加減な認識能力だな、と思った。

僕はあまりはっきりとしない頭を起こすため、目を何度もしばしばさせ、ぐぐぐ、と両腕を伸ばし、肩甲骨を後ろに反らせ、ベッドから身体を起こした。そして五分ほどドレッサーの椅子を見つめた後、バス・ルームに行き石けんで顔を洗った。鼻の下や頬の辺りを念入りに洗った。電子タバコの匂いが染み着き、彼女に言わせると特有の焦げ臭いような匂いがするという事なのだ。年齢的なものならある程度仕方のないことだが、何とか防げるものなら防いでおいた方が良い。

部屋に戻ると網戸もない窓を少し開け（ホテルには網戸がないのは何故だ）、顔を洗った意味もなく電子タバコのスイッチを入れ水蒸気を外に向かって吐き出した。外はまだ少し曇りがかかっていたが、ところどころから陽が淡く降り注いでおり、徐々に上がっていく体感温度が今日も暑くなることを予想させた。僕は自分の予想を確かめるため備え付けのテレビのスイッチを押し、朝のニュース番組にチャンネルを合わせた。ちょうどはかったように天気予報が始まる。「おはようございます！ 今日暑いですね。外を出歩く際は、日焼け止め対策を忘れないでくださいね！」

天気キャスターが誰でも言えるようなことを言っている間、僕はもう一本電子タバコを吸い携帯電話を取り出し、天気予報のアプリケーションを立ち上げた。そして近隣の天気情報を確認した。疑い深い性格だなあ、と思うかもしれないが、テレビの天気予報なんて、大まかな地域の情報しか流さないのだ。じゃあ初めからそうしたらいい、という苦情はあいにく受け付けていない。申し訳ないとは思うけど。

「おはよう」

彼女は上半身を起こし、その状態のままぐぐぐ、と両腕を伸ばし、肩甲骨を後ろへ反らした。「もう起きてたの？」

同じことやってるな、と僕は微笑ましくなった。

「うん、おはよ。昨晚は良く眠れた？」

「うん、良く眠れたと思う。まあまあ」

どっちなんだろうか。

「それは良かった。じゃあ、食堂に朝ごはんを食べに行こう」

「うん！ トイレに行って、顔を洗って、シャワーを浴びて、ドライヤーで髪を乾かして、ベースメイクして、ある程度髪を整えて、着替えてからでも良い？」

「う、うん。もちろん」と僕は言った。

白いごはん、漬物、お味噌汁、生卵、味付け海苔、サラダ、豆腐。質素ではあるが、このホテルの朝食は何かの見本のような朝食だった。『日本の朝食』と題した札を貼って、何かの展覧会に出品したいくらいだった。焼き魚があるとより完璧なんだけどな、と思ったが、これはこれで十分だった。僕は写真でも撮っておこうと思って、タイトルを横に添えるためボールペンと紙を探したが、残念ながら近くにそれらは見当たらなかった。残念ではあったが、まあ借りに行くほどでもなかった。

ごはんを食べ終え温かい煎茶を飲み、僕は、ふう、とひと息ついた。ちょっと食べ過ぎたかもしれない。まあいい。太れば走ればいい。

食堂のテレビからは、バングラデシュの首都だか何処かで武装集団による人質立て籠もり事件が発生し、日本人を含む人質二十人が死亡した、とニュースキャスターが抑揚もなく伝えていた。あまりにも他人事のように言っているのだから、それを聞いても僕は何の感情もわかかなかった。人質の詳細や事件の背景やらは多少気になったが、キャスターは特にそれには触れることもなく「次のニュースです」と続けた。

多分このキャスターも中立的なジャーナリストの立場で正確に出来事を伝えようと努めているのだろう、と思ったが、その後のニュースではある大物芸能人が亡くなった、と少し興奮気味に伝えていた。八十六歳、肺炎。明らかに老衰だ。興奮気味に伝えた後、今度はすぐに次のニュースにはいかず、その死因を掘り下げようと共演のコメンテーターと好きなように発言し始める始末だった。

遠くの一般人より近くの芸能人を掘り下げる。相変わらず反吐が出るような情報操作だな、と思った。

「世界一の鉄道トンネルの話はまだかしら」と彼女は言った。芸能人よりもテロ行為よりも、彼女はキャスターの後ろにある次のトピックスの方が気になるようだった。

僕らは朝食を済ませ、ホテルをチェック・アウトし、レンタカーに乗り込んだ。僕は次に向かう場所までの距離を調べるためアプリの地図を開き、彼女は車に乗り込んだと同時に一生懸命日焼け止めを塗り出した。

「今日も念入りだね」と僕は言った。

「しみ、がある奥さんがお好み？」と彼女は言った。

「好み、と言っても塗るのはやめないんでしょ？」

「ふふふ。それより今日はフェリーの時間まで何処に行くの？」

「今日はー」

滑らかな岩と清らかな溪流、そして四季の新緑紅葉が織りなす絶妙の風景。それがこれから行く滑床溪谷のキャッチ・コピーだった。

溪谷の入り口から、片道約一時間ほど川沿いの山道を進んだところにある雪輪の滝は、高さ八十メートルの滑らかな岩肌を雪の輪のような水紋を残しながらなめる、ように流れ落ちる様子がとりわけ美しい、日本の滝百選にも入っている雄大で壮大な滝である。

「まだ少しかかるから、あれだったらちょっと寝てるといいよ」と僕は言った。

すると、彼女は真剣な顔をして運転席の方を向き、あなたねえ、と言った。

「あなたねえ、こんな大自然に囲まれて、こんな景色が素晴らしいところで、そんなあっさり寝てしまえると思う？ 何言ってるのよ。これで寝たらわたし、何しにここまで来たのかわからなくなっちゃうわ。勿体なくて寝られるわけないでしょ？ 大丈夫。疲れたらわたしが運転代わってあげるから、いっぱいお話ししようね！」

「そうだね、ごめんごめん。ありがとう」

滑床溪谷までは大体一時間半ほどかかる。ナビ通りに行けば、である。特に行く手を阻むような事故も渋滞もなければお昼前くらいには到着するだろう。僕はイグニッション・キーを回し、四万十川支流の滑床溪谷へと車を走らせた。

「以前来たときは滝の方まで行けなかったから、今日こそは最後まで行きたいんだよね」と僕は言った。「でね、途中にはサルやら鹿やらがいるんだって。東京では信じられないと思わない？ あ、うちの父親が初めて母親とデートした場所らしいんだけど、そのときサルにお弁当取られちゃったんだってさ。ちょっと怖いよね。サルって目が合うとじいっとこっち見てくるから襲われないように注意しないと。絶対食べ物持って歩かないようにしようね。そうそう、食べ物といえば、お昼ご飯どうしよっか？」

「……………すうすう」

予想はしていたが、彼女は助手席ですやすやと眠りについてた。

実にナビ通り、お昼前には溪谷に到着した。この土地には「渋滞」というのはないのかもしれない。「渋滞」という言葉すらないのかもしれない。

「着いたよ、ねえ、起きて」

「ん……？ あ、着いたんだ」と彼女は言って、ぼうっとした目でフロントガラスを眺めている。

「大丈夫？」と僕は訊いた。

「サル」

「サル？」

「サルがいるってどこまでは覚えてる」

「ああ、サルやら鹿やらがいるらしいよ、ここ」

「サル……エサ……ダメ」

なぜ片言なのはとりあえず置いておいた。

駐車場には『エサは与えないでください』と書かれた看板が立っていたが、僕は眠気覚ましに助手席で眠そうにしている小さいおサルさんに眠気覚ましの缶コーヒーを買い与えた。それくらいは許されるだろう。

「さて、行きましようかね。歩ける？」

「どこまでも」と彼女は言った。

夏の木漏れ陽がそのゆらゆらとした水面に映り、さらさらと滑るような穏やかな水流に落ち葉は流されていく。虫や魚や植物や木や石すべてがその空間を調和し、そこにひとつの世界を作り出していた。

こんな滑りやすそうな山道を歩くなら、本気の靴を買っておいたら良かったなあ、と僕は思った。彼女も自分の靴を眺めながら同じことを考えているようで、しきりに靴の裏を気にしている。一緒にいると、考え方まで似通ってくるから不思議だ。

「いま何か柔らかい物を踏んだ気がするの」と彼女は言った。「ちょっと見てくれない？」

同じことは考えてなかったみたいだ。

「ん？ 何だろね。ええっと、特に何も付いてないみたいだよ」と僕は言った。

「本当？ 良く見て」

「いや、本当に。多分泥か何かでも踏んだんじゃないの？ もしくはサルの糞とか」

「そのことを言ってるのよ、わたしは。だって、おサルさん専用のトイレがあるわけじゃないんでしょ？」

「大丈夫。本当に何も付いてないよ」

「ふん」

「え？ 糞？」

「うるさい」と言って、小さなおサルさんはぷんぷんしながら山道の方に歩いて行った。

「見て見て、物凄い綺麗よ」

確かに綺麗だった。こんな綺麗な川を見ていると、飲みたい、とは思わないが、思いっきり泳ぎたい気持ちになる。ビーチサンダルと水着が欲しい。ビーチサンダルと水着さえあれば、何とでもなる。濡れた身体は歩くだけで乾くだろうし、サンダルを履いてるから足が汚れる心配もない。

「これは泳ぎたくなるねえ」と僕は言った。

「見ててあげるから泳いでくる？」

「うん、今日は大丈夫。先に進もう」

川沿いをひたすら歩く。特に舗装されている道ではないが、定期的に観光客や地元住民が歩いているのだろう、地面も固く、山道にしては比較的歩きやすい。時折顔や足にかかる蜘蛛の糸が気持ちを軽く萎えさせたが、良い感じの木の枝を振り回しながら歩くことで、それも解消された。

「あ、橋があるわよ」と彼女は言って、携帯電話をバッグから取り出し、そのカメラ機能で橋から見える景色をパシャパシャやり始めた。「ねえねえ、こっち向いて」

「じゃあ、僕も撮ろうっと」

「横顔しかダメよ」

「どうして？」

「だって、撮った写真を見られると恥ずかしいじゃない」

「ええっと、本来写真ってそういうものなんだけどねえ。だからこっち向いて。笑顔でね」

「仕方ないわねえ」

まんざらでもなさそうだった。

写真の中の彼女はこちらを向いて笑っている。この素晴らしい瞬間を切り取れるカメラという発明に、僕は感謝せずにはいられなかった。

「こうして一枚一枚思い出を切り出し、形として残っていくのね」と彼女は言って、自分の撮った写真を見ながら小さくため息をついた。

「どうしたの？」

「ねえ、もしいつか何も思い出せなくなる病気になったとすると」と彼女は立ち止まってこちらを向いた。「そうになったら、今こうやって一緒に歩いていることとか、一緒に笑い合ったこととか、一緒に過ごした色々なことぜんぶ忘れてしまうのかな？ 写真を見ても思い出せない。あなたのことを見ても誰だかわからない。それってあまりにもひどい話だと思わない？ 忘れる方も辛いけど、忘れられる方なんてもっと辛いと思わない？ だったら思い出なんて作る意味あるの？ 写真すらも意味がなくなると思わない？」

「思い出を作る意味」と僕は言った。「そうだね、もしそうだとしたらとても悲しいよね。もちろん病気になってない方も苦しいと思う。でもね——」

そこまで言って僕は彼女の右手を取り、自分の方に引き寄せた。

「でもね、思い出があるからこそ、病気になっても相手の面倒を見ることができるんだよ。それにね、病気になった方も

鮮明には覚えてないかもしれないけど、`これまでの人生って何か楽しかった気がする、くらいの記憶はあると思うから、僕はそれで良いと思うんだよね。無理に覚えてなくてもいいんだよ。本当の記憶は消えずに体がきちんと覚えているからさ。だって、一昨日何を食べたかすらすぐに思い出すのって多少時間かかるでしょ？ でも、それでも何か美味しい物食べた、くらいはすぐに思い出せるよね」

「……そうね。よくわからないけど。うん、わかった。ありがとう」と彼女は言った。

よくわからないのかよ、と僕は思った。

「ねえ、一昨日って何食べたっけ？」

「ええっと、何だっけね」

「ふふふ」と彼女は笑った。「あなたはもう病気になってるみたいね」

「うるさいよ」

「ねえ」

「ん？」

「わたしのことずっと覚えていてね。面倒もきちんと見てね。不安定になったとしても優しくしてね。何か嫌なことがあったとしても、優しく諭してね」

「もちろん」と僕は言った。「覚えているし、面倒も見るとよ」

――雪輪の滝。

気がつくとも既に、僕たちは目的地に到着していた。

『言いたいでしょ？』

「綺麗な場所は保存しようと努めるのに、そうしようとしないう場所があるのはどうしてなの？」と彼女はレンタカーに乗るなり訊いてきた。「だって、元々は日本中何処に行ったって綺麗だったわけでしょ？ 重要文化財だからきちんとするとか、観光地だからお金をかけるとか、基本的に間違えてると思わない？」

おそらく、その議論については終わりが見えそうもないので、僕はどのように返答するか迷っていた。`観光地にお金をかけるのは雇用を回すためだよ、とか、`文化財は日本が世界に認められるための自己満足だよ、とか、そんなことを言っても、じゃあ〇〇は？ という流れになるのは目に見えている。多分ここは、ひとりひとりの綺麗にしようという心がけが大事なんだよ、と言うべきなのだろう。当たり障りのない模範解答だ。終わりのない迷路にわざわざ自分から飛び込む必要なんてない。

「そうだねえ、これはもうひとりひとりの綺麗にしようという心がけが――」
「――大事ってこと？」と彼女は少し被り気味に僕に言った。「当たり障りのない模範解答ね。ひとりひとり心がけたとしても現状維持じゃない？ 今まで汚れた分は一体どうすれば良いのよ。誰がその`つけ、を払うのよ」

まず、この話を終わらせるにはどうしたら良いのよ、と僕は思った。
「もちろん、ひとりひとりの心を変えた後に、元に戻そうという運動が必要なんだよ。だからね――」
「ふうん……。ねえ、そんなことよりお昼ごはん何食べる？」

「え、うん……。蕎麦……かな」
「どうやら、お腹が空いてイライラしていたらしい。」

フェリー乗り場に着いたのは、出発の一時間以上前だった。レンタカーを返却し、特急電車に乗り換え、最寄り駅に着いてからフェリー乗り場に行くまで少し距離があるため、余裕をもって行くことにしたのだ。

到着すると、まず僕はチケット窓口に向かった。窓口の横には「チケットを購入する方はこちらの用紙に記入して下さい」と掲示されていた。直接購入出来ないシステムのようなのだ。

面倒だな、と思ったが、僕はきちんと二人分の名前を書いた。
購入用紙を持って再びチケット窓口に向かうと、窓口には三十代前半か二十代後半くらいの女性がいた。あるいは三十代後半か四十代前半くらいかもしれない（女性の歳だけはいつも想像がつかない）。その女性は、文字通り静止し真っ直ぐ何処か一点を見つめていた。何処を見ているのだろうか。念の為僕は女性の目線の先を追ってみた。しかし、特に興味を引くような物は見当たらなかった。でももしかしたらチケット窓口の目の前にあるキオスクみたいな小さな店の週刊誌のタイトルを読んでいるのかもしれない。視力が4.0くらいないとその週刊誌のタイトルの文字は見えないと思うのだけど、その女性の視力が4.0はさすがにないと誰が決めることが出来るだろう。

「こんにちは」と僕は窓口の女性に申込用紙を手渡した。
「何名様でしょうか？」と女性は言った。申込用紙を見る気配がない。

「二名です」と僕は答える。
「お子様はいらっしゃいますか？」

「いや、大人二名です」
何故申込用紙を見ない。
「客室は二等、一等、特等とございますが」
「二等で」

それも用紙に書いてある。
「かしこまりました」と女性は言った。「では、あ、こちらにお電話番号をご記入ください」

女性はやっと申込用紙を見ながら、ペンと用紙をこちらに渡してきた。
「ないです」と僕は言った。いい加減ちょっと腹が立っていたのだ。

「はい？」と女性は訊き返す。
「電話を持っていない」と僕はもう一度伝えた。

「はあ、でもお電話番号を書いて頂かないと」
「なるほど」と僕は言った。

「ですので、お電話番号を書いて頂けますか？」
「でも、この申込用紙の必須項目には米印が付いてるようですけど、番号のところには付いていないですよ？」

「はあ……」と彼女は少し困ったような声で言った。顔は特に困った様子はなかった。「かしこまりました。では、結構です。行き先はどちらになりますか？」

これも申込用紙に書いてある内容だった。わざとなのだろうか。
「別府港です」と僕は答えた。これ以上は大人気ないので辛抱強く我慢する。
「では、お二人様で6,200円になります」と女性は言った。最後まで抑揚というものがなかった。

「チケットも無事買えまし」と僕は彼女の分のチケットを手渡した。「あとは、何か食堂的なところがあると良いんだけど」

「チケット買うのに何を手間取ってたの？」と彼女は言った。

「いや、ちょっとね」
「どうせまた面倒なこと言ってたんでしょ？ 駄目よ、良い大人なんだから困らせることしちゃ」

「はいはい、じゃあごはん食べよう。お腹空いてるからいらいらするんだよ、君」
「そうね、っていらいらしてるのは、あ・な・た・よ」と彼女は言った。「まったく、あ、二階に食堂があるみたいよ」

彼女はチケット売り場の横にある看板を指差した。
「蕎麦あるかな？」

「あるでしょ。蕎麦くらい」
「でも、こういう所の蕎麦って、べちゃべちゃしてあんまり美味しくないよね」

「じゃあ違うのにすれば？」
「でも、蕎麦食べたくない？ 蕎麦って、たまにどうしようもなく食べたくなるよね」

「そんなに言うなら食べたらいじゃない」
「でもさ、べちゃべちゃの蕎麦にお金払いたくないよね」

「わたしはね、親子丼とか食べたいかも」
彼女は僕の言うことは必要なこと以外無視することにしたようだった（お決まりのパターンになりつつある）。
僕たちは看板の横にあるお品書きを見ながらああでもないこうでもないと言っていたが、ふと、そこに一枚の張り紙があることに気がついた。

『本日、事情により14時迄』

「事情……」と僕は呟いた。「いやいや、事情により、ってどんな事情なの？ 僕らのお腹の事情より大事な事情なの？ 突然産気づいたときくらい大事な用件なの？ 14時で閉めるくらいなら最初から開けなきゃ良いのに。ううむ。…

…よし、ちょっとお店まで行って聞いてみるよ」
「14時って確かに早いわね」と彼女は言った。「でも、開いてないなら仕方ないじゃない。別に聞きに行かなくていいから、お土産屋さんでも覗きに行こ？ わたしはまだ我慢できるから、ご飯は九州で食べたいんじゃない？」

「でもさー」
「いつまでもみっともないこと言わないの。ほら、行こ？」
僕よりお腹が空いていたはずなのにおかしいな。トイレに行っている間にコンビニでおにぎりでも買って食べたのかも

れない。ひとりで（証拠はもちろん隠滅しているだろう）。
それにしても、食材が切れたのか、午後から大事な約束があるのか、一般的なランチ時間も終わらないうちにお店を閉める意味が良く分からなかった。お盆でも正月でも祝日でもクリスマスでもない。土日ですらない。店員が元々ひとりしかいないのだろうか。その辺の個人店ならまだ分かる。しかし、ここは観光港備え付けの食堂である（市税で経営しているはず）。まだ今日のフェリーも何本が残っているのだ。

「事情、をきちんと書くべきだ、と僕は思った。それがどんな理由であろうと。

「また、ぶつぶつー」
「言っていないよ。さ、行こう！」

「あるかな？ 七味系」
「みかん系が絶対あるはずよ」
最近、僕は柑橘系の調味料にはまっている。これがまたうまい。まあ、はまっているといっても現在ゆず七味しか持っていない。しかし、そのゆず七味ひとつで、味噌汁等の汁物を始め、焼き物、煮込み、それらどんな料理にも合わせる

ことができるし、より旨味を引き出すことができるのである。かなり重宝できる調味料だ。そして、次なる逸材に出会えるかどうか、この旅の〴〵目的、でもある。多分。

お土産売り場には、予想した通り様々な品物があり、この分だと予想した以上の物が手に入りそうに思えた。
「みかんジュース、……これは普通だな。特製ベリーソース？ とんかつ、に……かな？」
「ねえねえ、これ、タルトって書いてあるけど」と彼女は携帯電話とタルトを見比べながら言った。「タルトっていうのは普通、パイ生地あるいはビスケット状の生地で作った器の上にクリームや果物等を盛り付けた焼き菓子のことをいうんじゃないの？」

多分これはWikiでも見ているな、と僕は思った。愛媛に初めて来ると、大抵そこにまず行き着く。
「やっぱりそこに行き着くよね」と僕は言った。「愛媛でタルトっていうと、西洋の焼き菓子じゃなくて、このカステラっぽいやつのことを指すんだよ」

あれじゃがね、あれ、である。
「ふうん」

彼女はあまり納得していないようだった。納得しようがしまいが、なんじゃったかいねえ、はなんじゃったかいねえ、なのだ。数字の上に数がついているのは変えようがない。

「ま、それよりこれなんかどう？」と僕は言って、みかん七味を手にとった。

「あ、見て！ あっちに石鹸があるわよ！ みかん石鹸だって！」
……僕は、みかん七味に、ごめんね、と言って、元の棚に戻した。

「わたしね、前にも言ったけど石鹸に目がないの」と彼女は言った。
「そうなんだね」と僕は言った。もちろん、初耳である。「じゃあせっかくだから何かひとつ買って行こっか？」

「うん！」と彼女はふわとした笑みを浮かべ、石鹸コーナーへと向かった。うん、かわいい。これだからずるい。笑顔ひとつで、だもんな。

「結構色々あるね」
手洗い専用の石鹸、洗顔専用の石鹸、身体専用のボディ石鹸、どの部位もカバーするマルチな石鹸、敏感肌用の高級石鹸。石鹸コーナーには色々な石鹸が所狭しと並べてある。ここからたったひとつを選び出すなんて、十六匹ほど黒猫を目の前に並べられて、その中から自分が飼ってる一匹の黒猫をピンポイントで探し出さなければいけないくらい困難なことのように思えた。騙し絵だってもうちょっとわかりやすい。

そんなことを考えていると、「いらっしゃいませ！」と売り場の若い女性店員が声を掛けてきた。「どうですか？ 気になる物があったらお試しくださいよ？」

「うーん」
彼女が悩むのも無理はない。さすがお土産店、足元をしっかりと見ている。そこには安い石鹸なんてただのひとつもない。

「お客様のよう若い女性の肌には、これがおすすめてですよ」と女性店員はにっこり笑った。そして、三千円くらいの石鹸を手渡してきた。

「ええっと、彼女はそんなに若くー」
「静かにして！」と彼女は小声で僕を制した。「試してみたいです。これはどんな効果があるんですか？」

「はい、これはですね、はちみつみかんボディソープとって、自然原料にこだわりぬいてつくられた、百パーセント天然由来のオーガニックコスメでして、そのため、赤ちゃんや肌の弱い方、そしてお年寄りまで安心してご利用頂ける石鹸なんです！」と女性店員は言った。満面の笑顔だった。

「なるほど」と横で聞いていた僕は言った。「それで、どんな効果があるんですか？」
「はい、あ、ええっと、ですので、肌の弱い方やお年寄りまで安心してご利用頂けるんです」

女性店員はやや困り気味な顔を浮かべ始める。
「なるほど、それでどんな効果がー」

「無視して大丈夫ですからね」と見兼ねて彼女が横やりを入れた。「わたし敏感肌だから丁度いいかも」
女性店員は何とか笑顔を取り戻して続ける。

「八幡浜市で育ったみかんから丁寧に精油を抽出し、みかんの栄養がたっぷりつまった石鹸なんです。優しいみかんの香りなので男性にも人気ですし、全身をさっぱりと洗い上げますよ！」

なるほど。僕はそれが聞きたかったのだ。敏感肌用が欲しいだけなら、〴〵キレイキレイ、くらいで良いのである。
「はちみつみかんボディソープ」と僕は言った。「はちみつみかんボディソープ。語呂も良いですね。はちみつみかんボディソープ。早口言葉でも使えるかも。はちみつみかんボディソープ、はちみつみかんボディソープ、はちみつみかんボディソープ！ じゃあこの石鹸は？！」

「はちみつみかんボディソープ」と女性店員は言った。意外とノリは良かった。

「言いたいでしょ、まったく」と彼女は言って、ごめんなさい。これ、ください、と女性店員に、はちみつみかんボディソープを差し出した。

『しのびよるおとこ』

総トン数二千三百三十四トン、航海速度約二十ノット。その大きな筐体通り、周囲に大きな音を鳴り響かせながら『さくら』は定刻通り八幡浜港を出発した。距離にして八十九キロメートル。別府港までの所要時間は約二時間五十分ほどかかる計算だ。

「Nのために、って知ってる？」と彼女は甲板の手摺りにもたれかかり、風になびくその長い髪を右手でおさえながら言った。「その舞台の一部がこういうフェリー乗り場だったの。こんな風にフェリーに乗って、二人は別れを惜しんで、それでも相手を思いやりながら『頑張れよ！』って励ますの。あれ、すごく憧れるわ」

「フェリーで上京するのかな？」と僕は言った。

「多分」と彼女は言った。「ねえ、ちょっとあれやってみたいから、岸に一回降りて、フェリーに乗ってるわたしに向かって『頑張れよ！』って言ってもらえない？ 再現しましょうよ。再現。ね？」

「え？ 今から？」

「うん」

「いや、だって、もう出港してるよ？ まあまあ岸からも離れてるし」

「ええ！？ つまらない！」

「つまるも何も、本気なのだろうか。」

「じゃあいつにする？」と彼女は言った。わりと真剣な目だ。

「ええっと、いつにするか——」と僕は言った。「じ、次回来たときかな？」

彼女の顔がみるみる輝く。「約束ね！」

「う、うん」

次回来たらやるとしても、ひとりほひとりフェリーに乗ることになるし、もうひとは次のフェリーか、違うルートでフェリーに追いつくしかない。それは一緒に旅行する意味がないのではなからうか。それでも女性のがままは聞くのが男なのかもしれない。

女性になりたいな、と僕は切に思った。

フェリーから見える景色は一面の青い海。何処を見ても海と空ばかり。鳥も、島も、他の船も見えない。かろうじて遠く水平線の向こうに、陸がある……かな？ 程度の影が見えるのみだった。陸だとして、あれは何処の陸だろう。位置関係からして山口県だろうか。いや、朝鮮半島かもしれない。そして、朝鮮半島かもしれないと思うと、何故だか僕は途端に興奮してきた。外国があそこにある。外国があそこに見えるのだ。テレビの中でしか見たことがない外国が手に届く（言い過ぎ）、いや目に見える範囲にあるのだ。手を振ったら韓国の方々の目にとまるかもしれない。ちょっと振ってみようかな、どうしようかな。そんなことを考えれば考えるほど、とりあえず手を振った方が良いように思えてくる。迷っても仕方がないので、僕は思い切って手を振る。

「何してるの？」と訝しげな顔で彼女が訊いてきた。

「え？ いや、ええっと」

「いぶかしげ、な顔なんて久しぶりにされたな、と思った。」

「何しているの？ と訊いてるの。手なんか振っちゃって」

「うん、ええっと、僕が何故手を振ってるか」と僕は言った。「君は、僕が何故手を振ってるかを聞きたいんだね？」

それで間違いない？ 今から僕に、僕がなぜ手を振っているかを訊きたいという質問ということで良いかな？」

「……やっぱり大丈夫」と彼女は言った。何か不穏な空気を感じたのかもしれない。僕は気分が高揚すると、通常時の約三倍程度面倒なことになる。彼女はまさかそのことを知っているのだろうか。それとも——。

「そんなに知りたいなら僕としても話さざるを得ないけど、そんなに知りたいなら、ね」

「うん……」

彼女は諦めたのか黙って僕を見つめた。賢明である。例え断られてもそのやり取りに終わりはない。簡単に終わらせはしない。しかし、彼女のその僕を見つめる目は、まるで駅のホームでの待ち時間、目の前に立っている人の肩あたりに白い糸くずが付いているのを見つけたときと同じような目だった。取れることなら取ってあげたいけど関係ない人だから勝手に取るわけにもいかない。そして、声をかけるほどでもない。ただただ無感動に、それ、を見続けるしかないときのような目。そんな目で僕を見つめていた。

僕はもちろんそれに臆するわけにはいかない。ここで引いていてはこの先どんなところで譲ることになるかわからない。譲るだけの人生なんてもう終わりにしなければならぬ。

「韓国の人に向かって手を振ってるんだよ」と僕は言った。

「あ……」と彼女は言った。「もしかして」

「うん」

「もしかして、よね？」

「うん、そのもしかして、だよ」

「あれは朝鮮半島じゃないわよ？」

「え？」

「だから」と彼女は言った。「朝鮮半島じゃないわよ、あれは。あなたね、四国からの位置関係上朝鮮半島が見えるわけじゃないじゃない。ばかね」

「そっか、でもさ」と僕は言った。「でも、もしかしたら何かの加減で朝鮮半島が一時的に見えているかもしれないじゃない？ それで向こうにいる韓国人が、僕が手を振ってるのを見て振り返っているかもしれないじゃないか。誰が見えないって決めたの？ 見えない、と思ったらもう何も話が進まなくなるよ」

我ながら面倒である。

「大丈夫よ」と彼女は優しく僕に声を掛けた。「心配しなくていいわ。あれは本州だし、韓国人はいるかもしれないけど、それは旅行者や元々住んでいる方であって、あなたなんて見えていないし、手を振り返してもいないのよ？ もちろん、何かの加減で見えることもないわ。誰が決めた、って言ったわよね？ おそらく何百年単位の昔からよ。いや、もしかしたら何千年という単位かもしれない」

だからいい加減に恥ずかしいからやめて、と彼女は言いたそうだった。多分言いたいのだろうと思う。

優しく諭してきたな、と僕は感動した。この僕の面倒臭さを、適度に無視もしくは適度に受け応えできる器量は相当のものである。幼少の頃から続くこの面倒臭さに対し、早々にサジを投げないのは家族以外で初めてかもしれない（家族ももしかしたらサジを投げているかもしれない）。昔はよく先生たちを困らせたものである。

「右利きのひとはあちら、左利きのひとはこちらに集まってくださいー」と先生は言う。

「先生！」と僕は手を挙げる。

「どうしたの？」

「両利きのひとはどうすれば良いですか？」

「……………」

この調子なのである。先生たちの気苦労は計り知れない。

「まあ、朝鮮半島じゃないことは、薄々感づいていたよ」と僕は言った。当たり前だ。

「まあ、あなたが冗談を言っていることくらいは薄々感づいていたけどね」と彼女も言った。「あれが冗談じゃなかったら、きちんと義務教育を終えたかどうか、あなたのお母さんに確認しようかと思ってたわ」

「冗談でしょ？」

「冗談よ」

彼女はそう言ってにこっと笑みを浮かべたが、その目は特に笑っていなかった。

船内に入ると、僕たち二人以外に他の乗客は数えるくらいしかいなかった。本来であれば乗客同士で共有する二等船室も、一区画貸切りのような状態だった。あの小さい長方形の枕も使い放題である。モラルを気にしないなら、並べてベッドにしても差し支えないくらいの量を独り占めできる。高さが十五センチはあるので、その辺の適当なマットレスよりも寝やすいかもしれない。

さて、寝ようかな、と僕は思った。まだ到着まで二時間はある。どうせ起きていても韓国人には会えないだろうし、景色にも飽きたところだしで、特に他にやることも思いつかない。船の揺れで若干酔ってきた気もする。彼女の方も同じ気持ちのようだった。

僕はトランクから小さなタオルを二枚取り出し、一枚ずつ枕の上に敷いた（さすがに枕を敷き詰めるのはやめておいた）。そして、二人申し合わせたように絨毯の上に寝転んだ。寝転ぶと自然とまぶたが重くなった。

目を閉じたまましばらくとうとうしていると、大きな暗闇がゆっくりと息をひそめながら近づいてくるのがわかった。目を閉じていてもわかる。どんなに息をひそめようと、その気配だけはわかるのだ。そして、わかった瞬間には、すでに僕たちは眠りの世界の扉を覗き込んでいた――。

「やあ」とその男は言った。

うす暗い場所をひとりで歩いていると（ひとり？）、小さな笑みを浮かべた男が僕に声をかけてきた。その笑みは小さ過ぎて、おそらく僕以外にはわからないような種類の笑みだった（何故だか僕にはわかる）。

辺りは薄暗いはずだったのに、何故だかその男の周りだけははっきりと見えた。特に光っているというわけではない。不思議な光景だ。薄暗いのに、はっきりと見える。正直わけがわからなかった。わけがわからなかったが、しばらく見ていると、そんなものなのかね、という気持ちも出てきた。実際に目の前に起こっている出来事なのだから、あれこれ言っても仕方がない。

「君か」と僕は言った。「随分会ってないから、もう来ないのかと思ったよ」

「意識の外か、内か、の問題だよ。僕はいつも君を見てたよ。もちろん昨日もね。そして君も僕を見てたはずだよ」

「そうなの？」

そうなのだろうか。そうするとそれはもうストーキングのレベルだな、と思った。

確かに最近では眠れない、ということがあまりない。気がつけば深く眠り、気がつけば朝になっている。

眠れない頃は本当に眠れなかった。一週間で十時間も眠れなかったこともある。そんな生活を続けていると、いつも覚醒と眠りにいるような錯覚（じゃないのかもしれないけど）に陥り、いつもぼんやりとした頭で世界を眺めているような状態だった気がする。そして、そんなときこの男に出会ったのだ。睡魔。名前は特に知らない。

「どちらにしても、僕を意識できない方が良いのかもしれないね」と男は言った。

「そうかもしれない」と僕は言った。「近くにずうっといた、ということは、毎日得意のブランケットを被せてくれていたのかい？」

男はこほん、とひとつ咳払いする。「仕事だからね」

「そっか、君も何だか変わったみたいだね。前は頼んでも眠らせてくれなかったのに」

「そちらこそ」と男は言った。「前は、いつも眠れない、眠れないから早いとこ眠らせてくれ、と騒いでいたからね。どうしたんだい？何かあったのかい？」

僕は少しだけ言おうか言うまいか考えたあと、「実は結婚したんだ」とその男に伝えた。

「Congrats！　そうか、おめでとう。じゃあ、幸せなうちは僕を意識することもなさそうだね」

男はほんの少しだけ嬉しそう顔をし、ほんの少しだけ寂しそう顔をした。

「ありがとう、そうだいいね」と僕は答えた。

こんな殊勝な感じにしてはいるが、この男はいつも時間を選ばず音もなく忍び寄ってくるため、まあまあ相手にするのが面倒なのである。僕としてはあまり会いたくないのが本音だった。仕事さえしてくれれば問題ないのだけど。

「寂しくなるよ」と男は言った。

「寂しくなるかな？」と僕は微笑んだ。

「多分ね」

そこで会話が一旦途切れた。

男は僕にもっと何かを言いたそうだった。それについて随分迷っているようにも見えた。しかし、僕はそれに気付いてはいたが、敢えてこちらからは触れないことにした。話したければ自分から話さだろうと思ったのだ。話したきゃ話せばいい。黙っていたいのならそれでもいい。僕の方はこれ以上話すことをひとつも思い浮かべることが出来なかった。

そして男はとうとう何も話さなかった。タイミングを失ったのか、結局大した内容ではなかったことなのかはわからない。

「じゃあ、そろそろ行くよ」と僕は言った。

「うん。奥さんを大事にね。あ、噂をすれば呼んでるみたいだよ」と男は言った。

確かに、何処か遠くの方で僕を呼ぶ声が響いている。

「そうみたいだ。もう行かなくちゃね」と僕は声のする方へ振り向き、そしてまた男の方へ向き直った。「今度はいつ会えー」

「……え、……ね……え、……ねえってば！」

目を開けると、彼女が僕の顔を覗き込んでいた。どうやら眠っていたみたいだ。彼女は怒っているような困っているような顔をしている。

「やっと起きたわね」と彼女は言った。「何回ゆすっても起きないんだから。もう行ってはいけない場所へ逝っちゃったのかと思ったわよ」

「ああ、ごめんごめん、随分長い夢を見てみたいでさ」と僕は目をこすりながら大きな欠伸をした。

「どんな夢？」

「えっと、なんだったっけ」

「何だったっけ。」

「あなたらしいわ。というか、そんなことよりも着きそうなの。皆荷物の整理を始めてるし、いなくなっちゃった人もいるし」

確かに少ない客がもっと少なくなっている。

「どこに行っちゃったのかしら？ まだ海の上なのに」と彼女は不思議そうに首を傾げた。

「ふむ、車じゃないかな？」と僕は答えた。

「あ、そっか！」

「とりあえず僕たちも片付けよう」

「わたしトイレ行ってくるから、あとよろしくね！」と彼女は言って、船室の外のトイレへと走って行った。

あとはよろしく、と言っていたのは良いが、あらかた荷物は整理されていた。よくできた娘である（娘という年齢ではないけど）。

「お待たせ。じゃあ、行こ！」と彼女はすっと僕の腕に手を入れてもたれかかった。

「まもなく別府港に到着します」と僕はアナウンスを真似て荷物を手に取った。

『昔々、遙か彼方の遠い記憶』

このままでは、目の前にしゃがみ込んでこちらを覗き込んでいる女性に、大事に大事に食べていたソフトクリームを少しも残さず食べられてしまう。一体どうしたら良いのだろうー。

それが僕の覚えている一番古い記憶。

近くには高くそびえた大きな城。隣りには水が張られた大きな堀。足元にはきちんと整えられた砂の道。その時間は太陽が登りきらない午前、若しくは真上を通り過ぎた午後。

そこが何処なのかまではわからない。暑かったのか寒かったのか、どちらだったのかも覚えていない。

どうして目の前にいるこの女性はこんなことをするのだろう。こんなに愛おしくこんなに慈しみを持ってすぐになくなってしまわないよう大事に、それはとても大事に食べていたソフトクリーム。それを何故この女性は何の躊躇いもなく僕の手から取り、美味しそうに続きを頬張っているのだろう。

それを見て、ただ僕は悲しかった。気が付けば声を上げて涙をこぼしていた。そうすることでしか感情を表現出来なかったのだ。

「大丈夫よ、大丈夫」とその女性は言った。「こぼれそうだから、端をただなめてるだけよ。ほら、これで大丈夫」言っている意味はわからなかったが、また食べることができるということはわかった。しかし、感情のコントロールの方法がわからず、すぐに悲しみというのは去っていくことはなかった。涙はあとからあとから溢れてくる。ソフトクリームも食べたいが、涙はまったく止まらない。止まる気配すらない。止めようにも止め方がわからない。止まらないことに苛ついて、また感情が揺さぶられる。一体どうしたら良いのだろう。いつになったらまたあの幸せな気持ちが戻ってくるのだろう。早く食べないと溶けてしまうのにー。

「なるほど」と彼女は言った。「だからあなたは、おじさんになった今でもソフトクリームにこだわっているのね」

「ええっと、こだわっているというわけでもないんだけど……」と僕は言った（おじさん？）。

ソフトクリームが本当に好きねえ、いつから食べてるの？ と質問された為、そういえば一番古い記憶がーという流れだったのだが。

「そのときあなたはいくつだったの？」と彼女は言った。

「二歳くらいかな？ 多分」と僕は思い出しながら言った。「とにかく、その断片的な記憶が僕の一番初めに食べたソフトクリームの記憶なんだよね」

「ふうん」

彼女は少しばかり首を右に傾けた。何か違うことを考えているときの顔だ。

「こだわっているわけじゃないんだよ？」と僕はもう一度小さく抗議した。

「そっか、わかったわ」

「何が？」

「あなたはね」と彼女は斜め下から僕の顔を覗き込んだ。「あなたはその出来事がトラウマになっているのよ。だから、街中や旅先でソフトクリームというソフトクリームを見かける度に、どのような場合であってもそれを食べずにはられないの。うん、そうね、その記憶が心の奥底に未だにトラウマとして残っているからこそ、食べられるときに食べちゃうの。誰かに渡すくらいなら自分で食べちゃいたい、と思うの。それを少しだって失いたくないのよ。もう二度と」

「お、大げさだね、ずいぶん」と僕は言った。

トラウマ……。でもわからない。僕は彼女の言う通りこだわっているのだろうか。

「何度も言うわ」と彼女は僕の顔をさらに覗き込み（怖い）、両手を握りしめながら言った。「あなたわね、ソフトクリームが好きなんじゃないの。ソフトクリームはただの象徴に過ぎないの。たまたま、それがソフトクリームだっただけ。ソフトクリームに限らず、手に届く範囲の物は何ひとつ他人に手を加えられたくないのよ。わたしのことだってそう、あなた前にわたしがいつかなくなるんじゃないか、とか、いつか他の男性の元へ行ってしまふんじゃないか、とか、そんなどうしようもなくくだらないことを言ってたわよね？ しつこいくらい。何でそんなことを言い出すのか、何でそんなことを思うのかずうっと不思議だったのよ」

僕はとりあえず返事をせずに、彼女の言葉を待った。

「だって、わたしはちゃんとあなたのことが好きだし、そんな簡単に別れることなんてしないんだから。良い？ これは一回しか言わないからちゃんと聞いてね。あなたがわたしに何か嫌なことでもしない限り残念ながらこの先別れることはありえないわ。そう、何も考えずにあなたはどっしりと構えてればいいのよ。わかった？ 安心なさい。もう誰もあなたのソフトクリームは食べないし、わたしも何処かへなんて行かない。誰もあなたの物に手を出さないわ。もうこれで無理にソフトクリームを食べる必要なんてないからね」

「も、もう食べちゃダメなの？」と僕は訊いた。

「もう必要ないでしょ？」

彼女は、何言ってるのよ、話聞いてた？ という顔をした。

「（結構好きなんだけどな）う、うん。じゃあ食べる頻度は減らすよ」

「これで解決ね。良かった。あーすっきり。はい、じゃあ、はい」と彼女は左の手のひらを広げて、僕の方に差し出した。

「え？」と僕は言った。

「三千元になります！」と彼女は笑顔で言った。

有料の人生相談だった。

別府港に到着すると、港で待ち構えていた港の職員が乗降用の移動式階段をがらがらと転がしそれを甲板にびたっとくっつけ、手際良く、かちゃんと錠のようなものを下ろした。そして、今度は甲板で待機していた職員がその作業を見届けたあと、くくりつけられていた黄色と黒のロープをほどき階段にさっと結びつけた。その二人の作業は、まるでスペインのクラブチームの選手たちのような完璧とも言える連携プレイだった。

「ご乗船お疲れ様でした。足元に気をつけてお降りください」と職員は言った。

ありがとうございます、と僕が言うと、職員はにこっと営業用の笑顔を見せ、またのご乗船をお待ちしております、と言った。営業用とはいえ、とても感じの良い笑顔だった。

フェリーから降り、別府港ターミナルに出ると、フェリー乗降客目当てのタクシーが列を成していた。タクシーの運転手たちは、それぞれ乗降客をひとりひとり街の方へ運んで行った。

僕たちはしばらく無言でその光景を見ていた。

客が乗り場に立つ。がちゃ、と後ろのドアが開く。「〇〇まで」と客が言う。「かしこまりました」と運転手が言う。そしてばたん、とドアを閉める。

しばらく見ていると、明らかに客の数よりタクシーの数の方が多いことに気が付いた。しかし、運転手たちはそのことについては特に気にしていないように見える。乗降客目当てといっても、乗りたければ乗ればいい、という緩い空気感がそこには漂っていたのだ。でも、良かったらでいいから乗って行って欲しいなあ、という視線を何気なく振り撒いているようにも感じる。とても絶妙だなと思った。

このままここには客と感違いさせてしまうため、特にタクシーに乗るつもりもない僕たちは僕の両親が迎えに来るまで視線を避けるようにターミナルの端へと移動した。僕たちが移動すると、運転手たちも視線を移動させた。

僕たちが運転手を見ているのにも飽きた頃、運転手たちも僕たちが乗らないことをやっとなんと理解したようで、僕たちはほぼ同時に視線を逸らせた。別にタクシーに乗っても構わないのだけれど、残念ながら僕の両親が僕たちを迎えに来ることはすでに決まっていることなのだ。だから今回は申し訳ないけど涙を飲んでほしい、と僕は思った。でも、次回来たときは乗るからね、とは思わなかった。次回のことは次回に決める。

海から吹き抜ける風は生温い湿気を含み、僕らの横を通り抜け港町へと向かう。夏の夜とはいえ、特に暑いというほどでもない。彼女はペットボトルの水を飲み、僕は電子タバコのスイッチを入れる。夜空に向かって吹きかけたタバコの煙は、潮の香りと共に音も無く消えていった。

「大丈夫よ、大丈夫」と母親の声が聞こえた気がした。

『行ってらっしゃいませ』

「ここ、来たことあるね」と僕は言った。「名前はまったく覚えてないけど、場所的には忘れてない。っつてか、忘れようがない」

別府駅から徒歩一分という好立地な場所を忘れるわけがない。創業九十年以上の歴史を持つホテル雄飛との二店舗経営『とよ常』。`別府を囲む海や山の幸を安価に提供し、くつろぎの時間と腕によりをかけた自慢の料理を、心ゆくまで堪能下さい、`というのが三代目女将の謳い文句である。噂によると湯布院の方にも系列店があるらしい。まあ、湯布院はともかく、この店のとり天が非常にうまい。シンプルではあるけれど、カラッと揚がった`羽、`がついたサクサクの衣に、塩もしくは天つゆをつけて食す。「サクサクの衣くらいその辺の天井屋でも食えるよ」と思う方もいらっしゃるかもしれない。しかし、この店の天麩羅はちょっと形容しがたい。何て言ったら良いのだろう。申し訳ないとは思っているけど、僕レベルの感想では、実際に食べて貰わないことには結局何も伝えることができないかもしれない。それでもありきたりになってしまうことを承知で表すとすると、`何処までも、サクサクな歯ごたえ、それでいてふわっとした鶏肉、口の中に広がる衣とジューシーな肉汁、それらがそれを食べる者を虜にさせる他では到底得難い美味しさ、`という感想だろうか。

それがこの店の「とり天」である。前述した通り、鶏肉に衣をつけて揚げたこの「とり天」が大分県の名物であり郷土料理となっている。その起源は、大分市を起源とする説と、別府市を起源とする説がある。

大正十五年、別府市に開業した『レストラン東洋軒』。昭和二十八年に開業した『三ツ葉グリル』。どちらの店舗にも鶏の天麩羅はあり、三ツ葉グリルの創業者はレストラン東洋軒の出身であることから、これらの店舗が起源とされている。

しかし、それに「待った」をかけたのが大分市観光協会だ。大分市観光協会の主張によると、昭和三十七年、『キッチン丸山』と『いこい』の両店主が共同で考案した独自のものが、元祖の「とり天」ということらしい。年代的には明らかに別府市側が起源のようではあるが、大分市の「とり天」は別府市のそれとはまったく異なるものであるため、自分たちが元祖だ、と主張しているのである。

正直消費者側としては、どちらが元祖でも起源でも何でも良いのだけど、当人たちはそうではないのだろう。歩み寄る素振りもない。双方が納得することは永遠にないように思える。まあしかし、大体`元祖、と謳ってる店ほど大したことない（もちろんそれは他店が元祖から改良しているからだろうけど）。何度も言うが、こちらとしてはうまければ文句はないのだ。

「これは、美味しいわね」と彼女は言った。「今まで食べたどの`からあげくん、よりも美味しいわ。これが名物なのね。こんな美味しい物があるなんて、何でもっと早く教えてくれなかったの？`とてもずるいわ」

「ううんっ」と僕は軽く咳払いした。「君と付き合ってから数ヶ月、そして結婚して三日目に九州に来て、最初に食べてもらった食事がこれだから比較的にはまあまあ早い段階で教えたことになると思うんだけどね。これより早く教えることはちょっと難しいと思わない？」

「冗談よ。つまらない人ねえ」

「ええ?!」

見分けがつかない。真面目な顔して冗談を言うんだもんな。

「あなたはつまらないけど、この天麩羅は本当に美味しいわ。あなたはつまらないけどね。ふふふふ」

「何で二回言うんだよ。まったく」

彼女はまた、ふふふ、と笑いながら、もちろん、大事なことからよ、と言い二個目のとり天を口に入れた。

「本当に仲が良いわねえ。いっぱい食べてね」

そんなやり取りを見ながら、母親はとてこにこしている。

「どんだん食べや」と僕の父親も言う。

「ありがとうございます!`美味しいです、これ、本当に」とそれに対して彼女はとびきりの笑顔を見せる。

それにしてもからあげくんとは比べるなんて、と僕は思った。待てよ、そういえば、からあげくんは`とり天味、`があった気がしないでもない。そういうことだろうか。

「ねえ、かなり苦しくなってきたわ。スカートがぱんぱん。普段こんなに食べないから、この旅行だけでわたし太っちゃいそう」と彼女は言った。

「旅行あるあるだね」と僕は言った。「帰ったらウォーキングと、ランニングだね。あ、そうだ、この後ホテルに着いたらちょっと散歩しよう。夜の港街を歩くのも良いと思わない？」

食事も終わり、ホテルに到着したのは午後21時頃。港から程近い場所にそのホテルは建っていた。耳を澄ませば波の音も聞こえてくるかもしれない（聞こえてこないかもしれない）。

「じゃあ、明日朝迎え来るけん、今夜はゆっくり寝なはい」と父親は言って、母親と共に車で自宅へと帰って行った。

「さて」と僕は言った。「部屋で一息ついたら軽く近くを散歩しようか」

「そうね」と彼女は言った。

ホテルの部屋に入ると、小さな椅子が二脚、丸いサイドテーブル、ドレッサー、24型テレビ、クローゼット、ベッド、スリッパ、その他細々としたアメニティが用意されていた。とりあえず適当に選んだ安いホテルの割に、必要最低限以上に設備は整っているようだった。

「まあ、普通の部屋だね」と僕は部屋の中をぐるりと見回した。

「十分よ」と彼女は言った。「旅行者というのはね。基本的にこういうところに観光に来ているのであって、ホテルが目当てというわけではないのよ?`だって、昼間は外を見回って、ここに来るのは夜でしょ?`だからシャワーとトイレと布団があればそれだけで良いのよ。あ、あとドライヤーもね」

確かにそうかもしれない。ドライヤーは別になくてもいいけれど、風呂とトイレはマストである。例え壁紙や装飾等にこだわっていても、こういうホテルでは誰も見ないだろう。僕は見るけど。

「でも、見てこれ」と僕はドレッサーの前の床を指差した。「何らかの染みがあるよ。何ていうか、痴情のもつれにより相手を死に至らしめました、って跡だよこれ」

「あら、赤ワインでもこぼしたのかしら？」

「カルベネ・ソーヴィニヨン」と僕は言った。

「カ・ベ・ル・ネ」

また間違えてる、と彼女は言って、トランクの荷物を片し始めた。

「行ってらっしゃいませ」とホテルのフロントの男性は言った。とても感じが良く、とても穏やかな笑顔だった。こうい

った種類の笑顔には好感が持てる。つられて僕も笑顔になる。僕はフロントの男性にルーム・キーを預け、「行ってきます」と笑顔を返した。

「まーだー？」

エントランスで待っている彼女の方に目を向けると、手招きしながら僕を呼んでいた。そして、不思議な顔でこちらを見ていた。

「どうしたの？」

彼女の方に駆け寄ると、じいっと僕とフロントの方を交互に見始めた。どうしたのだろう。

「誰と話してたの？」と彼女は言った。

「え？ 誰って、フロントの人だよ？」

「フロント？ フロントには誰もいないじゃない。一人で誰もいない空間を見つめて何か喋ってたわよあなた。誰も出てこないから、すみませーんって呼んでるのかと思ったわ」

「いやだな、何言ってるの？ ほら、いるじゃん。……あれ、今はいないな。確かに鍵を預けたんだけど……」

「何なんだ。確かにさっきはいたのだが……。奥に引っ込んだのだろうか。」

「じゃあ、どうして預けた鍵を手持ってるの？」

「え？」

僕は反射的に左手を見た。……鍵だ。「確かに預けたんだけど……」

「ふうん」と彼女は言った。「怖いからそういう冗談やめてね。ほら、もう行こ！」

「うん、うん」

よくわからない。怖いというより、本当によくわからなかった。鍵を渡した手触り、男性の穏やかな笑顔、行ってらっしゃい、と言った声、すべてが鮮明に記憶として残っている。僕はもう一度確かめたい気持ちが強かったが、そうしない方が良くないのではないか、という胸騒ぎがしたため、彼女の言葉に従うことにした。

「やっぱり気持ちが良いね」と彼女は言った。「ほんのり潮の香りがするし、ちょっと風がべたつくけど、涼しいから歩きやすいわ」

「そうだね」と僕は言った。まだ先ほどのフロントの男性が少し気にかかる。ううむ。

「どうしたの？」

「あ、いや、消費税増税のことが妙に気になってね、突然。いつまで延期になると思う？」

もうフロントの男性のことは忘れよう。答えを探し求めたとしても、終わりのない迷路にはまるだけである。相手を不用意に怖がらせてもいけない。そんなことを突き詰めても、何処にも行けないことだってあるのだ。

「何言ってるの？ 変なひと」と彼女は言って、まるで洗っていない洗濯物を見つめるような目で僕を見た。「あ、ねえねえ、あそこにカフェみたいなのがあるわよ？ こんな時間なのにまだ空いてるみたい」

彼女が指差す道路の反対側の方を見てみると、周囲のクローズされた店とは対照的に、煌々と辺りを照らしている店が見えた。確かにまだ営業しているようだ。店内にはちらほら客も入っている。

「本当だ。もう23時になるのにね。行ってみる？」

「うん、ちょっと冷えたから温かいコーヒーが飲みたいわ、わたし」

「いいね。コーヒーと甘いものが食べたいわ、わたし」と僕は彼女の口調を真似した。

「ふふふ。あなたって、ほんと気持ち悪いわ」と彼女は笑い、早く行こ！ と僕の手を引っ張りながら道路を渡り始めた。その瞬間、僕は誰かに声をかけられた気がして、後ろを振り向きたい衝動に駆られて立ち止まった。

「どうしたの？」

「うん、いや、大丈夫」

「消費税はしばらく上がらないわよ？」

「うん」

「ほら、渡るよ？」

彼女は僕の手を強く握りながら、もう一度、ほら、行くよ、と言った。すると不思議といくぶん気持ちが楽になった。もう振り向きたい衝動も何処かに消えていた。

「行ってらっしゃいませ」

それは確かにフロントの男性の声だった。

『ロレット・チャペルの螺旋階段』

7月7日 雨

がたんがたん、という貨物列車の懐かしい音で目が覚める。いつも通り、ここは何処だ？ あ、ホテルか、という流れをひと通り終える。隣にはまだ彼女が幸せそうに寝息を立てている。僕もまぶたがまだ開ききらない。何らかの言葉を聞かなくては、と身体を起こしテレビのスイッチを入れる。ニュースキャスターは、昨夜だか今朝だか起きた出来事を熱心に話している。それについてコメントーターが訳知り顔で答える。しかし、眠過ぎて脳の処理が追いつかない。結果、何を言っているのかわからない。いや、起きてたって怪しい。そういう種類のニュースは確かに存在する。目的も何も分からず、誰得かすらもわからない。想像すらも出来ない。かろうじてわかったのはおそらく日本語を話しているということ。もしかしたら「せっかくの七夕なのに星が見えないですねえ」くらいは言っていたのかもしれない。そうだ、今日は七月七日、七夕。織姫と彦星がどうのこうのという日。それが今日という日に割り当てられた大まかな意味。

この日は昔から色々な出来事がある。アメリカ独立戦争、ナポレオン戦争、日本軍守備隊のサイパンでの玉砕、ソロモン諸島の独立、カルピスの販売開始（カルピス？）、第八回衆議院議員通常選挙、鹿島のJ優勝、千葉ロッテの十七連敗、ロンドン同時爆破テロ、そして、気象衛星ひまわり八号の正式運用開始。とてもウィットに富んでいる、というのは不謹慎な気もするが、まあ表では色々あり、その裏では誰かが付き合い、誰かが別れ、誰かが亡くなり、誰かが生まれ、ニュースにもならない出来事が数多く起こっているだろう。もしかしたらテレビのニュースを見ているだけでは分からないことの方が多いのかもしれない。たぶん、きっと、何かそういう気がしてきた。いや、絶対そうだ。テレビだけですべてを伝えられるわけがない。テレビなんてその時代に合った出来事しか基本的に流さないのだ。くだる、くだらないは関係なく、人々の興味を引くことだけしか考えていない。考えているくせに興味すら引かれぬ出来事もある。そんなことを考えてたら眠気が覚めてきた。頭もどンドン冴えてくる。今の僕ならロレット・チャペルの螺旋階段の謎だって解けるかもしれない。

「`かもしれない、じゃないわよ」といつの間にか起きていた彼女は言った。

「ああ、起こしちゃったかな」

「起こしちゃったかな、じゃないわよ。隣りでずうっとぶつぶつ言ってるんだもん。ずうっと。ずうっとよ？ そりゃ寝てられやしないでしょうよ。サイクロン式の掃除機の方がまだ寝られるわ。それに、あなたに螺旋階段の謎が解けるとは思えないけどね」

「ごめんごめん、いつから起きてたの？」と僕は訊ねた。

「`何らかの言葉を、のところからよ、まったく。うるさいんだから朝から。昼からでも嫌だけど。あ、夜もやっぱり嫌かも」と彼女はぶつぶつ言いながら、サニタリーへと向かって行った。

まあまあ最初の方から起きてたな、と僕は思った。だったら声をかけてくれたら良いのに。それに自分だってぶつぶつ言ってるし、話しながら何処か行っちゃうし。

「女の子は色々あるの！」と彼女はサニタリーのドアから半分だけ顔を出した。

……恐ろしい地獄耳である。

「はい、これ」

僕はエレベーターホールところで、ルーム・キーを彼女に差し出した。

「何で？」と彼女は言った。「あ、ははあ、怖い？ もしかしてあなたは怖がってるの？」

「いやー」と僕は言った。これからロビーまで降りてフロントにルーム・キーを預けるだけのこと、その何が怖いというのだろう。「そうじゃなくてさ、昨日確かに預けたのに預けられてなかったから、今日こそはちゃんと預けなきゃな」と思ってたね」

正当な理由だ。まあ、ちょっとだけ怖い。

「ふうん」

「もちろん二人で預けるんだよ？ だって、ひとりで行ったら証拠にならないじゃない。もしかしたら何か僕の重大な思い違いが有るのかもしれないし」

「重大な、ねえ」

フロントに昨日の男性はいなかった。まあ、昨日が夜勤であればいいだろう。

「この人だった？」と彼女は小声で訊いてきた。

「違うかな」と僕は言った。

「そっか、仕方ないわね。怖がりのあなたの代わりに鍵を渡してあげるわ」

彼女はフロントの男性にルーム・キーを差し出し「行ってきます」と声を掛けた。

「行ってらっしゃいませ」と男性は言った。もちろん、昨日の声とは違う声だった。笑顔の種類も別だった。

「よく眠れたかねえ？」とホテルの外に迎えに来ていた母親は言った。

「おはようございます。はい、ぐっすりでした。おかげさまで」と彼女は言った。猫だか何かを被っている。

「今日は何処に連れてってくれるんだっけ？」

僕は車に乗り込み運転席で眠そうにしている父親に訊いた。

「湯布院に行こうと思ってる」と父親は言った。

「いいねえ」と僕は言った。「ねえ、湯布院だってさ、あれ、眠いの？」

「うーん。あれだけ寝たのに何故かしら。すごくまぶたが重い」と彼女は言った。

「もしかしたらあれかな？」

「あれって？」

「さっき飲んだ酔い止めの薬。あの液体のやつ」

「酔い止めて眠くなるの？ 酔わなくなるんじゃないって？」

「うん」と僕は言った。「おそらく、眠ってしまえば自動的に酔わないから、強制的に眠らせようとしてるんだよ。ほら、その証拠に僕も眠くなってきた。ね？」

「ね？ じゃないわよ。何でそこでどや顔なのよ。本当にあなたって楽天的ねえ、羨ましいわ。わたしってほら、デリケートでしょ？ だからあなたのご両親がいる前ですぴーすぴー寝ることなんてできないの」

「デリケートな年頃の女の子」と僕は復唱し付け加えた。

「うるさい」

「ほらほら、ケンカしないの。慣れない場所で疲れとるんよ。まだ着くまで時間かかるから寝てなさい」と母親も言った。一連の流れを聞いていたようだ。

「そうそう、僕もまあまあ眠いからとりあえず寝よう？ 今日も一日長いし」

「でも――」

僕は、大丈夫だよ、と言って先に目を閉じた。目を閉じてしばらくすると、一匹のサルがスタスタとこちらに近付いてきた。滑床溪谷のサルだ。右手には何かを持っている。サルはその何かをこちらに向けて、にやり、と笑った。リモコンだ、と僕は思った。思った瞬間、そのサルはテレビの電源を落とすようにリモコンのボタンをポチッと押し、僕の身体の機能を強制的に停止させた。

機能が停止したのを確認したサルは、僕を覗き込みながら、今回は彼女も連れてくから大丈夫、と言った。サルはもう一度、にやり、と笑い、また暗闇の奥へスタスタと歩いて行った。

そして、暗闇が僕を包み込んだ――。

『しのびよるおとこ ふたたび』

「手荒な真似をして悪かったね」と暗闇の奥から声がした。
どれくらい時間が経ったのだろう。いつの間にか手足も動くようになっていく。少し右のこめかみあたりが疼いている気がするが、騒ぐほどの頭痛もない。長時間偏った姿勢をしたときのような手足の痺れがあるが、こちらは大したことではない。ぼんやりしている感覚もいつも通りだった。声のする方に目をやると、ぼんやりと人影のようなものが見える。段々と暗闇に目が慣れてくる。
「やっと起きたわね」と彼女の声がした。
「……ああ、もう夜だっけ。いつの間にホテルに戻ってきたの？」と僕は彼女に訊ねた。訊ねたつもりだったが、まるで水の中で話しているようであまり声にならなかった。あと、夜なわけがない。僕はまだ、何処にも、行っていない。
目が慣れてくると僕は辺りをひと通り見まわし、ここは一体何処なんだろうと考えた。全体像をつかむには暗すぎたが、まったく何も見えないわけでもない。何かが部屋を灯している。僕は黒と茶で構成されたキリム柄のラグマットの上にいる。彼女は小振りのレザーソファに座りこちらを見ている。その隣には背の高いフロアランプ。これじゃない。電気はついていない。この明かりは何だろう。百七十ルーメン程度の光、そして淡く揺れる光。ロウソクだ。ロウソクの小さな火が彼女の一部分を照らし出していた。それを見て僕はラ・トゥールの「マグダラのマリア」を思い出した。大きな本棚、四角いテーブル、木製の椅子。その奥のカウンターはキッチンかもしれない。カウンターの上では先ほどのサルもこちらを見つめていた。リモコンのようなものも見える。本来窓がありそうな壁には、格子状の窓枠がはめ込まれ、外からの光を完全に遮断している。そもそも窓なんてないのかもしれない。その反対側の壁にはカーキ色っぽい厚いカーテンが降ろされている。後ろを振り向くとシングルサイズのベッドがある。ここはどうやら少し広めのワンルームか何かのようだった。誰の部屋だろう？
僕はもう一度喉の具合を確かめるように、ああ、ああ、ただいまマイクの――と言った。
「大丈夫。聞こえているよ」と人影が言った。
「わたしもさっきそれやった」と彼女は言った。「夜、じゃないことだけは確かみたい。彼と少しお話ししたけど、あなたのこと良く知ってるみたいよ。お知り合い？」
「彼？」
「うん、そう」
彼女は人影の方を指差した。その人影は見覚えがある。初めて見るような、それでいて見慣れてしまったような、よく分からない顔つきの男、睡魔だ。
「やあ、また会ったね」と彼は言った。
「ああ……思いのほか早く再会したね」と僕は目をしばしばさせながら起き上がった。「それで？」
「それで？」
「いや、だから僕らの前に現れたのには理由があるんでしょ？」
僕は少しだけ苛立っていた。いちいち演技がかった。まだ一日は始まったばかりなのに、何か損をした気持ちになる。今日は湯布院に行くというのに、結局行くこともなく間違っただけで夜中に目覚めた気持ちだった。僕はまだ、何処にも、行っていない。
「もちろん」と彼は言った。「鳥が空を飛ぶように」
「鳥が空を飛ぶように？」と僕は復唱する。
「そう、鳥が空を飛ぶように、物事にはすべて理由があるんだ」
彼の言葉は相変わらず抽象的でよく分からない。
「その理由が知りたいわ」と彼女は言った。初めて会ったにもかかわらず、何の疑問もなく彼と接している。「鳥さんは何故空を飛んでるの？」
「そう来たか、と僕は思った。
「そう来ましたか」と彼も言った。「……まず、鳥のことは置いておいてもらえるかな？」
「どうして？」
「どうしてって――」
彼が苦戦しているのを見るのはミシェルと対峙していたとき以来だった。彼はちらりと僕に助けを求めるような目をしたが、あえて僕は何も言わなかった。混乱してしまえば良い。
「貴女は、鳥が何故空を飛ぶかを知りたい、と言う」と彼は落ち着きを取り戻しながら言った。
「そう」と彼女は言った。
「でも、それはただの比喻であり、今回の論点ではない」
僕は面白そうなので、しばらく経過を見ることにした。
「じゃあ話を変えましょう」と彼女は言って、スカートの裾を少し伸ばした。どうやらソファに座ったときに付いた皺が少し気になるらしい。「見たところあなたはわたしの旦那様のお知り合いのようだけど、お付き合いは長いのかしら？」
自分の夫のことを「旦那様」と呼ぶのは正直誤用だと思ったが、ここで訂正するとややこしいことになりそうなので、僕はやはり黙って続きを待った。しかし彼は特に気にしていないようだった。それどころじゃないのかもしれない。
「そうだね、もう二年の付き合いになるかな？」と彼は上を向いて思い出すように言った。「それより、もっと気になることがあるんじゃないのかい？」
「気になること？」
「そう、気になること」
「気になること――」と彼女は言った。まだスカートの皺を伸ばしている。もうアイロンをかける他ない。「うーん、あなたが睡魔さん、っていうのは知ってるし、ここに呼ばれた理由はあのときのことだろうし……何だろう。ごめんなさい。正直言って思いつかないわ」
「え？」
僕と彼は顔を見合わせた。
「ちょ、ちょっと待って、彼のこと知ってるの？」と僕は言った。
「これは驚いたね」と彼も言った。
「知ってるというか、わかる、というか。やっぱり知らない、というか」と彼女は言った。何なんだ。皺はもう伸ばしていない。「とにかく、わたしは鳥が何故空を飛ぶかを知りたいの」
「ははは、これは僕の出る幕でもないみたいだね」と彼は言った。「良い人を見つけたと思うよ。しっかりしてるし、おまけに美人だ。君には少々勿体ないかもね」
最後の言葉は余計だが、自分の妻を褒められて悪い気はしない。
「そうだね、確かに僕よりしっかりしているかもね」
「あのね」と彼女は言った。「まだ鳥について教えてもらってないわ」
まだ言ってる。

「ほら、君の出番だよ」と彼は言った。「もう時間がない。手短かに教えてあげるといいよ」
「手短かにねえ」
「子どもはどうやって生まれるの？、くらい面倒な質問だな、と僕は思った。こども電話相談室に電話するレベルの内容である。しかしこの場所は圏外のような感じだった。それにあの番組は八年前に既に終了している。――仕方ない。」
「鳥はね」
「うん」
「鳥は……、羽があるから飛ぶんだよ」
「……………」
「……………」
「えっと、羽があるから――」
「……………あなたらしい解答ね」と彼女は言った。
「模範解答きたね」と彼は言った。
「うるさいよ」と僕は言った。

目が覚めると、見たことのある街並みが目に飛び込んできた。湯布院だ。どうやらそろそろ着きそうだった。湯布院の街並みはどこでもなく軽井沢に似ている。札幌と名古屋くらい似ている。コリン・ファレルとブラット・ピットくらい似ている。レオナルド・ディカプリオと……もう、やめよう。
隣りにいる彼女はもう既に起きていて、窓の外を眺めながらため息をついていた。
「どうしたの？」と僕は彼女に声をかけた。
「雨」と彼女は言った。
「ああ、さっきより降ってるみたいだね」
「せっかくの旅行なのにごめんなさいね」と母親は言った。「晴れてたら良かったんやけど……」
「いえいえ、大丈夫です！ わたし、雨好きなんです。雨の中を歩くのも、こうして車内から雨を見つめるのも。ただ、晴れだったらより景色が綺麗だったんだらうなあ、と思っただけです」
「良い娘だねえ」と父親は言った。「こんな嫁さんをもらえて羨ましいねえ」
「あら、お母さんと結婚されたお父さんも、わたしは羨ましいですよ？ だって、こんなに仲が良い夫婦なんてそんなにいないし。お母さんは優しいし、息子さんは立派に育ってるし」
「本当に良い娘だ。お母さんと取り替えっこしたいくらい」とまた父親は言った。本当に取り替えて欲しそうだった。何言ってるんだ。
「ねえ、そういえばさ」と僕は言った。「あのときのこと、って何？ あの睡魔に言ってたやつ」
「睡魔？」と彼女は不思議そうな顔をした。「睡魔って、さっきまで寝てたのに、まだ眠いの？」
「え？ 覚えてないの？」
「覚えてないって、何か夢でも見たの？ お母さん、息子さん、まだ寝ぼけてるみたいですよ」
「ふふふ、困った息子でごめんね」と母親は言った。
「そういうところも素敵なんです」と彼女は言った。
「夢か。まあ、そうか」と僕は言った。
「はい、着いたよ」
父親は、お土産屋さんが立ち並ぶ、湯の坪街道内にある少し狭い駐車場に車を停めた。
「ここはね、観光客に知られてない駐車場で、実は店舗の従業員専用の駐車場なんよ」
「え？ 大丈夫なの？」と僕は心配になり訊ねた。
「お父さんが大丈夫、と言ったら大丈夫」と父親は言った。
よくわからない理論だったが、大丈夫なら大丈夫なんだろう。怒られたらそのときはそのとき、父親に全部被ってもらおう。

豊後富士、と称される由布岳の麓にある湯布院（由布院）。場所は大分県中央部に位置し、言わずと知れた温泉街である。女性客を中心に一度は行ってみたい観光地として、常に上位にランキングされてはいるが、先ほどから周りを見渡しても、外国人観光客しかいないように思える。ここもか、と僕は思った。どうやら日本中の観光地は、利益のほとんどを外国人からの収入であげているらしい。
「あなたは外国人に見られると思うから大丈夫よ」と彼女は言って、ふふふ、と笑った。どういう意味だ。「さ、行きましょう。黒ごま饅頭と、芋天を食べないと。あ、それと、自分の家族のお土産も買わなきゃ。楽しみ過ぎて死んじゃう。ほら、早く！」
「はいはい」と僕は言い、少し浅めにキャップを被り直し、車から降りて小さな透明な傘を差した。「じゃあ、とりあえず一時間を目安に行ってくるよ」
「近くまで迎えに行くから連絡してね」と母親は言った。
「うん、ありがとう。連絡するよ」

僕は、ばたん、と車のドアを閉めた。

『湯の坪街道にて』

「うちのマミーには何を買って帰ればいいかなあ？」と彼女が訊いてきた。マミー？ 誰だ？
「そうだね、マミーにはぬいぐるみとかかな？」と僕は答えた。
「何だよ。うちの母がそんなもんもらって喜ぶわけないでしょ」
「ああ、お母さんのことか。マミーとは姪っ子か、ミイラのどちらかかな、と僕は想像していたが、どちらも違うようだった。惜しい。いや、惜しくない。
「でもさ」と僕は言った。「もしかしたら君のお母さんは無類のぬいぐるみ好きかもしれないよ？ 全国のご当地ゆるキャラを集めているかもしれない。君が知らないだけで、自宅のお母さんの部屋には所狭しとぬいぐるみたちが並べられてたらどうする？ それでも君はぬいぐるみを買って帰らないの？」
「確かに、そう言われるとそういう気も………するわけないでしょ。バカ。あ、あの店はどう？ ガラス細工のお店みたいよ。行ってみよ？」
ガラスの森、と題されたお店の中には、ありとあらゆるガラス細工が並べられてあった。ガラスの器、コップ、それら各食器を始め、動物をかたどったミニチュアのガラス細工、風鈴、電灯カバーまであった。ガラスの森とは良く言ったものである。
「選び放題だね」と僕は言った。「でも、逆に選択肢が多過ぎて、選べない放題、とも言える。ということは、結局何も買わずに帰るパターンか。それで、あのときやっぱり何か買ってあげれば良かったね、でもあれだけの中から選ぶとなると、まずは何個かめぼしい物をしぼって、その中からさらにかわいい、って思われる物を精査し、そして自らが買ったら嬉しと感じる物を――」
「かわいい動物がいっぱいね」と彼女は言った。完全に僕の言葉は流すことに決めたようだった。もしかしたら聞いてすらいらないのかもしれない。「これなんかどう？ かわいいカップ……ええっと、子豚かな？ 子豚がお風呂に入ってるガラスなんてかわいいわ。温泉土産にぴったりかも。ね？」
確かに豚がお風呂に入ってるつういでのガラス細工だった（子豚か成豚かの区別はつかないけど）。頭にはご丁寧に手ぬぐいまで乗せてある。浸かっている浴槽は檜をイメージした木の器だ。しかし、何故温泉に入るのが豚でなければならなかったのだろうか。鹿児島ならギリギリわかる。黒い豚でも風呂に入らせとけば良いのだ。何なら福岡でもいい。しかしここは大分県である。そして、それこそ動物というのは膨大な数の種類が世の中にはいる。牛や馬、羊や鹿、それにカンガル―だっているのだ。ここにもシイリオモテヤマネコやらチーターやらピューマやらが入浴している置物だったなら、猫好きな僕ももう少し食いついたかもしれない。ガラス職人の今後の創作活動に期待である。
「子豚のお風呂か」と僕は言った。「でもさ、これって見方によっては――」
「――ラーメンの出汁、って言いたいんでしょ。わかったわよ。もう」
なかなかわかってきているな、と思った。さすが僕の選んだ人だ。
「九州といえばラーメン、というくらいだからね。もしかしたら各地の温泉の湯は、毎晩毎晩ラーメン屋に届けられているかもしれないよ？ せっかく取れた出汁をそのまま捨てるというのは、おまけ付きのお菓子の、お菓子だけを捨てる行為くらい勿体無い話だからね。温泉旅館は毎日入れ替えるお湯を有効に利用できる。ラーメン店は安価で出汁が手に入る。これこそWinWinの関係だと思わない？ あ、もちろん無料ではないよ。だって、ラーメン店に運ぶ、という稼働がかかっているからね」
彼女は僕を見て、面倒な人、という顔をし、その顔のまま長い溜息をついた。
「じゃあ――」と彼女は言った。「そのラーメンをあなたは食べられるの？」
「もちろん」と僕は言って、人差し指を立てる。「食べないよ。ほら、僕は元々ラーメンが好きじゃないからね」
「……言葉もないわ」
彼女は頭のおかしい人はほっとしてお土産えーらば、と言ってその豚が温泉に浸かったガラス細工を持ってレジへと向かった。
僕も何か買おうかな、と店内をぐるりと見回したが、特に興味を惹かれる物はなかった。強いて選ぶならこの龍の置物だろうか。しかし、その置物を自宅の棚に置いたところで、猫に棚から落とされて一瞬でダメになるに決まっている。そういう理由で買わなかった雑貨は数知れない。等身大の猫の置物なら買っていてもいいかな、と思ったが、そういう理由は置いてないようだった。子豚やら何やらがあるのに、何故猫のガラス細工はないのだろうか十二支の中に猫がない理由と同じ理由だろうか。需要と供給のバランスが悪い。
「ねえねえ、次は何処に行く？ あなたは何か欲しい物ないの？」
会計を終えた彼女が満足気な顔で腕を組んできた。
「そうだねえ」と僕は言った。「僕は買い物より散歩したいんだけど、この雨だからね。欲しいものと言っても、ここでしか買えない物というのは大体つまらない物だからあまり惹かれないんだよね。欲しい物はだいたい全国何処にでも売ってるし」
「確かに散歩出来たらっていうのはわかるわ。でも、雨が降っているのは仕方ないから、とりあえず次のお店に行きましょ？」
店の外に出ると、先ほどよりも雨足が強くなっているように感じた。僕たちは傘をひとつしか持っていなかった為、お互いが少しずつ濡れるほかなかった。それでも僕は彼女の濡れる範囲を狭められるよう自分の右肩を犠牲にし、少しでも彼女の方に傘を近づけて次の店まで歩くことにした。それも相手にそれが分からないようにである。とても紳士的。ジェントルマンと呼ばれても良いレベルだ。

「寒くない？」と僕は訊く。
「寒いわ」と彼女は言う。
「じゃあもっとこっちに近付くといいよ」
「うん、優しいのね」
この流れだ。これしかない。

「寒くない？」と僕は訊いてみた。
「え？ うん、ちっとも」と彼女は言った。「あ、ワインの店がある！ あそこ行こ？」
彼女は僕を置いて、小走りでワインの店に駆け込んで行った――。

彼女はワインに目がない。「ワインがあれば他には何もいらないの」とまでは言ってなかったが（言ったかも）、ワインを差し出すことで機嫌がある程度良くなることは間違いない。
ひとくちにワインと言っても、実に様々な製法があり、見た目は同じように見えても味はまったく違うようである。それでも主に、白、赤、ロゼに分類され、酸味、甘味、渋味、香りが大事な要素であり、これらのバランスが取れている

ものが一般的に良いワインとされている。彼女はワインは辛口であれば何でも好きなようだが、中でも特に赤ワイン、そしてミディアムボディ若しくはフルボディの輪郭のはっきりしたカベルネ・ソーヴィニヨンの品種を好んで良く飲んでいる（本人の体型はライトボディだけど、それは置いといて）。そもそも「ボディ」とはワインを口に含んだときに感じる「感触」のことである。ワイン初心者であれば、渋みの少ないライトボディが最も適したワインではあるが、癖の無い直線過ぎる髪の毛にパーマネントウェーブをあてるように、彼女は軽快なワインよりも、よりタンニン等が重めであるボディを重視して選んでいるようだった。

正直言って僕にはどのワインも同じに感じる。白ワインに着色してあれば、例え匂いを嗅いだとしても、「これは赤ワインなんだな」と判断してしまうくらい疎い。ロゼと赤の色の違いも曖昧だ。品種の違い等を当てろ、と言われたらもうお手上げである。極め付けは、スパークリングワインはすべてシャンパンだと思っているのだ。

「そんなわけないでしょ？」と彼女は言った。「スパークリングワインには、シャンパンだけじゃなく、カバ、ゼクト、ランブルスコやスプマンテという種類があるのよ」

「国によって違うの？」と僕は言った。

「もちろん、でね、さらに甘口から辛口、白、赤、ロゼの様々なタイプの発砲ワインがあるのよ？」

「ふうん」

そうなのか、白ワインに炭酸ガスを入れてるだけだと思っていた。そうだったら自宅で手軽に作れるのに。

「メルローとカベルネはどう違うの？」

「カ・ベ・ル・ネ」

「……メルローとカベルネはどう違うの？」

「素人はこれだから」と彼女は言った。「メルローとカベルネ・ソーヴィニヨンとの相違点はね、メルローは比較的芳醇でまろやかな味わいのよ」

「ふむ、それなら僕でも飲めるかな？」

「アルコール度数はあまり変わらないわよ」

「じゃあ無理だな」と僕は言った。残念、葡萄は好きなんだけどな、と思った。「一番高いワインは何ていうワインなの？」

「挙げればきりが無いわー」

そうね、と言って、彼女はひとしきりうーんと考える仕草をした。

「やっぱり高級といえばボルドーの五大シャトーじゃないかしら？ あと、あなた程度でも聞いたことあるものなら、ドンペリニオンも高級ワインよ。でも誰でも知っている忘れちゃいけない高級ワインといえばー」とそこまで言って、

彼女はこぼんと咳払いした。芝居がかっている。「忘れてはいけないのがロマネ・コンティね」

「ああ、それなら聞いたことあるよ。一体幾らなんだろう？」と僕は言った。

「百万円くらいじゃないかしら？」

ワイン一本に百万……。価値観の違いと言ってしまえばそれまでだが、例えば百二十円のコーラを毎日飲んだとしても、百万円使い切るまでに二十二年以上かかる。二十二年あれば、ちょっとふらっと月まで散歩に行って帰って来れる年数だ。量にしてもワインが好きならほんの三十分から一時間もかからずに飲み干すだろう。

「じゃあさ、ペトリュスは幾らくらいするの？ あとモンラッシェやリシュブールは？ ラ・ターシュも高いって聞くけど」

「あ、試飲できるみたいよ？ 飲んでみてもいい？」

彼女は面倒臭くなったのか、にこっと微笑みながら、さらっと話題を変えた。

「これ、飲みやすいわ。ひとつ買ってはいかがかしら？」

「一本全部飲める？」

「そうね、小さめなものを買うわ」

結局、カベルネ・ソーヴィニヨンのハーフ・ボトルを二本買い、彼女はほくほく顔でレジから戻ってきた。

「そろそろ戻るっか？」と僕は言った。

「うん！ 早く飲みたいしね」

「え？ いま飲むの？」

「冗談よ。これは東京に帰ってからの楽しみ」と彼女は言って舌を小さくぺろっと出した。

「最後にひとつ質問していい？」と僕は言った。

「ん？ いいわよ」

「君の一番好きなワインは？」

「オーパス・ワン！」と彼女は流暢に答えた。

超高級なワインではないと思うが、僕はあえて値段は聞かないようにしよう、と思った。

需要と供給のバランスなのだ。

『わたしが知るわけないでしょ』

その氷の結晶は周囲の水蒸気を身に纏いながら、蒸発してはまた集め、蒸発してはまた集めを繰り返し、ゆっくりとしたペースを保ちながら少しずつ少しずつ地上約三万フィート上空の厚い雲の中で確実に成長を続ける。そして、ある程度集め終わると、次は自らの重さで緩やかに落下を始める。自然に逆らうこともなく、ただ重さと風に身を預けながら。過冷却状態の雲の中から地表に落ちるまでの間、その体は重力に乗りながら速度を増し、分裂しながらもさらに氷晶を纏い、急激な温度差によりやがて地表へと降り注ぐ雨となる。降り立った雨は、とても長く果てしない時間をかけ地下層へ染み込み、席の足りなくなった労働者が早期退職制度にて会社から外の世界へと押し出されるように、湧き水となり地表へ顔を出す。そしてまた――。

僕は金鱗湖の淵に立ち、音も無く水面に溶け込んでいく雨を眺めながら、太古から続く世界の営みについて思いを巡らせていた。

「安定してすかしてるわね」と彼女は言った。「そんな毎日だと疲れない？ 浸り過ぎて戻ってこれなくなるパターンになるわよ」

「いや、別にそんなにすかし――」

「あ、見て！ 鯉がいるわよ！ あれ、鯉よね？」

安定して無視されるパターンになってるわよ、と僕は思った。

「本当だ。鯉、だね」

「綺麗ね、鯉って」と彼女はしゃがみ込んで池を覗き込んだ。「ねえねえ、身の締まった赤や白の魚の切り身についてどう思う？ 醤油を数滴垂らしてわさびも添えているやつ」

「え？ 鯉を食べたいってこと？」

「鯉を？」

「うん、鯉。食べたいの？」

「何で鯉を食べるって話になってるの？」

「だって、魚の切り身を食べたいんでしょ？」

「お魚は食べたいわよ、もちろん」と彼女は言った。「でも、だからって何で鯉に結びつけたのかが分からないわ。ちょっとそれは安易な発想ね。それって、孔雀って綺麗ね、とても美味しそう！、くらいのレベルの発言よ。モラルってものがないわ」

これはこれは面倒な返しをしてきたな。多分わざとだな。その証拠にちょっと彼女はにやにやしている。ふむ、ちょっと面倒臭い（お互い様）。質問に質問で返す流れになると、大体彼女は僕をからかう体制にシフトしているのだ。

「僕にもわからないな」

ここで引くわけにはいかない。イニシアチブを取る必要がある。このアジェンダにフォーカスしないことには、今後の二人のプランニングについて、二人の問題のソリューションはおろか、周りのコンセンサスさえも得ることができない。夫婦生活におけるバジェットだって、アロケーションできないのである。要するにリテラシーの問題なのだ。

「何わけのわからないことをぶつぶつ言ってるのよ」と彼女は呆れ顔で言った。

「外資系っぽくない？」と僕は言った。「この、どうせなら英語で全部言っちゃえばいいのに感、日本語で言わないとわかんないよ感、どう思う？ 最近ハマっててさ。昔こんな風に喋る芸風の人がいたよね、っというか、外資系の人たちって冗談で言ってるのかと思ってたけど、まあまあ本気なんだよね、あの話し方。ということは彼らは日本語禁止なの？」

「わたしが知るわけないでしょ」と彼女は言った。少し笑いを我慢しているようにも見える。若干肩が震えている。「でも、昔そういう人と話したことあるけど、確かに謎に英語を多用してるわね、謎に。そうね、多分グローバルになりたいのよ彼らは」

グローバルねえ、と僕は思った。「グローバルといえど、世界的な、とか、地球規模、って意味だと思うんだけど、例えば彼らはアメリカだけしかやってないことにも、これはグローバルだから～、って言う節があるよね？」

彼女は我慢できずに吹き出した。

「ふふ、あなたって、ほんとにバカよね。いつか怒られるわよ。あの人たちは至って真剣なのよ」

「ふむ。グローバルなミッションにアサインされたんだけど、ストラテジーが曖昧でリスクになってさ、とか、ね」

「とか、ね、じゃないわよ。もう」

彼女は口角をこれ以上上げられないくらい広げて笑っている。

「今日の午後はアヴェイラヴルだから、オーガナイズしといて、みたいな」

「あははは、もう、や・め・て！」

ちょっとやり過ぎたかな。でも、話が通じて良かった。僕は誰かにこのことをずっと共有したかったのである。多分（プロバブリー）、女性には伝わらないだろうと思っていた。おそらく（メイビー）、男性であってもなかなか。

「もちろん一部の人がそんな意味不明な会話をしてるんだと思うけど、そんなバカにして、あなた外資系に何か恨みでもあるんじゃないの？」と彼女は言った。もう落ち着きを取り戻している。

「恨み……うーん、特になし、バカにはしてないんだけどね。滑稽だとは思うけど。まあ、自分もその場に身を置けばそんな風になるかもしれないから、もうそろそろこの辺にしておかないとね。何たって彼らのアクションのポテンシャルは、常にバリューのあるターゲットを決めてるからさ。もちろんペンディングしちゃアウトだよ。ASAPだからね」

「スポットディールだと、ベネフィットもないのよ？」と彼女は言った。

「話せるね君」

「もうわかったから、そろそろ行きましょ？ 次は温泉に行かないと！」

「じゃあ、お迎えを呼ぼう ASAP（できるだけ早く）で！」と僕は言って、携帯電話を取り出した。

「そうね」

彼女はもうすっかり飽きているみたいだった。

きっかり十分後に父親たちは迎えに来た。雨に散々打たれているその黒い軽自動車が遠目から近づいて来るのを見ると、何だか不吉なお迎えのような気がしないでもなかった。これからこの車に乗って何処に行くのか、というより、何処に連れ去られるのか、という気持ちになったのだ。もちろんそんな気持ちになったのは一瞬のことだったんだけど。

「どう？ 何か良いの見つけた？」と母親は彼女に訊ねた。

「ワインを買いました！」と彼女は嬉しそうに報告した。

「しかも二本ね」と僕は補足した。

「はは、良かったねえ。よし、じゃあ、温泉にでも寄って帰ろうかね」と父親は言って、緩やかに車をスタートさせた。

『本気なのか、冗談なのか』

「言うつもりはなかったんやけど」と前置きして父親は言った。「昔この辺で殺人事件があったんよ。んで、犯人はまだ捕まっとらん。それはもう悲惨でねえ。顔なんて原型がなかったらしいし、夜のうちの犯行で、誰も犯人を見とらん。旅行者の犯行だろう、って警察の見解やったけど、結局はそれも憶測でしかないみたいだね」

父親はそこまで言って、先ほど買ったペットボトルのお茶をひとくち飲んだ。
四十代、男性、未婚。それがその被害者の特徴らしい。それを特徴と言うのはどうだろう、というレベルの情報しかない。

「かわいそうに。物を盗られた形跡もない。怨みを買うような人柄でもなかったらしい。ちょっとした口論が発展して、行き過ぎた犯行になったんだろうって新聞にも書いてったわ」
「そんなことがあったんですね……怖いわ」と彼女は言った。あんまり怖そうでもないように見える。「えっと、その人って、痩せ型で背が高いひとでしたか？」

「ん？ どうやったっけねえ。あれ、この事件、知ってるの？」
「あ、全然知らないんですけど、どんな人だったのかなあ、って思っただけです」
僕はそう言った彼女の横顔を何気なく見ていると、何となく何か知っていそうな顔をしているな、という印象を受けた。

「そうか、とにかく普段殺人なんか起こらん土地やけんね、その当時は皆びっくりして、一時的に夜に人がおらんくなったんよ。おかげさまで商売も上がったたりよ」
父親はタクシーの運転手をしている。いわゆる職業的運転手だ。それだけに、確かに夜に人がいないと商売も成り立たないだろうな、と思った。

「ほう、そんなことがあったんや」と僕は言った。
「お父さん、そんな話せんでも」と母親は言った。「せつかく楽しく旅行に来とるのに、怖がらせてどうするん？」
「あ、大丈夫ですよ。わたし、意外とそういう話嫌いじゃないんです」と彼女は言って微笑んだ。
「確かに、連続殺人鬼とか好きだよ。顔に似合わず」と僕は言った。

「あら……連続殺人起こしそうな顔はあなただけだね」
「……………うるさい」
「わあ、こわーい、お母さん！」
「本当に仲良しだねえ」と母親は嬉しそうに言った。

おいおい、自分の息子の顔が怖いと言われてるのに、この母親ときたら仲が良いか悪いかが一番大事ならしい。自分の息子より義理の娘か。まあ無理もないかもしれない、二度目の結婚はうまく行って欲しいのだろう。
「ははは、まあ十年近く前の話やけん、もう全然皆忘れとるやろうけどね」と父親は言った。
殺された男性とその家族と殺した犯人は決して忘れないだろうな、と僕は思った。

国道10号線に差し掛かる頃、少しずつ雲の隙間から射す陽の光で辺りは明るくなり始めていた。しかし、全体的にはまだまだ曇った空が広がっており、時折りポツポツと雨も降っている。これはまさしく狐の嫁入りというやつだなと思った。いわゆる天気雨だ。でも、もし本当にこういった天気の日には嫁入りをすることができないのなら、狐たちはとても不憫である。それに、やっとなんか訪れたとしても突然のことで準備なんて間に合わないし、準備出来ていたとしても、同時に天気雨待ちしていた何組もの狐カップルの挙式をしなければならぬ。そうすると参列する狐もあちらこちらからお呼ばれされ、あたふた状態だろう。どの結婚式に出席すれば良いのだろう、〇〇さんのところは去年お兄さんの方の式に出たばかりだから、やっぱり三丁目の〇〇さんちのせがれのところかな、いや、でもあそこは前にうちの娘が式を挙げたときにお祝いしてくれなかったし……。そうやってああだこうだ言うてるうちに雨も上がるかもしれない。一生に一度の大事な日くらい焦らず落ち着いてやりたいものだ（二度目もあるかもしれないけどね！ ……うるさい）。婚礼の儀式。狐だけに。……コン礼。

「またくだらないことを考えてる顔ね」と彼女は言った。
「はは、それにしても人は何故人を殺すのかね」と僕は言った。「明確な目的があるならまだしも、`思いついて、とか`気が付いたら、とか、信じられないな。何か理由があると思うんだけど」

「あなたは色々その背景や理由を知りたがるけど、正直言って、知らないで良いことも沢山あるのよ？ 知らなきゃ良かった、ってこともある。もう色々詮索するのはやめた方が良くわ。じゃないと今に大変なことになるわよ」
「大変なこと？」
「そう、大変なこと」と彼女は言って、ハンドバッグからリップクリームを取り出し唇に塗り始めた。アーモンドのような甘い香りが車内に広がる。

「昨日から思ってたけど、何か――」
「待って」と彼女は言った。「それ以上は有料よ。だから話を変えましょう。ほら、昨日の三千円もまだお支払いしてもらってないし、あなたの信用情報はまだまだ黒いままなのよ？」
信販会社かよ、と僕は思った。

窓の外では、追い越して行く車もすれ違う車も、それぞれ同様に、分け隔てなくアスファルトの上に溜まった雨水を一生懸命かき分けて走っていた。僕たちは小倉街道を海沿いに北へ進み、富士見通りを左に曲がり別府公園の方へ向かう道路に入った。

「温泉って近いん？」と僕は父親に訊ねた。
「まあまあ」と父親は言った。まあまあ……か、`まあまあ、雑な回答である。`
「硫黄系の温泉って肌がつつるつつるになるから好き。楽しみ！ ね？」と彼女はわくわくしている。わくわく、と顔にも書いてあった。「でも、わたしすぐのぼせて顔が赤くなっちゃうから、温泉大好きなのに長時間入ることができないの」

「そっか、ま、でも時間はあるし、出たり入ったりゆっくり入れればいいんじゃない？」と僕は言った。
「そうね、ふふふ」

「あのさ」と僕は首のところまで温泉の湯に浸かりながら言った。「やっぱり何か知ってるんじゃないの？」
「何を？」と彼女は言った。41℃くらいの湯ではあったが、十分も浸かっているのにもう顔が赤くなっている。確かにすぐのぼせてしまう体質のようだ。

「いや、だからさっきの事件の話」
「ああ、それね。でも事件の内容は本当に全然知らないのよ？」
彼女はかなりお湯にあてられたらしく、赤ワインを一本空けたときのような目になっている。それよりもっとひどい

かもしれない。ワイングラス、ウィスキーのときの顔だ。このコンビのときが一番ひどい。そのとき起こったことは片っ端から忘れる始末だし、酔っ払いの常套句の「今日は全然酔っ払ってない」と言い張るのもこのときである。このときの彼女といったらもう……。

「ちょっと気になっただけで、特に他意はないの。それよりー」

「熱いんだね」

「そう。水分、わたしに必要なのは水分なの。ごくごくとやらないと死んでしまうと思う」と彼女は言って、最後の力を振り絞るかのように、微かに笑顔を見せた。

この笑顔は、もちろん、飲み物をすぐさま用意しなさい、という笑顔である。付き合いはそんなに長くはないのだけど、何となく最近わかってきたことのひとつだ。彼女はあらゆるパターンの笑顔を使い分けている。こればかりは勘に頼りながら覚えていくしかない。

僕はそんなこともあろうかと、ミネラルウォーターを用意していたので、脱衣所に置いてあるカバンからペットボトルのミネラルウォーターを取り出し、湯船の横で死にそうになっている彼女に、ペットボトルのキャップを開けて手渡した。

。ごくごくごく。喉元を水が通り抜ける音が小気味良く辺りに響き渡る。

「はあ、ありがとう！ 助かったわ、本当に。生き返るとはこういうことね！ とてもぬるかったけど」と彼女は言った。

「……お役に立てたみたいで良かったよ」と僕は言った。「それだけで足りる？ スポーツ飲料の方が良かったかな？」

「全然大丈夫、ありがとう。そうね、まあ……強いて言うとしたら、もっと冷やしておいてほしかったのと、きんきんに冷えたビールがあると良かったわね」

「そ、そうだよ、気が利かず申し訳ない」と僕は素直に謝った。

「ふふふ、冗談よ。すぐ真面目にとるんだから」と彼女は言った。

多分冗談ではない。

「それで、何の話をしてたんだっけ？」

「ああ、僕の信用情報が焦げ付いてる、って話だよ」

「そうだったわ。出来る限り早く三千円払ってね」と彼女は言って、残りのミネラルウォーターを飲み干した。「それより、あなたってちょっと抜けてるけど、勘は良い方よね？」

勘？ 水を用意しておいたことを言ってるのだろうか。

「自分で言うのもなんだけど、勘は良い方だと思うよ」

「ふむふむ」と彼女は両腕を組んで考える姿勢を取った。裸で考え込む姿勢を取るひとを見るのは初めてだった。「本当に知りたいの？ 知ってもわたしを責めない？」

何だ、何だ？ 責める？

「もちろん、本当に知りたいし、責めることなんてしないよ」

「そう……わかったわ。そうね、じゃあ、先日あたりから右肩が痛いのは何故だかわかる？」

「右肩……？」

何で知ってるんだ。右肩は確かに痛い。それも二日前から特に。

「そう、右肩。多分あなたは大丈夫だと思うからこの際はっきり言うけど」

「うん」

「九州に上陸した時点で、あなたの右肩に憑いてしまってるの」

「え？ ついてる？」

「そう。憑いてるの」

「そ、それは、ラッキー！ 今日がついてる日だ！ のついてるじゃなくて？」

「そう、ラッキー！ みたいになついてるじゃなくて」

「……嘘だよな？」

「信じるか信じないかはー」

「あなた次第」と僕は言った。「いやいや、ごめん。えっと、い、いまも？」

大丈夫、安心して、と彼女は言って、ちゃぽん、と湯船に浸かり、目を閉じた。

空を見上げると、先ほどと変わらない灰色の雲が一面に広がっていた。時折り吹く風に周りの木々は反応し、その合間を縫って、小さな雨粒がぼつぼつと降っている。服を着ていれば気づかない程度の雨。目をこらさないと見えにくい雨。そんな雨が降ったり止んだりを繰り返していた。

「安心して」と彼女は言った。「この場所には入れないみたいなの。もちろん外に出ちゃえばまた元通りなんだけど、今は大丈夫。あなたはひとが良いから気に入られやすいのね。それにしても不思議。生きてる人間には気に入られないのね」

最後の言葉は余計だったが、何か不思議なことが僕の周りで起きているようだった。

「ってことは、昨日のカギの件も？」

「ああ、そうねえ、はっきりとはわからないけど、多分からかわれたのね」

「さっきの殺人事件の話も？ ひ、被害者が憑いてるの!？」

「それはわからないわ。正直はっきり見えてるわけじゃないし。……雰囲気程度なの」と彼女は言った。「悪いものなのかも、害がないのかも、よくわからないの」

「ううむ」と僕は唸った。まだ半信半疑ではあったが、彼女が嘘をつく理由もない。……怖がらせている線も捨てきれないけどー。「とにかく、今はいい。そして、外に出ればまた元通り。害があるかないかは君にもわからない。でも、それ、がいるのが雰囲気わかる」

「そう」

「じゃあ、何もいないのと一緒にだね。何かあれば気合いで何とかするよ」

「根性論は嫌いじゃないわ」と言って、彼女はおかしそうに笑い出した。「あなたのそういうところ本当に良いわね。尊敬するかも」

特に尊敬しているようには見えなかったが、見えない物は別に怖くない。ただ、耳元でいきなり昨日みたいに囁かれるのは困る。くすぐったい。

「そうだ、あなたに害があるのかどうか、あのあなたのお知り合いに聞くといいわよ。何か知ってそうだったから。多分大丈夫だと思うんだけど。気になるなら念のため。でもね、さっきも言ったけど、あまり深入りすると大変なことになるわよ」

「うん、それはわかったけど、ええっと、お知り合いって……？」

「ほら、あのキザであなたみたいにすかしていた男の人よ」

ああ、あいつか。確かに何か言いかけてたな。というか、やっぱり覚えてたのかよ。まあいいや。そうだ、思い出した。呼ばれた理由、そのことか、と僕は思った。鳥が空を飛ぶように、物事にはすべて理由がある、って騒いでたな、確か。

もう一度彼に会う必要がある。会えればということだけど。

「もう出よう」と僕は言った。

「うん、冷たいビールが飲みたいわ」と彼女は言った。「あ、あと」
「あと？」
「今回の料金は――」
彼女は人差し指を宙に向けた。
「昨日の料金と合計して、いつもの口座に振り込んでおいてね」

本気なのか、冗談なのか。
僕は、はいはい、と言って、にこにこしている彼女の顔をしばらく眺めていた。

『はるか』

7月8日 曇り

結局一睡もできなかった。目で見えるものであれば、気合いで何とかすることも可能かもしれないが、自分自身に降りかかるかもしれない災いと、自分自身に取り憑いている（と思われる）何かが気になって仕方がないのである。もしこれが彼女の妄想だったとしても、偶然がただ重なっただけのことであつたとしても、もう話として聞いてしまった以上、何もなかったことにして過ごすことはできない。

僕は一晩中、壁にかかっているよくわからない絵画と、いつ付いてしまったのか想像もできない天井の染みを眺めながら、あらゆることに備え、あらゆることを想定して身構えていた。しかし、どのパターンで来られたとしても、実際そのときになれば、何の対処も出来ない気もする。いざ、というときに自分自身を助けてくれるのは、結局は経験だけなのかもしれない。

弱気になっている。天災が起こったときの方がうまく対処できるのではないだろうか。

「お腹が空いた」と僕はぼそっと呟いた。そういえば昨日晩御飯を食べてから何も食べていない。当たり前だろ、と思うかもしれないが、睡眠時と覚醒時は、そもそも消化のスピードが違う。胃の内容物なんて、とっくの昔にすべてを消化しきっていて、あとは出てくるだけになっているし、そうなると空っぽの胃の中で、無闇やたらに胃酸だけが生産されていく。僕はきりきりと胃から音がしてくるのを感じた。そう、今の僕の食欲であれば、食べ放題の大手チェーン店の支配人ですら「もう来ないでくれ」と言わせるくらい際限なく食べてしまえるのではないかと思う（まあ、そんなところには行かないけど）。

僕はのそつとベッドから起き上がり、ホテルの備え付けの小さい冷蔵庫を開けてみた。そこにはミネラルウォーターが二本と、愛媛で購入したみかんジュースがあつた。それしかなかった。仕方がないので、コップに一杯と半分ほどみかんジュースを飲み、サニタリールームで歯を磨くことにした。そうすれば多少は空腹も誤魔化せるだろう。朝食まではまだ少し時間がある。もう一眠りとまではいかないけど、何も胃に入れたいよりはましだ。むしろ何か食べるよりも丁度良いかもしれない。

それにしても、眠らずに待っているというのに、一向に彼は現れてくれなかった。まるで爪切りみたいだな、と僕は思った。どうでも良いときは何処にでもいて、何処からでも現れるくせに、こちらが求めているときには姿を見せない。勝手な奴だ。

窓の外からは朝の到来を告げる鳥のさえずりが聞こえ、雨こそ降っていないが、昨日にも増して陰鬱な曇り空が街中に広がっているのが目に入った。気分が益々滅入ってくるような空だった。いつそ土砂降りにならなければわかりやすいのだけれど。

今日は何処に行くんだっけ、とふと思った。ああ、そうだ、高千穂に行くんだ。あそこに行くのは何度目だろう。この土地に来る度に幾度となく足を運んだ場所。高さ八十から百メートルにも達する断崖が七キロメートルにもわたり続く峡谷は、その場に立ち、それらを眺めるだけで何故か幻想的な雰囲気にも包まれる。何万年も前の火山活動によって出来た自然の脅威は、何万年経っても尚、人々の心に訴え続けるのである。

もうひとつ忘れてはいけないのが、十七メートルの高さから流れ落ちている『真名井の滝』。神話によると、天村雲命が天孫降臨の際、水のなかったこの地に水種を移し、それが滝となって流れ落ち始めた、と云われている滝である。何と、ボートに乗ることで、ほとんど目の前まで近づくことができる。そしてもちろん日本の滝百選のひとつ。こんな由緒ある滝が百選に選ばれてないわけないだけだね。ふふふ、とても楽しみだ。

「とても気持ち悪いわ」と彼女は言った。「あなた、またひとりで独りごとを言うのが日課なのかしら？」

ひとりで言うのが独り言なんだけど、と僕は抗議しようと思ったが、もちろんやめておいた。

「あ、おはよ。お腹空いた？ そろそろ朝食を食べに行こうか」と僕は言った。

「うん、じゃあ顔を洗ってくるわね」

「あ、そういえばまだ僕の肩――」

「ん？」

「いや、何でもなし。早く洗っといで」

「はあい」

まだ僕の右肩に何かいるの？ と聞こうと思ったが、右肩の微かな痛みが取れない限りは聞いても損するだけだな、と思ったので、これもやめておいた。

朝食を食べ終えると、すでに父親と母親がホテルの前まで迎えに来ていた。ちょっとしたハイヤー気分である。

「おはよう、よく眠れた？」と母親は笑顔を見せた。

「はい！ おかげさまで！」と彼女も笑顔で答える。「それより毎日色々なところに連れて行ってもらってすみません。せっかくのお休みなのに」

「ははは、別に構んよ。そのために仕事を休んだんやから」と父親は言った。

九州の実家に旅行に来て、そこからさらに各地に旅行に行く。これはとても贅沢なことだ。両親に感謝しなければいけない、と思った。

「とても良いご両親ね。あなたも感謝しなくちゃ駄目よ」と彼女が小声で言った。

「もちろん、感謝してるよ（心の中で）」と僕は言った。

「心の中でじゃ駄目なのよ、まったく」

え？ 声に出していないのに相変わらず鋭い。ここまでくるとむしろ怖い。取り憑いてる奴なんかよりも怖いかもしれない。

国道57号線を阿蘇方面に向かい、そこから更に325号線を南下すると高千穂に到着する。車だと、約二時間ほどかかる。大して混んでいるわけではないが、ひたすら山道を走るため、僕と彼女は少し車に酔いそうな勢いだった。

車酔いといえば、幼少の頃はもっとひどかった。毎週のようにスイミング・スクールに通っていたのだが、その場所が遠方で、プールがあるところまでバスで行くしかなかった。バス特有のシートか何かの匂いと排気ガスの匂い、それらと相まって車の揺れで三半規管は刺激され、例外なく毎週胃の内容物を吐いてしまっていた。乗っているとき、降りたとき、場所や時間は違えど、毎週必ず。よくトラウマにならなかつたなあ、と思う。しかし、そのおかげで人並み以上に泳ぐのが得意になったし、身体も鍛えられて結果的には良かったのかもしれない。車酔いだけは克服できなかったのだけだ。

「酔い止め効かないね」と彼女は言った。

「液体じゃないからかな？ でも、液体飲むといつまでも眠いしね」と僕は言った。

「あの眠さは異常ね。永遠と眠いもん。でもあなた、昨日より眠そうな目をしてるわよ」
「そうかな？」
「そりゃそうだと思う。だって、寝てないんだから。でも、何となく目を瞑っても眠ることができない。どうしたというのだろう。寝ようとしても集中できず、何かに`阻害、されているような感覚に陥る。」
「もしかして」と彼女は言った。「昨日眠れなかったの？」
「うむ。実はそうなのである」
「何で偉そうなよ」
「いや、何か寝ようとする集中出来なくてね。あれかな、良くないものに邪魔されて眠れないのかな？ どう思う？」
「集中力が足りないのよ」と彼女は大きなあくびをしながら目を閉じた。「ただそれだけ。考え過ぎるとそういうことになるのよ。何かのせいしても楽にはならないわよ」
「ふむ」

「もう着くよ」と父親は言った。
結局眠ることは出来なかった。眠ることに集中しようとする、集中しようとする行為に集中しようとして眠れないのだ。外を見ると、車はちょうど高千穂峡の入り口でもある急斜面を下りるところだった。坂を下り始めると、すぐにヘアピンのようなカーブに差し掛かる。そしてそれを何度か曲がると、とうとう目的地の駐車場だ。
「何年ぶりだっけ？ 二年ぶりかな？ あ……そうか、ここも——」——影響があったのか、と思った。久しぶりとはいえ、何も変わっていないと思っていたが、やはり先の大地震の影響で、崩れやすいと思われるところを中心に、至るところに進入禁止の立て札や黄色と黒のロープが張られてあった。心なしか観光客も減ってしまっているように感じる。前回来たときは駐車場に行き着くまで、観光客を掻き分けて行かなければならぬくらいだったのだが……。
「ありゃ、ポートも禁止になっとるみたいやねえ」と父親は言った。「お母さんが来たときポートから落ちたからやるか？」
「え？ 落ちたんですか??」とびっくりして彼女は母親の方を向いた。その話は何度か聞いたことがある。今では鉄板にすらなっているような思いつ話だ。
「自分から飛び込んだよ」と母親は言った。わざとだから間抜けじゃない、自分はそんなにバカじゃない、とでも言いたげな顔をしていた。「転覆しそうになったけん、その前に自分からね。危うかったね、あのときは」
「危うかった？ まるで落ちるのを免れたような口振りだ。」
「そうだったんですね」と彼女は言った。「大事に至らなくて良かったです」
「でも、結果、落ちたんよね？」と僕は言った。
「自分からね」と母親は言って、にやっと片方の口角を上げた。
面倒臭さは遺伝するようだ。やはり僕の母親だな、と思った。

「じゃあ、お父さんはちょっと運転疲れたけん、ここでしばらく休んでいくわ。お母さんはどうする？」と父親は、観光客用の駐車場に車を停めながら言った。
「わたしもちょっと仮眠しようかね」と母親は言った。
「そうですね、ごめんなさい。運転ありがとうございます、ほんとに」と彼女は言った。
「ああ、いいのいいの、何回も来たところやからね。二人で楽しんでおいで」
「運転ありがとね」と僕は言った。「じゃあ、二人でこの辺散歩してくる。帰りはまた携帯に連絡するよ」
「はい、気をつけてね」と母親は言った。

高千穂に来ると、僕は必ずやらなければならないことがひとつだけある。それは、ポートに乗ることで、真名井の滝を見ることでも、断崖を眺めることでもない。ましてや、壮大な景色の中、大好きな散歩をすることですらない。やりたいこと、やらなければならないこと。それをやらなければこの土地に来た意味すらもないような大事なこと。どれだけ大事かと言うと、給料日前に間違えて時間外にATMからお金をおろしてしまい、残り少ない残高から手数料を否応なしに取られてしまう、そして、そのことを簡単に諦めてしまえるくらい大事なこと。もし、それをやらないでこの土地から去ろうものなら、一生自分自身から後ろ指をさされてしまう——。それくらい大事なこと。
そこまで大事なことというのは何かと言うと、それは、宮崎県産の日向夏で作られたソフトクリームを食べることである。

ええっと、散々もったいぶって、結局またソフトクリームですか、まいったな、はいはい。それ、山梨県に行ったとて同じこと言いそうですよ、やっぱり山梨県に来たら巨峰のソフトクリームは外せないよね、マストだよ、と言いますよね？ それでもあなたはそれが大事なんですか？ 埼玉だったら紫芋のソフトです、とか、北海道なら夕張メロンです、とか。
もしかしたら君たちは僕をこのように非難するかもしれない。しかし、僕はこのことを誰かに理解してもらおうとは特に思っていない。何か僕に問題があるのであれば、思いっきり非難して頂いても構わない。何なら罵ってくれても良い。ただ、それが唯一と言って良いほどの楽しみなんだ、と僕は言いたいだけなのである。

『牛乳を一切使っていないソフトクリーム』

それが日向夏ソフトの謳い文句。
牛乳を使ってないから何なんだよ、と素人は思うかもしれないが、これだけが楽しみで僕は今日ここに来たのである。

「ソフトクリームは卒業したんじゃないの？」と彼女は首を傾げた。
「え？ あ、りょ、量は減らすと言ったけどね、確かに」と僕は言った。「やめるとは言ってない。それに、このソフトクリームをそんじょそらのソフトクリームと比べられても困る。姿形は一見普通のソフトクリームではあるけれど、実際のところはソフトクリームのカテゴリーにも入れちゃ駄目なソフトクリームなんだよ。言ってみれば、ソフト・オブ・クリームなんだよねこのソフトクリームは」
彼女は、はあ、と深く溜め息をつき、片眉を少しだけ上げた。
「ややこしいわね」
「そういう意見もあるかもしれない。もちろん、受け入れるよ。ただね——」
「面倒臭いわね」と彼女は僕の言葉を遮った。本当に面倒臭そう。面倒臭い、って言葉を発することも面倒臭そうに見えた。「これは本当に冗談抜きで言うけど、面倒臭さのちょっとした権威ね、あなたって」
「まあ……そうだね、おっしゃる通り」
ソフトクリームと、面倒臭い、ってキーワードが確かに多いね、と僕は思った。
「結局何が言いたいかと言うと」と僕は言って、ひと呼吸置いた。「ねえ、驚かないでね、このソフトクリームは、」

絶品、だ、ということなんだよ」

「ふうん、それは良かったわね」と彼女は言った。「そうね、そんなに言うならひとくちくらい食べてみても良いわ。食べてもいないのに批判するのはわたしの主義に反するし、じゃあ、ひとくちちょうだい？」

「もちろん」と僕は言って、食べかけのソフトクリームを彼女に差し出した。

「ん……あ……え？ ええっと……」

「ん？」

「も……」

「も？」

「……………もうひとつ買うべきだと思う」と彼女は言った。

『愛しきひとは森深く』

犬麦や犬鬼灯、露草や小錦草、雌日芝、藪枯らし。高千穂峡周辺の道端にはそれら夏草の類があらゆる規則性をもって、あるいはあらゆる規則性をもたずに生えていた。猫じゃらしも行く手を阻むように先々に生い茂っている。猫じゃらしね、と僕は思った。猫じゃらし。猫じゃらしと名前がついているからには、猫はこいつに目がないのだろう。猫の目の前でふりふりと振ってやるだけで涎を垂らしながら飛び付いてくる姿が容易に想像できる。僕は本当に猫じゃらしに猫がじゃれてくるのか、その名の通り猫はこいつに対して目がないのか、試そう試そうと前々から思っていたのだが、未だに試したことがない（二十年くらい前から計画だけしている）。この草？ にヒントを得ておもちゃメーカーの方たちは猫のおもちゃを作っているくらいだから（多分）、恐らくはじゃれてくれるのだろう。もちろん実験もしているのだろう。じゃないと、この名前が付いている意味がまったくと言っていいほどなくなってしまふ。猫じゃらしに猫がじゃれないなんて、洗濯機の無いコインランドリーみたいなものだ。名ばかりにもほどがある。想像は出来るのだけど、それでもやはり僕は、それを自分で試してみないことにはいまひとつ半信半疑なのである。

厚い雲に覆われた太陽は、姿は見えなくとも紫外線だけはかかすまいと地表へ降り注いでいる。僕の肌は僕の身体を守るために、メラニン色素を過剰気味に生成していた。生成している音が聞こえてくる気配すらあった。

「やってしまったわ」と彼女は言った。

「どうしたの？」

「日焼け止めよ。首やら手足に塗りたいぐのを忘れてたの」

「僕も塗ってないや。黒くなっちゃうかな。あれ？ でも、君はさっき塗ってなかったっけ？ 車で。あと、ホテルを出る前にも」

「あんなんじゃ全然足りないのよ」と彼女は言った。「曇りの方が紫外線が強いんだから。このままじゃ表皮の基底層にあるメラノサイトが刺激されて、わたしのこのきめ細やかな肌の上でチロシンがチロシナーゼの作用で過剰なメラニンになってしまうわ、もう。色素が沈着して致命的なしみ、が出来たらどうしてくれるの？ あなたは良いわよ、そういうの気にしないだろうから」

日焼けの仕組みについてやけに詳しいな。しかし、晴れた空より曇り空の方が紫外線が強い、というのは都市伝説なんだけどなと思った。大体、直射日光より曇っての方が何で紫外線が強いと思えるのかが不思議だ。

「大丈夫、君はキレイだし、しみ、もない。皺すらも目立ったものはない。その歳でそのレベルを保っていることはとてもすごいことだよ。誇りを持って良いくらいだ」と僕はまっすぐ彼女を見つめた。

「どうしたの？ 突然褒め始めて。気持ち悪い」

明らかに彼女はもじもじし始めた。

「……ジュースでも奢って欲しいの？」と彼女はもじもじしながらも訊ねた。

僕はにっこりと笑った。「実はそうなんだ、先ほどからコーラを飲みたくてね」

「バカ」と彼女は言った。

それにしても雄大で壮観な景色だった。覗きただけで吸い込まれそうになる渓谷。深く生い茂った木々。冷えて固まった何メートルもの溶岩石。中でも、同じ場所から同時に臨める三本のアーチを描いた高千穂三橋が素晴らしい眺めだった。同じ渓谷に三つの橋が架かるのは日本でもこの場所だけ。そしてこれらの橋はそれぞれ素材が違う。神橋は石、高千穂大橋は鉄、神都高千穂大橋はコンクリートで出来ており、大正、昭和、平成、と、百年近くかけてこの景色を形成してきたのである。ちなみに神橋は建設当時は木造の橋であったが、昭和22年に現在の石造りに造り直したということだった。

。ここは間違いなく撮影ポイントだったため、僕は夢中で携帯電話のカメラのシャッターを押した。

「あ、あそこにお土産物屋さんがあるよ」と僕は言った。

「ほんとだ、あ、でも今買うと荷物になっちゃうから後にしない？ それにちょっとさびれてるし、きっと欲しい物はないわよ」と彼女は言った。ドライだ。「わたしちょっとあっちから撮影してみるね」

「うん、なかなかドライな意見ではあるけど確かにそうかもね。じゃあこの辺で撮ってるよ」

僕はそう言って、橋と木々の関係性を次々と写真におさめていった。

最近の携帯電話のカメラもバカに出来ない。何とこの僕の携帯電話のアウトカメラは千二百万画素もあるらしい。最新のものであれば、摩訶不思議、二千二百万画素もあるとのこと。完全にデジカメと同じレベルなのである。これでメールや電話も出来るというから驚きだ。しかし、このように僕みたいな素人はただ単に数字が大きいから凄い、という結論に陥りやすい。

まあ、もちろん確かに凄い。携帯電話がこれほどのレベルになるなんて、発売当時なら世界規模で見ても、実に六万人くらいしか予想していなかったのではないだろうか（まあまあ多いな）。ただ、先にも述べた通り、単に数字が大きいから良い、というわけでもないようだ。

プロカメラマンであるほど、実は画素数はあまり高くないカメラを利用していると聞いたことがある。むしろ、技術的には画素数が増えるほど画質は低下する傾向にあるということだ。

では、それはどういうことだろうか？ ここで皆様に見て頂きたい資料が次のページの――

……………あ、あれ？ おかしい。いつもならこの辺で彼女に、また始まった、とことんあなたはバカねえ、と言われるのだが……。

僕はホームボタンを押し、カメラアプリを閉じ、携帯電話をスリープ状態にした。そして先ほどまで彼女の居た場所に目をやる。――いない。ううむ、何処に行ったのだろう。

何度か名前を呼ぶも、返答がない。周囲には僕の声だけが鳴り響いていく。まだ昼間だというのに、周囲は静か過ぎて、声を出しただけで少し気恥ずかしくなるほどだった。クラシックコンサートの曲と曲の間の転換作業時に、ちょうどうまい具合にくしゃみをしたときくらい気恥ずかしかった。それほど辺りは静寂が支配している。セミの声も聞こえない。聞こえてくるのは時折り吹く風の音だけ。一体どうしたっていうのだろう。これは――まさかとは思うが、もしかして、もしかしてだけど、いわゆる、神隠しにあったのではないだろうか。何処にも彼女の姿が見当たらない。痕跡すらも無いのだ。

まあしかし、こういう場合、真面目に考えるとどっちかが迷子、ということになる。もちろん僕はその場から特に激しく動いたわけではないので、迷子認定はされないと思う。そう思いたい。そうすると、彼女が迷子になってしまったということになるけど、このご時世に迷子になんてなるだろうか。……………うん、彼女ならありえる。彼女はひとつのことに集中してしまうと、周りが見えなくなるところがある。あと、ちょっとうっかり屋さんなのだ。

あ、そっか、携帯、と僕は思った。

ああ、駄目だ、――携帯電話の左上のアンテナ部分には『No Service (圏外)』の文字が表示されている。まいった

。「何処に行ったと思う？」と僕はガードレールにとまってじいっとこっちを見ている小さな野鳥に声を掛けた。
「……………」

名前も知らない野鳥は、首を左右に何度か傾げるだけで、何の要領も得ない。
「困ったね。まあ、この通り車の通りもないし、事故はないだろうけど、ここでこのまま待ってた方が良いのかね。あんまり動くと、完全に離れ離れになりそうだし、ね？」

ピピ、と野鳥は短く鳴いた。
「はは、それは返事なのかな？ 彼女にさ、`何処に行ってたのよ！、って怒られるかな？ それはこっちのセリフだよ！ って言ったらどうなるかな？ ……何となく心細いね。夜は夜でこんなところで過ごすのが怖いだろうけど、昼間も昼間で薄気味悪いや。君のように空を飛べれば良いんだけど。ねえ、空を飛ぶって、どんな感じなの？」

野鳥はやはり、ピピ、と短く鳴き、首を左右に何度か傾げるだけだった。どんな感じが教えて欲しい。
「君はいつもひとりなの？」と僕は訊ねた。「ああ、答えなくてもいいよ。答えたくないこともあるもんね。いや、僕はね、いつもはとても仲の良い妻が隣りに居てね、幸せに過ごしているんだよ。彼女はとても笑顔が素敵で、とても綺麗でね、それでいてとてもかわいいところがあるんだ。まあ、少し抜けたところもあるけど、そういうところも好きだし、それはお互い様だしね」

ピピピ、と野鳥は鳴いた。さっきより長めに鳴いた気がする。肯定だろうか。
「まあ、何というか、幸せ、ってことを伝えたいだけなんだけどね。君も今後誰か素敵な人に巡り会うかもしれないから、そのときはその人……その鳥を大事にしなければいけないよ」

野鳥はそれには答えなかった。もしかするともう素敵な人（鳥）に出会っているか、思ったより歳をとっている鳥なのかもしれない。そうすると今さら新しい鳥なんて……と思っているかもしれない。散々山で軟派しまくったし（鳥を）、子どももまあまあ作った（小鳥）。だからもうわしは余生を過ごすだけなのじゃ、と思ってるかもしれない（憶測）。いや、彼（鳥）は、実のところ彼女（雌）かもしれないのだ。誰が男性（雄）と決めたのか（僕）。しかし、さすがに、君は女性（雌）なの？、なんて聞くと失礼だろう。そんなこと聞けるわけがない。そこまで僕はハラスメントを意識しない人間ではない。だって、もし聞けたとしても彼（あるいは彼女）は男性でも女性でもないかもしれないのだ。僕は特にそういったことに対して差別することはないのだけど、何せ、会社でハラスメントの研修を受けたばかりなのだ。差別はしないが、空気は読まなければならない。

「ええっと、君は女性（雌）なの？」と僕は訊ねた。結局。
すると、野鳥のくちばしがニヤリ、と歪んだ気がした。どうとでも取れるな、と思った。

「なるほど、わかったよ」
ピピ、と野鳥は鳴いた。
「それにしてもお腹空いたね。君はもう食事は済ませたのかな？」

今度はチチチ、と野鳥は鳴いた。うん、分からない。
僕は他意は特になかったが、その野鳥を見ていると、先日の野鳥専門店と隣り合わせの焼き鳥屋の話を思い出した。ま
ずいな、あ、いや、味とかじゃなくて、タイミング的に。

僕を見て彼（あるいは彼女）は、またピピ、と鳴いた。
「いやね、君には酷な話かもしれないんだけどー」と僕が言いかけたところで、空気を悟ったのか、その名もない野鳥はガードレールから脚を離し、パサパサと飛び去って行った。本当に他意はなかったのだけど……。誤解させたのだから。ま
ずいな、あ、いや、味とかじゃなくて。
「また、ひとりになっちゃったな」と僕は呟いた。

その言葉を声に出すと、何かもやもやとしたものが、はっきりとした形となって僕の周りを取り囲んだ。`孤独、とそれには書いてあった。

『パティンソンは言った』

高千穂峡のすべてをおさめるには、この小さな携帯電話のカメラだけでは不可能だな、と彼女は思った。とりあえず連写をしてみているけど、構図や被写体を決めるのも自分には難しすぎる。彼のようにはいかない、悔しい、と考え始めていた。

「いや、待って、あの人は撮った写真を加工してたわ。ってことは――」

彼女はホームボタンでカメラを閉じ、別のカメラアプリを立ち上げた。

「これをこうするでしょ、ええっと、まず輪郭を整えるとか言ってたっけ、あとは……ああ、もうぜんぜん分かんない。もういい！ しーらない。決めた、わたしはありのままを残すの。加工なんてしてたら、自分がいま観ているこの素晴らしい景色に嘘をつくことになるし、後で思い出として見返したときに、記憶を捏造することになるわ」と彼女は言った。

。あの人にもそう言おう、本来カメラなんてそういうものなのよ、あなたは記憶を、いや、世界を誤魔化しているのよ、と。

「そろそろお腹空いたわ、とりあえず戻ろうかな……と、あれ？ ここは何処？」

気が付けば、まったく分からない場所に彼女はいた。色々な写真を撮っているうちに、少し深い場所まで来てしまったらしい。ここは一体何処なのだろう、と彼女は思った。半分獣道のようなぼろぼろなアスファルト、真っ赤に錆び朽ち果てたガードレール、そして、それらを覆い囲むような木々。何処にでもあるような風景。しかし、先ほどまで見えていた橋は無い。住み慣れた街から遠く離れたこの土地で、北がどっちで南がどっちかも検討がつかない。西がどっちで東がどっちかさえも分からない。東西南北、何処かひとつだけでも分かれば、すべての方向が分かることすらも想像出来ない。それだけ彼女は混乱していた。いや、東西南北がわかったとして、一番の問題は、自分が何処に向かえば良いのが分からないことだった。

あ、そっか、携帯、と彼女は思った。

ああ、駄目だ、――携帯電話の左上のアンテナ部分には『圏外』の文字が表示されている。

「困ったわね」と彼女は言った。「これじゃあご飯が食べられないわ。冷静にならないと」

とりあえず一旦落ち着こう、と思ったみたいだが、意外と彼女は落ち着いていた。お腹が空いていることだけが唯一の気がかりのようだった。

「こういうときは、誰かに道を聞ければ良いんだけど」

その道を聞く相手がいないのよ、バカね、と彼女は思った。「ひとりで突っ込み入れてる場合じゃないわ、誰か探さないよ。でも、本当に誰もいないのね。ちょっと大声で叫んでみようかしら……ああ、でも、それは恥ずかしいし、それに汗をかいてお化粧も落ちてしまってるし、日焼け止めも……あ、あと、お腹も空いてるし」

「お腹は関係ないと思うんだがね」と何処からか声がした。

「お腹がいっぱいかどうかは一番重要な点よ」と彼女は答えた。

「そうかい、じゃあ何かしら食べるとな」

「その食べる物が無いのが問題なの」

「ふむ」

「――というか、誰？ 何処にいるの？」

彼女は辺りを見回した。すると、道路脇の`きりかぶ、の上で、一匹の猫がごろん、と横になってこっちを見ているのに気が付いた。この猫が喋ったのだろうか。まさか、と彼女は思った。猫が喋るなんて何かの冗談のように思える。あの人は「猫の言っていることがわかる」って言ってたけど（最初はおかしなひとだって思ったけど）、わたしは正直よくわからない。`ぜんぜん、わからないことの方が多い。でも、もしさっきの声がこの猫から発せられたものということであれば、わたしは完全に猫の言葉を理解したことになる。わたしも変なひとびとの仲間入りということになる。ちょっと嬉しい。「こんにちは」と彼女は試しに言ってみた。

「はい、こんにちは」と猫は言った。しかし彼女には猫が何を言っているのかやはり理解出来なかった。それでも挨拶を返してくれたことは何となくわかった。それでいい。意思疎通を図れるのは言語だけではない。

その猫は、ところどころ毛が抜け落ち、尻尾は千切れてしまったのか、怪我をして自然治癒したような跡があり、長さも普通の猫より短かかった。短いことを特に気にしている様子はない。鼻をひくひくさせながらその尻尾をゆらゆらさせている。地域猫のように耳も少し欠けている。目は切れ長のアーモンド型。その中でも`ひげ、だけは、真昼間に見える場違いな星の光のように立派に左右に伸びていた。色は茶色。元々は違う色なのかもしれないが、かなり汚れていた。この汚れは、時間をかけて築いたような汚れだった。少なくとも一週間前の台風で出来た泥の中で、ちょっとしばらく遊んじゃいました、くらいでは付かないような汚れに見えた（あるいは元々こんな色で汚れじゃないのかもしれないけど）。

「ええっと、……猫さん、で間違いはないよね？」と彼女は訊いた。どんな質問だよ、と自分に突っ込みを入れる。

「猫さん、で間違いはないよ。あんたは猫をあまり見たことないのか？」と猫は訊き返す。

「どうやら猫のようね。何かと思ったわ」

「何だと思ったんだ？」

「突然だったからびっくりしただけ」

「汚れてるから？」

「気を悪くさせたならごめんね」

「まあ、汚れてるからな。びっくりするよな、そりゃあ」

「ごめんね、ええっと、猫さんは怪我をしているの？」と彼女は質問を続けた。

「怪我？ ああ、これな。そうやな、まあ何年も生きてればそういうこともあるわな。おれらのケンカは激しいからな」と猫はむくつと起きて座り直し、前足の指を舐め始めた。

「あれ、前足と後ろ足で本数が違うわ」

「これは、最初からやな」

「後ろ足の指が一本足りないわ。かわいそう」と彼女は眉を寄せ痛そうな顔をした。

「だから、これは最初からなんよ」と猫は言い片足を上げて、肉球をこちらに見せ、開いたり閉じたりを繰り返した。それを彼女はじいっと見つめる。

「前が五本で後ろが四本」

「うむ、前が五本で後ろが四本だ」

「なるほど、じゃあお箸が持てるわね」と彼女は感心して腕を組んだ。

「ま、まあな」と猫は言った。「あんたそれより、ここで――」

「歳はいくつ？ お名前は？ この辺に住んでるの？ あと、種類は何？ 茶トラさん？ 三毛猫かな？ もし遊んで欲しいということであれば、さっき猫じゃらしを見かけたわ。猫って猫じゃらしに目がないんでしょ？」

彼女は念願の猫に会えたことで、嬉しくなったらしい。何かのリミッターが外れたように矢継ぎ早に質問を始めた。

「それより――」と猫は彼女の問いには何も答えず言った。「ここで何してるんだ？ 旅行者か？ 誰かとはぐれた

のか？」

「わたしのことを知りたいのはわかるけど」と彼女は言った。「今はわたしのターンなの」
どうやら人間は人間でも面倒な部類の人間に当たったらしい、と猫は思った。答えないと先に進めないようだ。

「……歳はいくつだっけな」

猫は前足で勘定を始める。

「化け猫ね」と彼女は言った。

「え？」と猫は言い、こほん、と咳払いした。「お嬢ちゃん、今何か失礼なこと言わなかった？」

「猫は二十を超えると、化け猫になるんでしょう？」

彼女は素敵な笑顔で猫に向けた。本当に尊敬しているように見える。何ペディアの情報だろうか。

「まだ年齢言っていないんだけど……。まあ二十二くらいかな」と猫は言った。「じゃあ次はこっちの番だな、ここで何してるんだ？」

「ん？ わたしの年齢？ それともこんなところで若い（きれいな）女性がひとりで何してるのかって聞いている？」と彼女はきょとんとした。「もし、わたしの年齢のことを聞いているならもちろん答ええないし、今何してるのかっていうのを答えると、猫さんとお話してるって回答になるよ？」

「いや、そうじゃなくて——」

完全に彼女のペースだ。

「じゃあわたしの番ね、お名前は何ていうの？」

猫は、ふう、と短く溜め息をついた。

「……名前は……」

「そっか、じゃあ……わたし決めていい？」

「……好きに呼べばいい（答える隙がない）」

もうどうにでもなればいい、と猫は思った。

「そうねえ、全身茶色だし、何か強そうだし、おじいちゃんだし、うーん、どうしよっかなあ」と彼女は言い、腕を組んで考え込む仕草をした。そしてしばらく考え込み、よし、と言った。

「よし、決めたい！ パティンソンちゃん！」

パティンソンちゃん、と猫は思った。好きに呼べば良くなかった。

「それって……茶色だから、強そうだからなのか？」とパティンソンちゃんは言った。

「気に入ったみたいね、パティンソンちゃん」と彼女は言って微笑んだ。

「……わかった。もうそれでいいよ、あんまりぴんとこないがな」

「じゃあ次の質問」と彼女はそれは無視して人差し指を上に向けた。「パティンソンちゃんはここで何してるの？」

それは、自分がしたかった質問だな、とパティンソンちゃんは思った。

「それはさっきおれがした質問なんだがな」

「遊んでるの？ それとも遊んで欲しいの？ だったらさっき猫じゃらしが——」

「何も」とパティンソンちゃんは言って、まぶたを擦った。

「なるほど、お昼寝ね。じゃあ次はパティンソンちゃんの質問で良いわ」

人間ってこんなに面倒なんだっけ、とパティンソンちゃんは過去の記憶を辿ってみた。辿ってはみたがそんな人間は特に他に思い当たらなかった。

「まあ、いい。あんたはここで何してるんだ？」

「ねえ、聞いて良い？ わたしはここで、何してるの？」と彼女は質問した。

「……いや、知らん」とパティンソンちゃんは首を振った。知るわけがない。

「冷たいわね、パティンソンちゃん。ま、そのことなんだけど、わたしね、旦那様とはぐれちゃったみたいなの」

「そうか、そりゃあ大変だな」

「道も分からなくなったし、この辺圏外だし、お腹も空いたし」

彼女は携帯電話の画面を見ながら、はあ、と溜め息をついた。

「なるほど、迷子、というやつ——」

「特に迷子というわけじゃないのよ」と彼女は気配を察して言った。「まあ、素人目から見ると迷子と思われがちだけど、ただわたしは道に迷ってはぐれちゃっただけなの」

それが、一般的に言うところの迷子ではないのだろうか、とパティンソンちゃんは思った。彼女は尚も続ける。

「自分の所在が分からなくなっただけで、ここが何処か分かれば、自ずと目的地も分かるから決して迷子ではないのよ？ それに、わたし子どもでもないしね」

「まあ、おれは何でもいいけどな」

パティンソンちゃんはそう言って、両方の前脚をぐぐっと前に伸ばし、滑り台のように背中をぐいっと反らせた。とても気持ち良さそうなストレッチだった。もしかしたら昔やっていたヨガより気持ち良いかもしれない、とそれを見ながら彼女は思った。もちろん（と言って良いか分からないけど）、ヨガにも猫のポーズはある。しかし、本物の猫には敵いそうもない。本物に比べると、ヨガの猫のポーズなんてただふざけているようなものだ。多分ふざけてストレッチをしているときにそのポーズに行き着いたのだろう。

それにしても蒸し暑い夏の午後だった。風もそよ風程度しか吹いておらず、熱されたアスファルトのせいでさらに体感温度を上げられている気がした。先ほどから思い出したかのようにセミも鳴き始めた。もしかしたら気温によって鳴かないを決めているのかもしれない。どちらにしろその鳴き声によってより一層暑さを感じさせられる。

「連れて行ってやるか」とパティンソンちゃんは言い、道路の先を指差した。

「ん？ あっちに何かあるの？ あ、もしかして」と彼女は言った。「もしかして道案内してくれるの？」

「うむ」

「パティンソンちゃんは道が分かるの？」

「分かる」

パティンソンちゃんは頷く。

「ほんと！？ 良かったあ、こんなところでお腹減ったまま朽ち果てるかと思ったわ。痩せちゃう！ あ、その前に喉も渴いて干からびてしまうわね」と彼女は言って、ふふふ、と笑った。

「ただし——」とパティンソンちゃんは言った。「ただし、ひとつ条件がある」

「何？」

「条件」

「？」

「まあ、大したことじゃない、無事着いたらいい」

「あ、お礼をしろってことね。変なところに連れて来いとか、宇宙飛行士になれ、とかじゃなければ全然良いわよ」

「宇宙飛行士？」

パティンソンちゃんは良くわからない、という顔をして首を傾げた。

「例えよ」

「大丈夫、心配ない」とパティンソンちゃんは笑った。初めて笑ったかもしれない。

「じゃあ、お願いしようかしら？ ま、別にひとりでも帰れるけど、早く帰らないとあの人が心配してるかもだからつい

て行ってあげる」

「よし、じゃあついて来い」とパティンソンちゃんはい、いきりかぶ、からすたつと地面に降りた。「あ、そうだ」「ん？」

「猫は猫じゃらしでは遊ばない。少なくともおれは」

彼女はにこっと微笑みかけた。

「道案内よろしくね」

「ま、いいけど」とパティンソンちゃんは言った。

さすが猫ね、と彼女は思った。

そんなところ歩けるのか、というところをすいすい行き、そこはさすがに危ないでしょ、というところも気にせずに入っていく、思わぬところから顔を出す。パティンソンちゃんはたまにちらっと後ろを振り返り、彼女がしっかりとついて来ているかを確認し、確認するとまた同じようにとことこと歩いて行く。速過ぎもせず、遅過ぎもしなかった。彼女が少しもたつくような場所では、わざとゆっくりと歩き、平坦な道であっても完璧に彼女の歩調と合わせた。

慣れているな、と彼女は思った。この猫は以前にもこのように人間を案内したことがあるのかもしれない。あるいは日常的に人間と過ごしているのかもしれない。

思ったより自分は遠くまで来ていたみたい、と思い始めたとき、百メートルほど先に一軒の家屋が見えてきた。

「あ、家がある！」と彼女は久しぶりに見るひとの気配に嬉しくなった。「ねえねえ、家があるわよ、パティンソンちゃん。……あれ、パティンソンちゃん？」

気がつくパティンソンちゃんは彼女の前から居なくなっていた。

「パティンソンちゃん……ありがとう」と先ほどまでパティンソンちゃんが居た場所に向かって、彼女はお礼を言った。

そういえば、お礼はしなくて良いのだろうか、と彼女は気になった。しばらく考えてみたが、いくら考えても考えはまとまらなかったし、パティンソンちゃんはもう彼女の所に戻ってくる様子もなかった。

きっかり五分ほど待って、彼女はパティンソンちゃんが戻ってくるのを諦めた。そして、百メートル先の家で道を聞こうと思い、ゆっくりとその家に向かって歩いた。

「あ、ここ——」

家に近付いてみると、その家はあの先ほど見たさびれた土産物屋だった。

「元の場所に戻れたみたい、良かった。あの人もこの辺りでお腹空かしているはずだから、このお店で何か買って持って行ってあげよつと」

彼女はこんにちは、と言いながら、お店に入った。

「はい、いらっしゃい」と年配の女性が応える。

彼女は、ひと通りお店の中をぐるっと回り、品揃えが微妙ね、と思い始めていたとき、お店の片隅に一匹の猫がいるのに気がついた。

「パティンソンちゃん！」と彼女は言った。

「あら、あなたもうちの猫を知ってるの？」と年配の女性は言った。

「あ、はい、ええっと（あなたも？）、さっき道に迷ったときにこの近くまで誘導してもらったんです」

「そうだったの、やっぱりあなたもなのね。最近この子がお客さんを連れて来るから助かってるのよ」

そういうことか、お礼、というのは、ここで買い物をする、ってことね。

「パティンソンちゃんは招き猫なんですね」と彼女は言った。

「名前を付けてくれたのね」

「あ、ごめんなさい。本当の名前は何て言うんですか？」

「大丈夫、彼も喜ぶわ」と年配の女性は言った。「名前はね、エドワードというの」

エ、エドワード……？ エドワード……あんまり変わらないわね、と彼女は思った。

「うるさいよ」とパティンソ……エドワードは言った。

『もし、僕たちが宇宙飛行士だったら』

「パティンソン？」と僕は彼女に声を掛けた。「随分思い切った名前の猫だね」

さびれた土産物屋から聞いたことのある声が聞こえるな、と思ったら、案の定彼女が猫と話しているところだった。「あ、何処へ行ってたのよ。捜したのよ？ もう、すぐ何処かにいなくなっちゃうんだから」と彼女は言って腕を組んだ。

。「ああ、ごめんごめん（え？ 僕が悪いの？）。って、君こそ何処に行ってたの？」

「わたしは写真を撮ってただけ、あと、パティンソンちゃんとお話してたの。ね？ パティン……エドワードちゃん！」

「エドワード？」と僕は言った。

「あのね、名前はパティンソンちゃんなんだけど、本当はエドワードちゃんで、野良猫ちゃんかと思ったら、本当は招き猫ちゃんで、ええっと」

彼女は少し混乱してあたふたしながら、察してよ！ と怒り出した。

「うん、わかるよ。すべてを悟ったよ」と僕は言った。「まず、君が迷子になり、途方に暮れたところで猫に会う。猫に名前を付けて話し込んでたら、その猫が道案内をかって出てくれた。そして、やっとここまで辿りついたら、実は猫の本当の名前があって、お礼に、と買い物促すお店の招き猫だった、ってわけだね」

「完璧だな、坊主」とパティン……エドワードは言った。

「迷子ではないけどね」と彼女は言った。「でも大筋は合ってるわ。大筋は。大筋だけね」

「大筋、をやけに強調している。どっちでも良いのに。」

店のレジ付近では、年配の女性が椅子に座って、うつらうつらと居眠りをしていた。あのひとが店員さんだろうか。そりゃ店もさびれるだろうな、と思った。

「それにしても」と僕は言った。「パティンソンて、そんな名前付けたらパティンソンちゃんがかawaiiそうだよ」

「エドワードだ」とパティ……エドワードは訂正した。

「何よ、キヨミズデラさんよりは全然良いわよ」と彼女は言った。

「キヨミズデラさんは良い名前だと思うけどねえ。でも、どうしてパティンソンって名前を付けたの？」と僕は訊ねた。

それについては彼女は首を傾げた。「なんでだっけ？」

「……おれは知らんぞ」とパティ……エドワードは言った。

「忘れたわ」と彼女は言った。

「……ま、いいけどさ」

僕らは、パ……エドワードに別れを告げ、お土産物屋さんを出た（結局ガムだけ買った）。

鳥とセミの声が戻ってきている。谷底から吹き上げる風が木々をざわざわと揺らし、ジジジと鳴きセミが飛び立つ。先ほどの野鳥も今頃何処かの木にとまり、求愛の声であったり、仲間を呼ぶ声であったりを繰り返しているのだろうか、様々な鳥の鳴き声が僕たちの頭の上の方から聞こえてくる。そしてまだ右肩には何か違和感がある。

「まだ、お母さんたちが迎えに来るまで時間があるから、もう少しこの辺を散歩しようか？」

「Sounds Good ! わたしも今そう思ってたわ」と彼女は言った。

僕たちはしばらく何も喋らず、ただただ黙って道なりに高千穂峡を歩いた。カーブに差し掛かれれば曲がり、十字路に差し掛かれれば目配せをし、綺麗な花があれば立ち止まり、人にすれ違ふと会釈をした。そして、たまに手を繋いだり、たまに手を離したり、腕を組んだり、ポケットに手を突っ込んだり、意味もなく彼女の髪の毛を触ったり、意味もなく彼女が僕の背中を叩いたり、空を見たり、山を眺めたり、道路に落ちている葉っぱを指差したり、看板の文字を読んだり、何も言わなくても同じところを二人は見ていた。目が合うと、どちらともなく笑顔になった。目を離すタイミングも同じだった。

こうしてただ黙々と歩いていると、何も言わなくてもすべてが通じている、という感覚になる。錯覚なのかもしれないけれど、通信手段が壊れ、意思疎通の手段が他に無い宇宙空間の中、身振り手振りで作業をしてしまえるベテラン宇宙飛行士のように、僕たちはこの旅で何かが変わった気がしていた。それが何なのかはまだはっきりとは分からない。もちろんそれは悪いことではない。もし僕たちが宇宙飛行士だったら、何千時間とかかる宇宙への旅だって、飽きることなく続けられるだろう。そんな確信があった。

「ねえ、朔ちゃんたち今頃何しているかしらね」と彼女は言った。

「そうだね、多分、追いかけてこやろ何や彼やしてると思うよ」

そういえばすっかり彼らのことを忘れていた。確かに今頃何をしているのだろう。

「寂しがってないかしら？」

「寂しがってるかもね」と僕は言って、近くの木から葉っぱを一枚千切って、橋の欄干から川に向かって放り投げた。

「先輩にお世話を頼んでいるから、ある程度は大丈夫だと思うけど、やっぱり多少は心配だね。ストレスなんかも溜まってそうだし」

「そうよね、ああ、何か早く帰りたくなってきちゃったな。もう少し旅行を満喫したい気もするけど、でもやっぱり早くミシエルや朔ちゃんたちに会いたい！」

「Webカメラで見れたら良いのにね」と僕は言った。

「それよ！」と彼女は言った。「どうやって見るの？ 早く見せて！ ねえ、早く！」

「あ、いや、見れたら良いのにね、ってことだよ」

「……何よそれ、紛らわしい」

いや、そんなに紛らわしくないだろ、と僕は思った。ちゃんと言ったはずなんだけど。

「ごめんね、次はそうしょっか」

「うん！ 約束ね！ 多分今頃泣いてるわよ。にやーって。だって、朔ちゃんたち、あなたのこと大好きだから」

「そうかな？」

「そうよ」

そうだろうか。うるさく言うひとがなくて、騒いで暴れてそうな気もする。うん、絶対そうだ。

「知ってた？」と彼女は言って、立ち止まってこちらを向いた。

「何を？」

「朔ちゃんね、あなたが仕事でいないとき、玄関のドアの前でずうっと待ってるのよ？ ドアに向かって鳴いてるし、鳴くの疲れたらそこにちよこんと座ってるし。朔ちゃん、今日は帰って来ないのよ？、って言っても、しばらくはずうっと待ってるんだから。わたし、あれ見て嫉妬しちゃった。あなたはこんなに愛されてるんだなあ、って。まだわたしにはあんまり心許してくれてないから」

「そうなんだ。それはちょっと嬉しいねえ」と僕は言った。本当にちょっと嬉しい。「でも、君のこともちゃんと好きだから大丈夫。朔ちゃんは誰にでも分け隔てなく懐くけど、お膝に座るのは僕と君のだけだし、ミシェルだって、あんなに気難しいのに隠れてないでしょ？ ミシェルは心を許さないと誰の前にも姿を見せないんだよ？ だから大丈夫、ちゃんと僕らの子どもみたいなもんだよ」

「本当に？」

「本当だよ」

「ふふふ、わたしも嬉しい！ 何かお土産買ってかーえろっと」

「あんまりあげ過ぎちゃ駄目だよ」

「えええ？ いいじゃない、ちょっとくらい。ほんと、あなたってケチね」

「少しでも長くあの子たちと一緒に居たいでしょ？ だから我慢しないと」

「そっか、そうね。あの子たちが病気になるったらわたし死んじゃうかも」

彼女はそう言って、空を見上げた。

「まだね、わたし大事なひとが亡くなる瞬間に立ち会ったことないの。おじいちゃんは早くに亡くなってるし、おばあちゃんはまだまだ元気だし。もちろん両親も。誰かが死ぬ、ってことに慣れてないの。だからそのとき耐えられるか心配なの。きっと耐えられないわ」

僕は少し弱気になっている彼女の小さな手を握りしめた。

「大丈夫、耐える必要ないし、悲しければ泣けばいい。僕だって両方のおじいちゃん、おばあちゃんの死に直面したけど、全然耐えられなかったよ。今だって忘れてない。だから慣れる必要なんてないし、絶対慣れないと思う。怖いかもしれないけど、突然の死ではない限り、人生を全うした死だから逆にお疲れさまでした、って言ってあげたくなるよ。僕はそう思えたから乗り越えられたかな」

「強いよね」と彼女は言った。「でも、わたしの方が歳が上だから、あなたよりは先に死ぬわね。そこは悲しまなくて済むから良かった。あなたを残していくのはちょっぴり心配だけど」

「うーん、多分僕の方が先だと思うよ」と僕は言った。「だって、君の家の女性は、長生き家系だからね」

「あ……そうだった」と彼女は言った。

「とは言っても、まだまだ人生折り返し地点だから、まだまだあの子たちのために頑張らないと」

「うん！ 美味しいものいっぱい買って帰ってあげよっと」

「……だからあげ過ぎちゃ駄目だって」

「えええ？ ケチねえあなたって」

結局、話は振り出しに戻るのか、と僕は思った。

太陽は先ほどよりも分厚い雲に覆われていた。覆われてはいたが、まったく涼しくなる気配がない。シャツが身体にへばりつくほどだった。じめじめと肌の上に薄くまとわりつく空気が、ひとめもりずつ僕らの不快指数を上げていく。

僕は一刻も早く冷たいシャワー若しくは温かいシャワーを浴びたかった。いや、せっかくのこの土地、早いところ熱い温泉にでもゆっくりと浸かりたかった。この後、温泉に行く予定はあっただろうか。どうだったっけ。もう、暑過ぎて考えもまとまらない。この後は――。

「ねえ、そういえばこの後は何処に行くの？」と彼女は言った。

「ああ、確か――」

何処だっけ。何やら目眩がする。汗をかき過ぎたのかもしれない。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫。ちょっと疲れたのかも」

「あ、ほら、お母さんたち迎えに来たよ？」

「うん」

「車の中で休むといいわ。いっぱい歩いたもんね」と彼女は言って優しく微笑んだ。

『動物愛護及び管理に関する法律』

「ミシェル、まだですか？」と彼（猫）は催促している。「早くしてください！ もうぼくダメです。お腹減り過ぎてどうにかなくなっちゃうかもしれません！ どうにかっていうのは猫じゃなくなってしまうかもしれないということです！」
「にゃーにゃーうるさいわね」と彼女（猫）は言った。「ちゃんとやってるでしょ？ そんなにごちゃごちゃ言わなくてもわかってるわよ。少し黙ってなさい。わたしがいま頑張ってるんだから。もう少しなのよ」

彼女（猫）は何やら、それ、に前足を突っ込んで、がさがさ、がさがさ、とやっている。なかなか苦戦しているようだ。前足を奥に入れ、さらにそこから指を伸ばし、爪を伸ばし――。

「――ほらね、やったわ」

「あ！ さすがミシェルです！」

悪戦苦闘すること数分、自動給餌機からカリカリがぱらぱらと落ちてきた。

「あら……」

「ミシェル……」

あれだけ頑張ったにもかかわらず、カリカリは数個ほどしか取れていなかった。

「対価としては微妙ね」と彼女（猫）は、要した時間、手間、カリカリの数をざっと計算した。「ふむ。じゃあこれはわたしがいただくわ」

「え？！ ひどい！」と彼（猫）は言った。「ぼくも一生懸命応援してたのに！」

「何か文句があるのかしら？ あなたは爪のひとつでも突っ込んだの？ わたしなんて、ほら、見てみなさい。爪の先がこんなにも割れてしまっているのよ？」

彼女（猫）は、ほんの数ミリにも達していない欠けた爪先を彼（猫）に向けて、ふふん、と言った。

「ぜんぜん割れてないです……」

「何？ 文句あるならあなたがやりなさい」

「ひええ！（だって、すぐに取ってあげるから待ってなさいって言ったのミシェルなのに）」

彼女（猫）の鋭い眼光に気圧され、彼（猫）はソファの陰に逃げ隠れた。

「それにしてもこれだけじゃ足りないわね」と彼女（猫）は言った。「あの人、こんなおもちゃみたいな物にわたしの大事なご飯を詰め込むなんて、帰ってきたらただじゃおかないわ」

「ぼくのごはんもです！」と彼（猫）はソファの陰から言った。

「そうだ、どうせやるなら帰ってきた瞬間に絶望するようなことが良いわね。帰ってきてから目の前でやると面倒なことになりそうだから、その前にやっしまえば良いのよ」

彼女（猫）は何て名案なの、と言い、ふふふふふふふふ、と不気味に笑った。彼女（猫）が不気味に笑うとき、本当に不気味に笑う。目の下から口の端にかけて、不気味です、と書いてあるのだ。

「ミシェル……それはちょっとキケンだと思いますよ？」と彼（猫）はおそろおそろ意見した。「あの人、怒ったとき鬼みたいに怖いおぼれたんですか？ ぼくなんてこの前、けいたいでんわっていかたい板から伸びている細長いコードで遊んでたら、トイレに閉じ込められました。ほんの一瞬みしかしてないのにですよ？」

「だからあなたは駄目なのよ」と彼女（猫）は、ふう、と溜息をついた。「良い？ そのくらいで怖がったらこのさき生きていけないわよ。トイレが何よ。片付ける手間が省けて逆にあの人が喜ぶくらいよ」

「でも……ねずちゅうさんと遊べなくなります」

「ほんと、あなたって駄目ね」

「しゅん」と彼（猫）は言い、肩を落とし猫背になった。まるで猫のように。

「もう、シャキっとしなさい！ 水を含んで三日くらい経ったレタスみたいな顔してからに」

彼女（猫）はそう言って、また一粒カリカリを口に入れた（あら、美味しいわね）。

二人が黙ると辺りはしんと静かになる。そして、静まり返ったダイニングに、彼女（猫）が食べる、カリカリ、カリカリ、というカリカリ音が響き渡る。

「朔ちゃん」と彼女は口元をぬぐいながら改まった声で言った。

「はい！」

彼（猫）は反射的に背筋を伸ばす。

「あなた、動物愛護法って知ってる？」

「どうぶつあいごほう？」

「そうよ」

「知らないです！ なんですそれ？ 美味しいやつですか？」

「ふふん、わたしもよく知らないんだけど、これが使えると思うの。あの人が怒ったらこの言葉を言えば黙るはずよ。

テレビで言ってたのを聞いたのよ」

「どうぶつあいごほう……」と彼（猫）はもう一度つぶやいた。「それって、もしかして、動物の愛護及び管理に関する法律で、その目的は、動物虐待等の禁止により、生命尊重、友愛及び平和の情操の涵養（かんよう）に資する、ことと、動物の管理方針を定め、動物による人の生命、身体及び財産に対する侵害を防止する、ことのことですか？」

「え？」

「あ、違いましたか？」

「いや、ま、まあそんなところね」と彼女（猫）は言った。

「やはり！ 略されていたのですぐにわからなかったです！ でも、長い言葉を略せるなんて、さすがミシェルです！」

「ふ、ふん、まああなた程度には少し難しかったようね」

「はい！ 丸覚えしただけなので、内容は全然わかりません！」

「（あ、そうなの？）じゃあわたしが簡単に教えてあげるわ」

彼女（猫）は少しばかりほっと溜息をついた。

「おねがいします！」と彼（猫）は良い返事をした。その目はキラキラと尊敬の眼差しで光っている。

「仕方ないわね。良く聞きなさい、動物愛護法というのはね――」

「はい！」

「動物愛護法というのは、猫に優しい法律なのよ」

「え！？ 猫に？！」

「そうよ」

「ついにぼくたちに関する法律ができたんですか？！」

「そうよ」

「なんかわくわくします！」

「そうね、わたしも同じ気持ちよ」

「それで、具体的にはどう優しいんですか？」と彼（猫）は訊ねた。

「それはわからないわ」
「え？」
「と、とにかくこの言葉を言えばあの人は黙るのよ。それは間違いないわ」
「さすがミシェルです！」
「ふふん。ま、それはいいわ。それはゆっくり後でやるとして、今はこのお腹の減り具合を何とかしないと、何もやる気が起きないわ。もうあんな面倒なことでも数粒しか取れないんだから」
「あ、それなら」
「何？」
「20時になったらカリカリは自動的に出てきますよ！ あと10分くらいです！」

『猿はもう猿ではなくなっていた』

誰かが誰かを呼ぶ声、誰かが誰かに話しかける声、誰かが誰かに歌う声、誰かが誰かを慈しむ声。それらが断続的に、しかし終わることなく何処か遠いところから聞こえてくる。壁を挟んだ向こう側からあるいは僕の耳のすぐ側から。それをただ僕は、生温く濁った水の中でじいっと動かずに（動けずに）耳を傾けている。いや、耳を傾けなくてもそれは否応無しに耳に飛び込んでくる。何を言っているのかまではわからない。言葉になっているのかどうかすらわからない。はっきりと聞こえたとしても、そもそも言語と認識することは不可能なのかもしれない。

うるさい。お願いだから少しの間黙っていてほしい。ほんの少しの間だけで良い。コーヒーを一杯、若しくはタバコを一服するくらいの時間だけでも良い。これ以上聞かされると、僕の耳がおかしくなる。何をそんなに話すことがあるのだろう。何をそんなに聞かせることがあるのだろう。僕はとにかくゆっくりと眠りたい。この生温い水の中で、何も考えずにゆっくりと眠りたい。ただそれだけ。他には何もいらぬ。何も必要ない。ここにはすべてがあり、ここにはすべてがない。僕がすべてで、僕以外がすべてである。

動けない。動かないのではなく、動けない。先ほどから手足、手足の指、顔や目、口や鼻、眉に至るまで動かそうと試みてはいるが、まったくぴくりとも動かない。`ぜんぜん、動かない。何か硬く、それでいて柔らかいものに全身を隙間なく固められている。型を取られる人形というのは、ちょうど今の僕みたいな気持ちなのだろうか。僕はカーボンで固められてしまったハン・ソロの気持ちを想像しながら、周りの雑音を遮断するため自分の心臓の音に耳を澄ませていた。心臓は早く鋭く、ときとして穏やかに脈打っている。頻脈、除脈。61、62、63……。

気が遠くなるほどの時間が経過した。いや、もしかすると、五分も経っていないのかもしれない。数年なのかもしれない。数日なのかもしれない。どちらにせよ、いつまでこの時間が続くのかがわからない。この、深くて暗い海の底を漂うような、暗い井戸の底で上から土を被せられたような、コンクリートの壁と壁の隙間に押し込められ、その上から新しい壁を塗られたような。毛布のように温かいし、タオルケットのように肌寒い。息苦しいし、息苦しくない。眠い。寝かせて欲しい。一体いつまでここに留まれば良いのだろう。いつまで僕はここにこうしていなければいけないのだろう。

どうか早く帰らせて欲しい。帰りたい。早く帰って抱きしめたい。抱きしめられたい。

「帰りたい？ 一体何処に？」

「元居た場所に」

「一元の場所？ それは何処？」

「それはもちろん」

「一もちろん？」

「もちろん」

記憶が錯綜する。僕は僕で、僕は誰かで、その誰かは誰でもなくて。誰でもない誰かは、誰でもない僕で。

いま一少しだけ動けた気がする。突然のこと過ぎて、何が動いたのか、何を動かせたのかは覚えていない。ただ、動かした、という感覚だけが残っている。錯覚かもしれない。でも妙に現実的な感覚。夢とは違う感触。太陽が沈むくらいスピード。地球が回る程度のスピード。どちらも同じスピード。視点を変えただけ。僕はひとつひとつ神経を辿り、そしてひとつひとつ記憶を辿りながらそれを確認する作業に入る。まずは頭、……違う。目は？ 開かない。耳は……元から動かせる気がしない。口はどうだろう、……駄目だ。顔の筋肉は死んでいるかのようだ。僕は諦めない。では、右手は動かさ……ない。左手も同様。指も駄目だ。脚に至っては自分のものであるという感覚すらない。それでは足の指は……動く。少しだが動く、手足の無い動物がアスファルトの上を移動するようなスピードではあるが、何とか動く。親指、人差し指、中指、薬指、小指……。動く、動くことがこんなにも疲れることだっただろうか。……わからない。僕は一体ここで何をしているんだ？僕は一体誰で、何の目的があって、何をこれからしたかったんだ？寒い、いや、温かい。いや、生温い。早くここから出して欲しい。この時間は何のためにあるのか、この旅はどういう意味を持っているのか――。彼女に会いたい。……彼女？彼女とは……誰だ？

場面が変わる。まぶたの上に覆い被さる雰囲気を感じる。ここは前と同じくらいの暗い場所。どちらが赤ワインで、どちらが葡萄ジュースか、目の前に並べられてもわからないように、暗さの違いはわからない。ただわかるのは雰囲気が変わったことだけ。その暗さは均一に均等に僕にのしかかる。先ほどよりも幾分濃密に変化した空気が身体を取り囲む。

気配がする――と僕は思った。僕以外の誰かの気配。僕以外の誰かが、横、若しくは前、後ろ、上、そして下。あらゆる方向に佇んでいる気配。その気配は、ラッシュアワー中の通勤電車、あるいは昼下がりの閑散時間。どちらのようでもあり、どちらでもない。それくらいひしめき合っている気がするし、静か過ぎて誰も居ない気もしてくる。もう話し声は聞こえてこない。ただただ、誰かのいる気配。そして誰もいない気配。

そしてまた時間が経過する。

そろそろみただよ。

誰かが言ったその言葉に合わせて、周りの何かが動き出す。僕も、押し流されるように動き出す。そして、何も考えず流れに身を任せる。その方が良い気がする。そう感じる。何しなくても最初からそうすることが決まっているように。やがて、明るい気配を感じる。しかしそれは一瞬のこと、僕とその周りの気配は、また同じ暗闇へと流されていく――

。一体何の為だとか、僕は誰なんだというのは、段々とどうでも良くなってきた。決まっていることに抗っても仕方がない。

……そしてまた、沈黙。

「やあ」と猿は言った。猿？ 「随分と深く眠っていたみたいだね」

「……………」

声が出ない。喉があるところに喉が無い感覚がある。無いのにあるだなんて、哲学みたいな問題だな、と思った。触るともちろん喉はある。手足は少し痺れがあるが、動かないことはない。

「ああ、まだ喋れないのか。深く戻し過ぎたかな」

「……………」

猿は、ほんの少し先のカウンターの上で話している。お互いが手を伸ばせば届くような距離だ。それなのにまるで実体がないように見える。まるでテレビを覗いているようだった。僕は週休日の朝目覚めたときのように、何も考えることが出来ない状態で、そのままぼうっと猿を見つめた。

「大丈夫かい？ 死んだ魚みたいな眼をしてるぜ。まあいいや、奥さんは元気？ ほんと君の奥さんは良い奥さんだよ。あの人が自分の奥さんだったら、毎日が楽しくて仕方ないだろうね。毎日感謝祭みたいなもんだよ。はしゃぎ過ぎて、時間がいくらあっても足りないね。毎日ワインやらシャンパンやらを開けて、気の利いた音楽なんか流してさ、今流行りのパリピというやつかな？ うーん、でも君はパリピって顔でもないね、幸もあんまり濃ってわけでもないし、あ、いや、顔は濃いんだよ？ 幸が薄ってダイレクトで言うって傷付くかなと思ってさ。だから、幸は濃くないね、って言ったわけ。大丈夫、顔は統計から見ても十分濃いから、心配しなくてもいい」

猿はそう言うと、右腕から生えている毛を数本むしり取り、2秒ばかりじっと見つめてからカウンターの下へその毛をばらばらと落とす。猿のくせに毛深いのを気にしているのか？ もしくは抜け毛が多い季節なのだろうか。毛が長からうが短からうがどちらにせよ猿は猿なのに。それに、猿に顔が濃いだなんて言われたくない、別に心配もしていない。「死んだ魚といえばさ」と猿は言った。「毎年ニュースが何かで、`今年はさんまの水揚げ量が少ないですね、って言われてるよね。でも、正直特に食卓に影響しているとは思えないんだけど、それについてはどう思う？」

「……………」

く、苦痛だ。何も返答出来ないし、何も突っ込みを入れることが出来ない。いつまでこの苦痛な時間を過ごせば良いのだろうか。それより、この猿一体何なんだよ、と思った。

「猿は猿だよ。別に馬でもないし、キリンでもない」と猿は言った。……こいつ、こっちの考えわかってるみたいだな。「猿は何処にでもいるよ。別に山の中だけじゃない。まあ、海にはいない。あ、でも、`海猿、って映画あったけど、あれはまた違う。ややこしいのは謝るよ。でも、あれは僕のせいじゃない。じゃあ誰のせい？ って話になるんだけど、そんなこと僕に答える義務はないから、自分自身で、何とかペディアで調べるといいよ」

猿は歯を見せながらやり、とした。面倒だな。でも、何だかこのやり取りには身に覚えがある。ううむ、どこでだっけ。

それにしても馴れ馴れしい猿だ。猿に知り合いはいないはずだ。動物園に通っているわけでもない。高崎山の猿か？ いや、違う。

「この姿はイメージだよ」と猿は言った。「この猿に会った場所を知りたいなら——」

「——滑床溪谷」と僕は言った。少しかすれてはいるが、やっと声みたいなものを出せるようになった。喉は少しづつ回復し始めているようだ。首を触ると、喉のあるところに喉があった。そうだ、滑床溪谷の猿だ。何で忘れていたのだろうか（猿は全部同じに見える）。そんなに多く猿に知り合いはいない。言ってみればゼロだ。そのことに早く気がつくべきだった。少しスッキリした。それに、このやり取りは普段の自分だな、と思った。野鳥や野良猫たちもこのように一方的に声を掛けられて、迷惑していたのだろうか。ちょっと控えなければいけない。

「そう、滑床溪谷」と猿は言った。「この姿はね、さっきも言ったけど、ただのイメージにすぎない。君だけのイメージなんだよ。滑床溪谷はどうやら君の大切な場所のようだからね。お気に入りの歯ブラシがあるように、この人でなきゃ駄目だ、って想いがあるように、あの場所は君が気が付いていないだけで、特別な場所なんだよ」

特別な場所？

「ふうん」と僕は言った。

「ふうん、だって？ 結構今大事なこと言ったと思うんだけどね。それを、ふうん、で片付けるなんて。いいかい？ あの場所は言うなれば、ソウルプレイス」

「ソウルプレイス？」

「そう、ソウルプレイス」

ソウルプレイス……………まあまあダサイ表現だ。初めて聞いた。多分そんなダサめの表現はこの先使うことはないだろう。申し訳ないとは思うけど。

「うん、でもさ、ちょっと大げさだな、登場の仕方が。ソウルプレイスだかプレイボーイだか知らないけどね。睡魔は睡魔らしくしないと」

やっと現れたか、と思ったら何かスピリチュアルを語って騒ぐ猿になっているとは。いや、前に現れたときもそういえば猿は猿だったか。

僕は大切な場所ねえ、と思った。そんなあの場所に思い出なんてない。両親の初デートの場所ではあるけど、僕は今回二回目だし。

「やっと気が付いてくれたのか」と猿は言った。「本当はしばらくもう会わないつもりだったんだけどね」

「ふうん」

「各方面から色々頼まれてね。仕方なしに君の前に現れたというわけだよ。仕方なしにだよ？」

「誰に？」

「ん？ 誰にって？」

「だから」と僕は言った。「各方面から頼まれたんでしょ？ 誰に頼まれたの？」

「ふむ」と猿は言ってカウンターからすたっと下に降りた。「——守秘義務、という意味を君は知ってるかな？」

また始まった。

「ある程度は」と僕は言った。

「良かった、それが答えだよ。言いたいところではあるけど、言えないのさ」

猿は首を左右にこきこきと鳴らし、両手を胸の前でぱん、と叩いた。まるでシンバルを叩くおもちゃみたいだった。

「そっか、じゃあ仕方ないね諦める」

「え？」

「え？」

「いや、知りたくないの？」

「だって、守秘義務なんでしょ？」

「ま、そりゃそうなんだけどね」

「だったら大丈夫。そんなに気にならないし見当もついてるから」と僕は言った。特に見当はついてないけど。

「張り合いがないね。じゃあ一人だけ教えるけど」と猿は言った。教えてくれるようだ。

「大丈夫、大丈夫。見当もついてるから」と僕はもう一度言った。

「わかったよ。他にも教えるから」

観念すると、口が軽くなるのは相変わらずのようだった。僕はゆっくり話を聞くためにひとり掛けのソファに浅く座り、背もたれに寄りかかり、では、聞きましょう、と言った。腰と背もたれの間に何かクッションのような物が欲しいな、と思った。

「まず、野鳥」と猿は言った。
「野鳥？」
「そう、野鳥。彼女からのご指摘案件だ」
あの野鳥か。野鳥からご指摘。野鳥からご指摘を頂けるなんて、世界広しと言えど僕くらいのものだろうか。カテゴリ一は何だろう。というか、雌だったのか。
「端的に言うと、わたしは女性だし、気安く話し掛けなくてほしい、と言っていたよ」
「なるほど」と僕は言った。あれは確かに僕が完全に悪い。「それは悪かった。そうやって言ったのかい？」
「実際は、気安く話し掛けんな、だったかな？」
もっと悪い。まあまあ怒ってるな。
「そ、そっか。次会ったら謝っとくよ（他の野鳥との区別がつけば）。じゃあ次の相談者は誰だろう？ 猫？ 犬？ 猿？ それともキジ？ きびだんごが甘過ぎるとか」
「次が一番大事だね」と猿は僕を無視して続けた。話しながら向かい側のソファに座り、足を組んで後ろにもたれかかった。もたれかかった、というより足が短過ぎて重心で自然と後ろに倒れた、と言った方が正しいかもしれない。「次の相談者は君の奥さんだ。そう、ここに君が来たのも、僕が君の前に姿を現したのも、すべて君の奥さんが段取りしたことなんだよ」
「え……うちの？」
「そう、君の奥さん。君の奥さんがね、僕に直接、あの人が不安がってるから何とかしてあげて、って言って来たんだよ。羨ましいね、良い奥さんじゃないか」
そうだったのか、それならそうと行ってくれたら良かったのに。
「そっか、それはうちの迷惑かけたね」と僕は言った。
「全然構わない」と猿は言った。「僕は美しい人の頼みは断れない、たち、でね。ひとこと、お願い、と言われると無視できないんだ」
ませ猿だ。ませ猿だな、と思った。
「その前に、言わなければいけないんだけど、この場所にはそう長く居られない。そして、最初に君の無駄話に付き合ってしまったからもう正直あまり時間がない。だから要点をまとめると――」
こっちのせいだよ。まあいい、時間が無いなら無いで文句を言っても始まらない。
「まとめると？」
「要点をまとめると、君はまあまあ危険だった。けどもう大丈夫」
「危険だった？」
「うん」
「でも、もう大丈夫になったってこと？」
「その通り」と猿は言った。「もう大丈夫、危険は去った。と言うより、諦めてくれた、かな」
「いまいち要領を得ないんだけど」と僕は言った。「具体的には何があって、何をしてくれたの？」
「さっきも言ったけれど、もうあまり時間がない」
「もう少しだけ教えてほしい」
「……欲張りだねえ、わかった、もう少しだけ」
猿は、こほん、と咳払いした。
「君には一回死んでもらった」と猿は言った。
「え？ 死んで？」
「まあ、聞けよ。死んだ、という表現はあれだな、産まれる前に戻ってもらって、もう一度産まれてもらった、という表現が正しいかな」
何だそれ、もう一度産まれてもらった、だと？
「……それで諦めた、と」
「そう」
「もう、危険は去った」
「そういうことになるね」
猿はもう猿ではなくなっていた。いつものブルーのシャツに、ネイビーのスラックス、ブラウンのローファーを履いて、長い足を投げ出し、ソファの上で足を組んでいた。今度はしっかり足を組めている。時間が無いと言う割には、優雅に過ごしているようにも見える。腕なんて頭の後ろで組んでいる。
部屋の壁には、時計が少なくとも十個以上掛けてあった。それらはすべて少しずつ針の位置がずれ、すべての時間が違っていた。進み方も違っているのかもしれない。どうせなら、時計の下に『London』や『New York』と書いて貼っておけば外資系金融機関っぽくなるのにな、と思った。しかし、外資系金融機関と名乗るには、この部屋は暗過ぎたし、狭過ぎた。いいとこ弁護士事務所だろう。
「この部屋はもう使えない。これでお別れだね。急かしてしまって申し訳ない。もう少し説明してあげられると良いんだけど」
「ああ、いや、何か色々はこちらこそ世話になったみたいだし」と僕は言った。「聞きたいことは一人暮らしの洗濯物くらい山ほど溜まってるけど、今度会ったときにでもゆっくり聞かせてもらうよ。またいつか会えるんだろう？」
彼はそれには答えなかった。僕の問いには答えず、少し長めの前髪の位置を調整し、わずかに、でも確かに僕にしかわからない程度に微笑んだ。
「時間だ」と彼は言った。

それと同時に、テレビのスイッチを消すように目の前がぷつん、と真っ暗になる。

そして、また沈黙。エンドロールも主題歌も流れなかった――。

『自分が物語の主人公として』

前略

「この手紙を君が読む頃には、おそらく僕はもう――」
という文章を、不謹慎かもしれないけれど、いつか僕は大事な人に宛てて書いてみたいな、と幼少の頃からずっと思っていました。おそらくそれは、この世界中に何千、何億と溢れ返る漫画本や小説、そして映画や音楽、それらを飽きることなく鑑賞し過ぎたせいなのではないかと思えます。でもね、自分をそれらの世界の物語の主人公として見立てることは、その頃の僕にとってはとても魅力的で、とても素晴らしいことのように思っていたのです。そう、それは、身長が高ければ高いほど高い場所に手が届くように、足が大きければ大きいほど、サイズの合った靴が必要なように、十代の頃の僕には、極々当たり前であり自然なことだったのです。
気に入ったシーンがあれば、そのシーンだけを反芻し、気に入ったセリフがあれば、そのセリフをノートに書き取り、自分の部屋あるいはお風呂場で、いつまでもやめろと言われるまで繰り返し繰り返し読み上げていました（特にやめろと言われませんでした）。
このようにして、僕、という人間が出来上がってしまったのだけれど、それが良い結果だったのか、はたまたそれが悪い結果だったのかは、まだ今の段階では結論付けずにしています。だって、まだまだ人生折り返し地点の一手前、結婚もしたばかりだし、親孝行すらしていない。この時点で見切りをつけてしまうことは、何か色々勿体無いと思いませんか？ 君が日焼けを人生で三番目に嫌いだ、と言っていたように、僕は自分の限界を決めることが、僕の人生において同じくらいに愚かなことだと思っています。
とはいえ、ひとは常に何かしらの矛盾を抱きかかえながら生きているものなので、やっぱり僕は、「この手紙を君が読む頃には、おそらく僕は――」と書きたくってしまうのです。

冗談は冗談のうちに終わらせないといけないよね。あまりしつこくしても嫌われてしまっはいけないからさ。

では、差し当たってこの二人旅についての僕の感想を述べさせて頂きたいんだけど、`この手紙を君が読む頃には、おそらく僕は、（まだ言ってる）違う考えや思いを抱いている可能性もあるので、あくまでも現時点での感想だと思ってください。でも、そんなことを言ってしまうと、「え？ 今日と明日で気持ちが変わってしまうってこと？」と、君は不審に思ってしまうかもしれません。そう思ってしまう気持ちは確かにわかります。僕が君だったらそういう印象を受けます。しかしながら、明日、世界が変わるような出来事があるかもしれない、あるいは、待てど暮らせど明日なんて来ないかもしれない。明日の奴は実は怠け者で、こちらが呼びに行かないと一向に現れてくれない、ということになり得るかもしれないのです。
そういった理由から、僕は現時点での思い、というのを君に宛てることにしたのです。

覚えていますか？ 僕らが出会った頃のこと。最初に話した言葉、僕に向けられた君の屈託のない笑顔、少し低めの声、前髪をいじる仕草、僕はもちろんそれらすべて、細かい部分に至るまで覚えています。君はあのとき特に意識していなかったと思うけど、僕はずっつと歳柄もなくドキドキと胸が高鳴っていました。心すら踊っていました。周りに誰もいなければ、もしかしたらスキップくらいはしていたかもしれません。でも、そのときはその気持ちが、今で言うところの愛だとか恋だとか、若しくはその他の何であるのかというのは、よく分かっていませんでした。漠然と思っていたこと、それは、`人生を共に出来るのはこういった人、だな、ということです。それが、どういった理由からそう思ったのかというのはいくらでも後付けすることは可能ですが、あのときはただ直感的にそう思った、ということになります。――そうだね、そのときの気持ちを敢えて表すとすると、ぶらぶらとあてもなく都内を散歩しているときに、表参道だか銀座に差し掛かったあたりでふと目に止まったショーウィンドウ。そこに飾られてあるずっと探していた冬のコート。それを偶然見つけたときの心境でしょうか。そのコートは何処にでも置かれてあり、何処にも置かれていない。よくわからないけれど何か惹かれる。色なのか柄なのか、それともフォルムなのか。あるいはそれらすべてが揃ったことによる全体的な雰囲気なのか。高いけれど手が届かなくはないコート。放っておくと誰かしらが買ってしまおうコート。しかし、僕には似合うかどうか分からないコート。その場からは結局立ち去ってしまうけれど、地下鉄までの道、電車内、最寄駅から自宅への道、ごはんを食べているとき、お風呂に入っているとき、歯を磨いているとき、布団に入って目をつぶったとき、そして朝、目が覚めてコーヒーを飲んでいるとき。気がつくとも覚めてもそのコートのことを考えてしまっているように、僕は君を見た瞬間に不覚にも心を奪われてしまっていました。セーターを選ぶようには簡単には決断できない物事だったけれど、

人並み程度に仲良くなれたのは、その後しばらく経ってから。さらに君と付き合うことができたのはそれよりももっと後。
「もっと早くに仲良くなれていたらなあ」何て、折りに触れて良く話しているけれど、もしかすると、君に会えなかった期間、君と話すことが出来なかった期間、君のことを考え続けた期間、考えることしか出来なかった期間、それらの時間があったおかげで、僕の中で気持ちは自然と育まれ、心の中に貯蓄され、今こうして一緒に居ることが出来るのかなあ、と思えます。もし本当にそうであれば、思いのほか人生はうまく回っているようですね。
ごめん、話が随分逸れました。

二人初めての旅、僕はその旅が決まった瞬間から幸せに満ち溢れていました。発売日を待つ少年のように、カレンダーの日付とにらめっこしながらやっここままでたどり着くことが出来ました。この旅はもちろんゴールではなく、これからが始まりなのだけど（月並みな表現だけど）、僕の長い物語の中の第一章はここでようやくひと段落ついたのではないかな、と思っています。これは何度も言っていることだけど、君に会うまでのやたらと長い準備期間が、とうとう君に出会うことで終わりを告げたのです。

くだらない言い争い、くだらないケンカ、幸せな会話や、幸せなお出かけ、おそらくこれからもこれまで以上に色々なことが僕たちの前に待ち受けており、色々なことが横から後ろからと邪魔をしてくることでしょ。まあ、ある程度は仕方ないこととして受け入れるしかありません。ただ、確信を持って言えることは、僕は君以外の女性を、もう既に愛することが出来なくなっている、ということです（嫌いになる方法すらわからなくなっているみたいです）。
この旅を通し、様々な人に出会い、様々な経験を積み、様々な思いを交わし合ったことで、僕はその気持ちが確信に変わっていくのがわかりました。そして、その気持ちが肌で感じる事が出来ました。
僕は、この気持ちが嘘ではないことを証明するためには、一体どうしたら良いのかを考えました。言った言わないの問題であったり、書き直しが可能な手紙であったりすると、後でトラブルにもなりかねないからね。そんなこんなで思いついたのが、この今の気持ちを綴った僕の心を丸ごとPDFファイルにして保存し、何が起こったとしても編集不可にした上で君に伝えることで、僕のこの正直な気持ちが直に伝わると思うし、それが出来るのなら、今すぐそのファイルを真空パックに詰め込んで、マリアナ海溝奥深く、地球上で最も深い海底の淵へ沈めに行こうと思っています。もちろん、「

そんなことは出来ないわよ」と君は言うでしょう。

ただ僕は、それくらいの覚悟を持った気持ちなんだよ、というのを伝えたいのです。

これから続くまだまだ長い人生。迷惑をかけることもあるでしょう。大変な時期もあると思う。楽しいことばかりではないよね。でもね、笑ってばかりで過ごすことが出来れば、それは本当に素晴らしいことなんだけど、つらい時間があるからこそ、楽しいときが、本当に楽しく感じると思いませんか？
……ちょっと無理やりかな？

まあ、でも、それらをすべてお互いが乗り越えられたとき、そこからまた、僕たちの新しい章が始まるんだと思います。

では、そのときを楽しみに。

『姿を消した詐欺師のように』

頭痛がする。いや、頭痛の残骸みたいなものが、僕の頭のやや左後ろに居座っている。飲めもしない酒を飲んだときくらいの残骸。電車で席に座ると、前の乗客の温かさが僅かに残っているときのような、たまたまふと地面を見たときに、他人の吐いた唾を見つけたような嫌な感触。

どうやら眠ってしまっていたようだ。僕と彼女と僕の父親とその妻、僕と彼女と母親とその夫、僕たち四人を乗せた車は、暗闇をひたすら北に向かって走っていた。何処をどう走っているかまではわからないが、帰る方向からして北に向かって走っているのは間違いない。僕は少しだけ目を開けて外を見る。灯りはなく、特に建物も見当たらない。他に走っている車も見当たらない。横では彼女も眠っているのか目を閉じている。運転席にいる母親の夫は、The Bandの『Long distance operator』を口ずさみながらハンドルを握り、助手席にいる父親の妻は、携帯電話の電波が入らない、としきりに嘆いていた。

眠い。あまりにも眠い。このままもう少し眠っていたい。しかし、眠りの世界のドアはカギこそかかっているが、その向こう側でチェーンをかけてしまっているらしく、片手もしくは片足くらいしか突っ込むことができない。かたく目を閉じてみても、もうこれ以上あちらの世界には戻っていきそうもなかった。困ったな、目を開け続けるにはもう少しいくつかの手順を踏む必要があるのだけれど。

「これはひどいね」としばらくして父親は言った。

「あら……まだまだ復興は先みたいねえ」と母親も続けた。

「ほんとうですね、屋根が崩れますね……」

彼女はいつの間にか目を覚ましており、窓の外を眺めていた。

何の話だろう？ 僕はまだ起きる手順の二段階目あたりをうろろうとしていた為、起きたのを悟られないようゆっくりと窓の外を見渡した。車のライトに照らされ周囲がぼやっと浮かび上がる。赤のカラーコーン、黒と黄色のロープ、寸断されたアスファルト、崩れ落ちた家屋、封鎖された脇道、倒れた木々。大地震の爪痕があちらこちらそこら中にその存在感を撒き散らし、今まだ風化することなく残されていた。僕はごくくと息と共に唾を飲み込む。飲み込んだつもりだったが喉はからからに乾いていて飲み込む唾がなかった。唾は飲み込めなかったが喉はその機能を失っていない。効果的に息だけを気管支に送り込んでくれている。しかし、そんなことより、息を飲む音が周りに聞こえていないか心配だった。それくらい大きな音が響いた気がしたのだ。

四月十四日、二十時二十六分、熊本、大分を震度六強の地震が襲った。それも、日を空けて何度も。言うことを聞かないいたずら好きの子どものように何度も何度も繰り返しこの地を地震が襲ったのだ。気象庁が観測しただけで小さい地震を含め四千回以上も発生している。被災地の人々の恐怖は計り知れない。休んではまた揺れ、休んではまた揺れ、その繰り返し。Over and over again.

僕はそのときオフィスビルの一角でそのニュースを耳にしていた。そして、それは遠い土地のいつもの出来事くらいにしか思っていなかった。テレビの中の出来事、東日本大震災ほどじゃないんでしょ？ くらいにしか思っていなかった。連日流れるニュース、連日流れる被害状況を見ても、特に考えは変わらなかった。そう、今、この光景を目にするまで。屋根が崩れ、玄関が見えない家屋。三階建てが、一階建てになってしまっている家屋。それらを目にするまで。ニュースにならない光景、ニュースでは取り上げられない光景。僕は今それらを目の当たりにし茫然とするしかなかった。結局のところ、自分の身に降りかかってこないことには、あるいはこのように目の当たりにしなければ、どのように訴えかけたとしても、何も、何ひとつ心に響かないのである。

有事の際、僕は何が出来るだろう。大切な人を守ることは出来るだろうか。猫たちは？ 友人は？ ……………僕は何も出来ないかもしれない。僕自身すら守れないかもしれない。果たして僕自身は、誰かに守られるほどの価値があるのだろうか。それくらいの衝撃的な光景。それでも僕は僕を犠牲にしても、大切な人を守らなくてはならない。

「起きてたの？」と彼女は言った。「割と長く眠ってたわよ。そのまま起きないんじゃないかな、と思ったくらい」

「そう？ 今何時？」と僕は言ってから、右手に時計をはめていたことに気がつく。「一もうこんな時間か」

「うん。それより見た？ 凄い光景だったわ」

「あれに比べると、うちは全然よ、ひどいわ……」と母親は言った。

「言葉もないよ」と僕は言った。

「備えなさい」と父親は言った。「何がいつ起こるかかわからない。まあ、起こらないかもしれない。でも、ちゃんと備えておきなさい。どうせ、お前のことだから何の備えもしていないんだろう？ 何もなければそれでいい。それでいいから」

父親はそう言って、また歌の続きを唄い始めた。

「備えないとね」と僕は言った。「せめて君のことだけでも僕は守らないといけないし」

「そうよ、あんたはあんたの大切な人を守ることを優先にきなさい」と母親は言った。

「うん」

「だめよ」と彼女は言った。「ちゃんと二人で助からないと。じゃないとわたし一人で生き残ってもつまらないじゃない。わたしは自分だけ助かるうなんて思わないわよ。だからちゃんと二人で、ね？」

「ああ、もちろんそうだね」と僕は言った。もちろんそうだ、それに越したことはない。

「あ、あと猫ちゃんたちも」

「うん、猫たちも」

あいつらは多分大丈夫だな、と思った。朔太郎は何でも食べるし、誰にでも取り入れることができる。ミシェルも……………ミシェルはやばいな、人見知りでプライドが高過ぎる。ねずみなんて食べないだろうし、鳥も捕まえられる。虫も嫌いだし、野宿もできない。そうするとミシェルがいないと朔太郎もだめになる。やはり全員助ける必要があるようだ。

ある日突然姿を消す詐欺師のように、頭痛の残骸はもう何処かに消えていた。消えない痛みはない、と誰かが言っていたのを思い出す。誰だったっけな。ふむ。そういえば、右肩はどうだろう。……………痛くない。いつの間にか右肩の痛みも消えている。もはやどういふ風に痛みがあったのかすらわからないくらいに消えている。その代わりに左肩が……というわけでもない。きちんときれいさっぱり消えていた。何で消えたんだっけ、何かしてもらったんだっけ、多分何かしらしてもらったんだろう、という記憶だけはある。僕は目を閉じて、眠っていたときのことを詳細に思い出そうとしたが、天気の良い日に山の上から街並みを見下ろしたときのように、頭の中全体に薄くもやがかり、どういふわけかうまく思い出せなかった。かろうじて覚えているのは、一匹の生意気な猿の笑顔だけ。猿？ 猿って何だ？

「どうしたの？」と彼女は言った。「今まで排水溝の中にいて、さっき出てきましたみたいな顔してるわよ。三白眼。

それって三白眼っていうのかしら？ 眠る前と後で五歳は老けたように見えるわ。ふふふ」

「ああ、僕もそう思う」と僕は言った。

「え？ 排水溝の中にいたの？」

「あ、いや、そうじゃなくて」

排水溝だって？ そういえば昔、便槽にはまって死んだ奴がいたな。

「本当にあなたは冗談が通じないわねえ」
「まあ、面倒臭さが僕の売りだからね」
「そんなの誰も買わないわよ。あ、でもうまくいったみたいね」と彼女は言って、僕の顔を覗き込んだ。「あなたがいなくなるとわたしの存在の意味がなくなるんだから、ちゃんとしてもらわないとね」
「どういうこと？」と僕は言った。
「そういうこと」と彼女は言った。
わけがわからない、と僕は思った。

ホテルに戻ったのは、もう午前0時を回ったところだった。別府の街はあらかた静まり返っており、通行人もほとんどいない。電車の音もせず、車の往来もまばらで、ホテルのロビーから漏れる光だけが場違いな冠婚葬祭の参列者のように煌煌と辺りを照らし、道に迷う旅人を誘い込むB級ホラー映画のように佇んでいた。誰でも入ることは出来るが、誰もそこから出ることはできない。何かの歌の歌詞でそういう話があったな。僕はうろ覚えながらもその一節を口ずさむ。

「We are programmed to receive, You can check out anytime you like... but you can never leave」

「その歌好きよ？ わたし」と彼女は言った。

「本当？ 何だったっけ、この歌」

「Such a lovely place」

「ああ、あの歌か」と僕は言った。「サビを聴かないと思い出せなかったよ」

「老化現象ね」

「君より若いけどね」

「あら、気持ちは多分あなたより若いし、柔軟性もあるわ」と彼女は言って、ふふん、という顔をした。

「僕は酔っ払って、インドネシアに電話はかけないよ」

「うるさい」

「寝ぼけて通販で買い物はしないし、携帯電話を冷蔵庫に入れてそのまま忘れてもしないよ」

「うるさいわね。それは老化とは関係ないわ」

彼女はふん、と言ってつかつかと先にホテルのロビーに入って行った。

僕はその後ろ姿を眺めながら、この幸せが長く続けば良いのになあ、と思った。本当に続けば良い。あまり幸せ過ぎると、いつかその幸せが終わるんじゃないだろうか、という錯覚に陥る。夏休みもいつか終わってしまうように。

夜空を見上げると、はくちょう座とわし座が見下ろし、「まあ、それは君次第なんじゃないかねえ」と言った。雲も無く、綺麗な夏の夜の空が広がっている。心地良い風が吹き、道端のかやつりぐさもさやさやと揺れていた。

「やっぱりか、実は僕もそう思う」

はくちょう座とわし座は、ふふん、という顔をしている。

「君も黙ってないで、何とか言ってやりなよ」とはくちょう座はこと座に向かって言った。

こと座は先ほどから黙ってただこちらを見ていた。大体、こと、が喋るなんて話聞いたことがない。仮に実際に喋るとして、どういう風に喋るのだろうか。もしかしたらこと、だけに、歌うように喋るのかもしれない。こと、だけに。そんな風に喋るとしたらミュージカルみたいな奴だな、と思った。

「まあ、強要しても仕方ないさ。彼は滅多やたら無駄に喋らないんだ」とわし座はひとりだけ大人ぶる。「それにしても君は不思議な運命の下で生きてるみたいだねえ。うん、君と、君の奥さんもね」

「不思議な運命？」と僕は訊く。

「そうさ」と今度ははくちょう座が口を開く。「不思議な運命、数奇な運命、言い方は色々あるだろうけどね」

「ふむ」

「まあ、楽しいことには違いないよ。一生こと、に出会えないひともいるからねえ。多少面倒に思う日もあるだろうけど。多少、というかかなり？」

それは良いことなのか？ まあ……良いことなんだろう。そう思いたい。面倒であっても、楽しくないよりは楽しい方が良い。そりゃ、もちろん。面倒だからこそ、楽しさが活きる。

でも、僕はちょっとだけこと、かなり、っていうのがどれくらいこと、かなり、なのか気になった。ちょっとというよりこと、かなり、気になった。しかし、気にはなったが、聞かないことにした。聞いたところでどうせ彼らは教えてくれないだろう。こと、かなり、気になるけれど。

「君次第だ」とこと座は言った。

「え？」

「君次第でどうにでもなる」

こと座はそれだけ言うと、また沈黙の海の中に身を沈め、はまぐりのように口を閉ざした。

「うん、ありがとう」と僕は言った。

喋ったな。不意打ち過ぎて、何処から声を出していたのか確認し忘れてしまった。ミュージカルではなかったのは間違いない。

「ま、うまくやりなよ。君にはそれが出来る」とわし座は言った。

「つながる人生、紡ぐ人生」

はくちょう座は、よくわからない良いこと風なことを言った。

「何をまたぶつぶつとひとりで喋ってるの？」

彼女はロビーで待ちかねたのか、入り口でぼうっと上を見ている僕のところまで戻って来て、僕の顔を訝しげに覗き込んだ。訝しげに覗き込まれるのはここ最近で二度目だ。「あなたが来ないと部屋に入れないうですけど」

「ああ、うん、ちょっとね。でも、フロントでカギ貰えるよ？」

「知ってるわよ。だから早く貰ってきて」

「仕方ないなあ」

「待っていてくれたのか。かわいい。」

「はやくいこ？」

「うん」

はくちょう座たちはもう誰も口を開かなかった。

僕はもう一度空を見上げ、流れ星を探す。そう都合良く星は流れてくれないのはわかっていたけれど――。

『旅、そのとき僕らは』

久しぶりにぐっすりと眠れた。何も留保することなく眠りに身を任せることが出来たのは、本当に久しぶりのことだった。いつぶりだろう。いつも、何かしらの不安を抱えていたし、眠ろうとしたり、眠りについた後で、大体何かに邪魔されていた。一度夢の中でナウマンゾウに一方的に非難されたこともある。その夢の中のナウマンゾウは、鼻も短い体も小さいし牙もない、おおよそナウマンゾウとは呼べないような生き物だった。どちらかと言うと馬に近い。それでは何故ナウマンゾウとわかったのか？ 簡単なことだ、ナウマンゾウ側の自己申告である。

「こう見えてナウマンゾウなんだよね」とナウマンゾウは言う。
「君がナウマンゾウと言うからには、ナウマンゾウなんだろうね」と僕は言う。
「でも、実は僕も自分のアイデンティティに自信が持てないんだ」とナウマンゾウは言う。「あなたみたいな何も考えていないような人間には、こんな僕の高尚な悩みなんて理解出来ないだろうけど」

絶滅動物による突然の辛辣な言葉に多少面食らうが、僕は黙って続きを待つ。ナウマンゾウは続ける。
「僕だって、周りのために、親が喜ぶところを見るために、ゾウの身体になろうと努めた。`象、という字も練習した。体も毎日マッサージしながら、大きくなれ、大きくなれ、と願った。あなたレベルでは想像すら出来ない努力だよ。わかるかな？ 日本語を知らないのに、日本語の司法試験を受けなければいけないくらいの厳しさだよ。……わからないだろうな。あなたみたいな凡人以下の人間は、上に行こうという努力の意味さえもわからないだろうね」

ナウマンゾウは、はあ、と溜め息をつき、僕のやや斜め上辺りから僕を見下ろした。字の練習？
「そして、早々に自分自身に諦めて、体調不良のせいにして、満員電車のせいにして、穴の空いた靴のせいにして、セットの決まらない前髪のせいにして、お金が無いせいにして、乾かない洗濯物のせいにして、終わらない仕事のせいにして、ぜんぶ他人のせいにして、ぜんぶ社会のせいにして、飲めない酒でも飲んで、少しでも自分より下の人間を見つけることに時間を費やし、そいつをやたらと蔑むんだらう？ ダメな人間の見本だな。そんなんじゃ誰もついて来やしないし、誰からも相手になんかされない。孤独、そう孤独な人生だな」

僕は辛抱強く黙ってナウマンゾウの話聞く。そもそも本当にナウマンゾウなのか？ いつの間にか僕の批判に変わっている。

「わたしは違う。あなたとは違う。断じて違う。大手町と浦安くらい違う」

東西線……？

「努力という言葉も知らないあなたとは、成り立ちから全然違うんだよ。あなたは失敗から何も学ばない。何も覚えがない。何かをやり切ったこともない。突き詰める気配すらない。そして、誰かを泣かせ、自分は笑うんだ。僕はそれで絶滅した。絶滅したんだ。妻もいた。子どももいたのに。……反論があれば聞きましょう。どうせ無いだろうけど」

そこで僕は目覚めた。反論する隙なんてなかった。その夢を見て当時は随分悩んだものだ。人のアイデンティティの悩みを聞かされ、自分のアイデンティティの迷路に迷い込んだのだ。ハインリッヒ・エドムント・ナウマンも、まさか百年ほど経ったある日に自分の研究対象であるナウマンゾウが、アジアのちっぽけな島国の青年の夢に出てくるとは思わなかっただろう。

何かを象徴しているのか、していないのか、確かにあのとき僕は、迷路に迷い込む前から悩んでいた時期だった。もしかしらあのゾウは自分自身だったのかもしれない。自分自身が自分自身を責める。自分自身が自分自身を蔑む。何でゾウなんだよ、という疑問は残るけど。夢なんて大体そんなものだ。

昨晩については、そんな風に夢を見てたかどうかは覚えていない。まあ、深く眠っているときほど夢は見ないというのが定説と聞いているので、多分見ていないのだろう。裏を返せば、見る必要がないという精神状態と言える。驚くほど安定しているし、驚くほど優しい気持ちになっている。そういうとき僕は特に夢を見ない傾向にあるようだ。幸せなときほどそれを言葉にする必要がないのと同じで、つらいときほど誰かに聞いて欲しいし、誰もいなければ夢にはけ口を求めてしまうだろう。

「ありがとね」と僕はドレッサーの前で化粧をしている彼女に向かって言った。化粧は第二段階が終わり第三段階に入ろうとしていた。

「え？」

突然のことで彼女は何のこと？ という顔をしている。

「感謝の言葉を述べたんだよ」

「感謝？」と彼女は言った。「一体何についての感謝なのかしら？ 覚えがあり過ぎるわね。ねえ、悪いんだけど感謝の対象を明確にして頂けるかしら？」

「全部だよ」と僕は言った。「一緒にこの場所まで来てくれたこと、一緒に今こうして居てくれていること。家では猫たちを可愛がってくれていること。ご飯の用意だったり、部屋の掃除だったりの何や彼や。結婚してくれたことだってそう、これからの人生を一緒に歩んでくれること。うん、そうだね、機会がないとなかなか言えないからまとめてになっちゃうけど」

恥ずかしさもあるが、言わなければ伝わらないことは言葉で伝えなければいけない。

「ふ、ふうん。良い心がけね」と鏡越しの彼女は照れているように見えた。

「あ、あとね」

僕はひとつ咳払いをした。

「生まれて来てくれてありがとう」

『エピローグ』

「気をつけて帰るんよ」

空港まで送ってくれた母親は、愛車の軽自動車の助手席の窓を開け、それじゃまた、と言ってそのまま走り去って行った。あんまりあっさりとしていたので、また来週にでも会えるんだっけ、と感違いしてしまいそうだった。

「来週にでもお母さん東京来るの？」

彼女もやはり感違いしている。

「いや、来ないと思うよ」と僕は言った。

来ないと思う。多分。

「ふうん、そっか」

「うん、まあ、また来ようね」

「そうね」

年に数回会えるか会えないか。それは地方出身者の運命とも言える。実際にしばらく会えそうもない。休みも取らなければいけないし、お金だってかかる。休みなんてそう簡単に取れないし、旅費も馬鹿にならない。

年に数回か……と僕はふと思った。年に数回会えるか会えないかとなると、確実に会えるのは年に一回。両親があと二十年ないし三十年は頑張ってくれてくれるとして、単純に考えて自分の両親にあと二、三十回しか会えないという計算になる。なるほど、これは考えなければ良かったな、という問題である。まあ、考えなければいけない問題でもある。しかし、考えてしまったら最後、何とも言い難い気持ちになってしまう。そういった類いのものだ。作る過程を見せようと、途端に食べる気持ちが失せてしまう料理と同じカテゴリーかもしれない。これからはもっと頻繁に顔を見せよう。そしてもっと親孝行をしよう。落としたアイスクリームが、地面に染み込んだ後で後悔していたのでは遅いのだ。

飛行機の搭乗券を発行するためには、自動発券機のちょっとした列に並ぶ必要があった。この土地から離れることが名残惜しいのか、並んでいるそのほとんどの人が下を向いて並んでいた。でも、実はそうじゃなくて、床の上に皆の興味を引く何かが描かれているのかもしれない。それで皆が皆同じように下を向いているのかもしれない。僕は念のため皆の視線の先を追って下を向いてみたが、残念ながらそこには特に興味を引かれるようなものは見つからなかった。誰かの長い髪の毛と、中身の無いガムの包み紙に興味がある人にはさぞ魅力的な光景かもしれないけれど。

彼女はガムの包み紙を拾い上げ、無言でそれを見つめる。十秒ほど見つめた後、またもや無言で僕のズボンのポケットに包み紙を突っ込む。そして、こちらを向いてにこにこ微笑んだ。彼女からは特にそれについて特別な理由の説明はなかった。多分、理由を言うくらいなら初めからそんなことしないわ、ということなんだと思う。なので、僕としても特にそれについてのコメントは差し控えた。笑顔には笑顔で返すに尽きる。笑顔でいれば、何もかもがうまくいく。紛争すら起きない。紛争が無ければジュネーヴ協定もいらないのだ。髪の毛の方じゃなくて良かったな、と思った。

彼女は今度は、髪の毛なんて触わるわけじゃないじゃない、という笑顔を見せる。彼女は実におそろしいくらいの種類の笑顔を持っていて、そのひとつひとつをその場その場でうまく使い分けている。最初は怒っているのかただ笑っているのか今ひとつよくわからなかったが、最近では何となくわかるようになってきた。こうして僕たちは確実に夫婦になっていくのだろう。

僕は頃合いを見てズボンのポケットに突っ込まれたガムの包み紙を、今度は彼女のスカートのポケットの中へと突っ込むため手を伸ばす。それを彼女は右手で阻止しながら笑顔で僕を睨みつける（彼女は笑顔で相手を睨みつけることも出来る）。次にやったらただじゃおかないからね、という笑顔。最初に始めたのが誰だったのかを完全に忘れていた笑顔。こう着状態。

なかなか捌けない発券機前の列を見兼ねて、航空会社の地上勤務職員の女性が、先頭客に発券操作の手ほどきを始めた。どうやら年配の男性が、ああでもないこうでもないをやたらめったらに機械をいじっては、入力エラーになったり始めの画面に戻ったりを繰り返しているようだった。発券手続きもこう着状態である。

「お客様、フライト番号はご存知でいらっしゃいますか？」と職員は言った。

「フライト……？」と年配の男性は言った。

「本日ご予約されている飛行機の予約番号でございます」

「ふむ。予約番号……」

「予約番号がわからない場合は、こちらの機械では発券手続きが出来ません。大変申し訳ないのですが、あちらのカウンターにお並び頂けますでしょうか？」

「でもわたしは飛行機の切符が欲しいだけなんだがねえ」と年配の男性は主張する。

「申し訳ありません。お客様は本日どちらまで行くご予定ですか？」と職員は我慢強く年配の男性に言った。もちろん笑顔も崩さない。「お客様のご希望されている飛行機のチケットは、あちらのカウンターでお手続きさせていただきますので」

「沢田さんに会いに行くんだ」と年配の男性は言った。「沢田さんは歳の割に背が高くって——」

「さようでございますか、それでは沢田様はどちらにお住まいなのでしょう？」

「わたしの名前は杉本だ」

「え、あ、はい、失礼しました、杉本様。本日はどちらまで渡航されるご予定でしょうか？」

「沢田さんに会いに行くんだ」

「さようでございますか……では、沢田様はどちらにお住まいなのでしょう？」

「わたしは西東京市に住んでいる」

「はい……」

堂々巡りのようだった。

僕たちは搭乗手続きの時間までまだ多少余裕があったため、杉本さんのその後が気にならなくはなかったが、発券手続きを後回しにしお土産売り場をのぞくことにした。少し時間をつぶせば何とか事態は好転していることだろう。

「グランドホステスも大変ねえ」と彼女は言った。

「大層な名前の割には、意外と地道な仕事なんだね」と僕は言った。地道だし、面倒そうな仕事だ。

「当たり前じゃない。何だと思ってたのよ」

「背が高いホステスか何かだと思ってたよ、沢田さんのように」

「はいはい」

僕ならこういう場合どういう対応をするだろうか。二分でお手上げになる気もしないでもない。理解しようという努力を放棄した人間に、一体何を教えられるというのだろうか。会話というのは、相手はこちらの話を理解しようと努める姿勢と、こちら側が相手に対して理解出来るように説明しようとする姿勢が合致したときに、初めて成り立つものな

のだ。では、何故こうも一方的な場面が生まれてしまうのだろうか。それは、日本人が説明し過ぎる傾向にあることが関係しているかもしれない。電車の乗り換えアナウンスが良い例だ。根が親切といえは聞こえはいいが、`親切、が`甘え、を生んでいることに早く気付くべきである。一、二分電車が遅延しただけでわあわあ騒ぐひとを生んでいるのは、甘やかした日本の社会なのだから。

いつものようにお土産屋で名産を使って作られた調味料を物色した後、発券機の前に戻ったときにはもう既に列もあらかた片付いており、杉本さんも何処かにいなくなっていた。杉本さんは無事チケットを発券出来たのだろうか。そして無事に沢田さんに会いに行く飛行機に乗れたのだろうか。歳の割に背の高い沢田さんに。

搭乗手続きを済ませ、搭乗ゲート付近のベンチに腰を下ろし窓から外を眺めていると、ずんぐりとした大きなむくどりのような飛行機たちが、こちら側を向いて佇んでいた。航空会社毎にその並び方は不均等で、列をはみ出したがる思春期の子もたちのように見えなくもなかった。はみ出している割にこちらを見つめているため、教壇を挟んで見つめ合う先生と生徒の関係のようでもある。大きな生徒だな、と思った。

隣りに座っている彼女は、窓から差し込む淡い光に身を包み、腕と脚を組んで目を閉じていた。前髪はおでこにかかり、後ろ髪は束ねてひとつ結び、束ねられて露わになった首筋のネックレスが光に反射し、首筋から鎖骨にかけてが何か特別な湖のようにも見えた。それは美術館の肖像画のような完璧な姿だった。足りないものは何もないように見えた。

しばらくすると搭乗開始のアナウンスが流れ、一斉に周りの客たちがベンチから立ち上がる。それでも彼女はまだ目を閉じている。僕も余裕を見せるためそれに合わせて目を閉じる。

「もう乗らないと」と彼女は言った。「あなたはほんとと寝てばかりねえ。ほら、起きて、ほら」

「ん、うん」

ずるいな……。何だかはめられた気分だ。搭乗口を通り、大きな動物の腸のようなうねうねとした長い廊下を抜け、僕たちは機内に乗り込む。客室乗務員が搭乗券と搭乗券に書かれた座席番号を確認し笑顔で誘導する。職業上必要な60~70%くらいの笑顔。僕たちも同じくらいの笑顔返す。行きと同じ非常口付近の席の上の棚にトランクを入れ、手荷物を座席の下に置く。三人掛けの席。窓際に彼女、真ん中に僕、通路側は空席。とりあえず誰もこの席には座らないようだ。

「何だかあつという間だったね」と僕は言った。

「そうね」と彼女は言った。「でも、こんな長い旅行は初めてだから、忘れられない思い出が出来たわ。ほんと、楽しかった。しばらくはこの余韻を楽しめそう。また来ようね！」

飛行機が関西上空を飛んでいる頃、僕たちは浅い眠りと覚醒を繰り返していた。夕方の便だからなのか他の乗客も眠っているようで、機内は心地良い沈黙が支配している。時折り鳴るポンというシートベルトの着用サインだけが、機内全体に響き渡っていた。

この旅を通して僕たちは――。

「――日本酒は無いのかね？」

僕が旅の総括をしようとしていたそのとき、斜め後ろの座席から何やら揉めているような声が聞こえてきた。

「お客様申し訳ございません。あいにく当機は缶のビールしか御用意がなく……」

客室乗務員の女性が対応に苦慮しているようだった。

「日本酒がない？」と男性は言った。

「申し訳ございません」

「日本なの？」

「申し訳ございません」

「仕方ないねえ、じゃあ焼酎はどういう銘柄があるの？」

「お客様、大変申し訳ございません、アルコールは缶のビールしか御用意がなく……」

「焼酎もないの？」

「申し訳ございません」

「じゃあ、何があるの？」

「先ほど申し上げたように――」

これはもしかして、と思って座席と座席の間から声の方に目をやると、やはり揉めていたのは杉本さんだった。

「この声って、もしかして杉本さん？」と彼女は言った。彼女の位置からは見えないようだったが、声の感じで気付いたのだろう。

「そうみたいだよ」と僕は言った。

「あの人は揉め体質なのね、きっと」

「話を鼻から聞く気がないんだよ、きっと」

「周りで見ている分には良いけど、当事者のCAさんも大変よね」と彼女はさほど大変ではなさそうに言って、もうそれについては飽きたのか、肘を付き片手を頬に当て、窓から見える景色を眺め始めた。

「あと、非常口に近い席に移動してもかまなかね？」

……やれやれ。何だか嫌な予感しかしないな、と僕は思った。

「おかえりなさいです！」

玄関のドアを開けるなり、朔太郎がこちらに駆け寄ってきた。

「朔ちゃん、ただいま！」と彼女は言った。「ミシェルは？ 朔ちゃん」

確かにミシェルが出てこない。いつもなら眠い目をこすりながらも、必ず玄関まで来るのだが。

「ミ、ミシェルですか？ あ、ええっと、その、あの」

彼（猫）は明らかに動揺している。

「ミシェルはどうしたの？ 朔ちゃん」と僕がもう一度訊ねた。

「と……」

「と？」

「と、とこれにはいません！」

トイレにはいない？ 僕と彼女は顔を見合わせる。一体どういうことなのだろう。

「トイレにいないってことは、トイレにいるってことね」と僕は言った。

「トイレでミシェルは何してるのかな？ 朔ちゃん」と彼女は笑顔で訊ねる。

「ぼ、ぼくは知りません！」と彼（猫）は言って、リビングの方へ走って行った。

とりあえず僕はトイレへと向かった。うちのトイレは、洗面台とトイレが一緒になっており、ちょっとした収納もあるため、普通は猫たちが入れないようにしてある。トイレにいとるとなると、ドアがあるからドアを開けたということなのか……。

「く、苦しい……」

トイレからミシエルの声が聞こえる。僕はおそるおそるトイレを覗き込んだ。するとそこには、仰向けの格好で天井を見上げているミシエルがいた。

「何してるのかな？」と僕は言った。

「は、あ、いや、ただ寝ているのよ。見ればわかるでしょ。なに？ いま帰ったの？ おかえりなさい」と彼女（猫）は言った。ちょっとそっけない。

「うん、ただいま」

寝転がったミシエルは妙にお腹が膨れ上がっている。

「寝ているのはわかるよ」と僕は言った。「僕が言いたいのは、何でこんなところで寝ているのか、ってこと」

「苦しいから……あ、いや、何処で寝ようがわたしの勝手でしょ！」

「そっか」

僕はその場にしゃがみ、ミシエルの身体を抱き上げた。

「カリカリの食べカスが口の周りについてるよ？」

「な、何の話だかわからないわ。そ、それより離してちょうだい！ 馴れ馴れしく触らないで！」

「……それはちょっと無理があるねミシエル」と僕はため息をつく。「寝込む、腹が膨れる、口の周りの食べカス、苦しい、そして一ストックのキャットフードが空っぽになっていればさすがの僕も気付くよ」

そして僕は、彼女（猫）を床に下ろし、にっこりと笑いかけてから、トイレのドアにカギをかけて閉じ込めた。

もちろん、外側からである。

『旅、そのとき僕らは』

<http://p.booklog.jp/book/109527>

著者：朔太郎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jedimaster/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109527>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109527>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ